

此日佛國ルーナー新内閣の組織成る

昨日ドレーフェスの死去を報じたる新聞あり、虚報

本日海軍省の出張所を訪ひ、今夕日本人會にゆく

▲日本人會 荒川領事の住邸を會場として開かる、午後七時半先づ日本飯あり、終りて開會、會長荒川氏前回の事を報告し、次に新會員及び客員の紹介をなさしむ、知己の人々紹介す、新會員は姑らく置き、此夜の客員は酒匂農商務書記官、早川大蔵書記官、某内務書記官、某大學教授、戸塚海軍々醫、下總の國は成田山某寺の住職、及び予など都合約十人にして、予に付いては海軍造船少監櫻孝太郎氏紹介し、呉れられたり、其れより書記會計の改撰あり、寄附金の報告あり、終りて雑談となり散會したるは十一時頃なりしが、此夜の出席會員二十餘名にして、孰れも重立ちたる官吏若くば會社銀行員等所謂紳士紳商のみなり、此會員外に少數の商人あれども、其れとて左程淺間しからず、之を要するに日本人を此英京に代表するの人物は悉くセントルマンと謂つて可なり

本會は明治早年の創立にかゝり、最初は書生の討論會、長岡護美、菊池大麓、尾崎三良等諸氏の時代なりしが、後漸次に變じて今日の社交俱樂部となれるにて、約二三百磅の資金あり、會費は各出席者一回三志餘にして、會員は別に一磅づゝの年醜金を

なし以て會費の不足を補充し乃至資金を合入す、開會は七八の兩月を除き毎月一回にして、今回は實に第三百二十回の開會なりけり、何にもせよ遠き外國に於て斯る團體が永續するは結構のことあり

六月二十三日 金曇、六十九度

六月二十四日 土、同

▲男女の服装及び携帶品 是れ亦外形上の事なれば、予は着後の注意注目に依りて、其概略を諸君に報道するを得べし、但し予は日本に於ては只自分の着せる衣服が綿布なるを知れるのみ、其他に於ては何が何やら一切無感覺無頓着の無骨漢なれば、今本項を記するに付ても何が日本と異なるか同じきか、其等を比較すること能はず、單に當地のみの所見を有りのまゝに書付くるのみ、諸君諒せよ

日本流にて先づ第一に男子に付いて記せんに、當地男子は其土人なると旅人なるを問はず、途上乃至公園其他にて見たる所、服は平均約十分の四がフロックにして、十分の一がモーニング、残る十分の五が背廣なり、割合に背廣の多きは當地名に負ふ如く貧民多きが爲めにして、背廣は丁稚番頭雇人等の幾部を含み、其他は悉く貧民なり、而して帽はフロックとモーニングの全部及び背廣の少部分(即ち十分の五乃至六)が絹帽にして、餘をフェルトの丸帽となし(所謂山高男子荷も帽を被らざ

るものを概して之を貧民と看做さる。故に丸帽がものいひかけて概ね之れに答へず取り合はざるを例とし、若し前に報せし如く萬止むを得ず路を路人に問ふにも絹帽に就いてするを安全と考へらる。

背廣モリーニングは予別段目にも留めず、また目に立つ所もなければ、フロックは襟廣く、折かへしたる所に左右約二寸づゝばかりの裏毛襦子か、現はれ、腰の所稍巾廣くて、パツとひろがり丈頗ぶる長くて膝以下に垂るゝもの少からず、ズボンも通例縞羅紗ながら、無地か縞か分らぬ位のものにて、其他モリーニングは固より背廣と雖も黒を最とし、然らざるも極めて暗く濃き色なり、但し稀れには鼠色位のフロックを見ることもあれども、之をすぶるに男子の衣服は徹頭徹尾目に立たぬ、暗き色デミな柄に限られたるが如し、予の着せる頃は尙外套の時候なりしが、外套は十の八九天鷲絨襟のかゝりたるものなりき、此頃は段々暑くなりたれば、時々茶か鼠地の麻に小飛白を點じたるチョッキ着たる若紳士を見る、是れ洒落者といはるゝ側にて、其チョッキに至りては寧ろ飛抜けの大洒落なり、蠟人形のデイスレリー卿儘に白のチョッキを着たり。

(四十五) 倫敦 (續)

▲男女の服装及び携帶品(承前)   ズボンは亦にもあらざれば左はど大ならず、カライは高くカフスは廣し、チキタイは十中九までは結びて前に垂れたるものなり、而して其携帶品はいと細き傘或は袋入りのまゝ、或は同じくいと細く輕き杖と一方の手には多くは鶯色の手袋を必ず携へ、實に絹帽、フロックコート、細き傘或は杖、手袋だけは、男子外出の必要品、必要條件、必要資格(時計の金銀までは吟味するものなし)而して其他に於ては少々の小包物、或は頗る大なるものさへ携ふるものあり、平氣なり、但し鹿呂敷袂紗等は下女と雖も携へず、悉く鶯色の紙包みあり(新聞紙に包みたるもの一度も見ず)

時風の大觀は先づ斯くの如し、されば洋行歸りの人等は此大觀を見も、こゝしけれ、倫敦にゆくから、先づ以て帽とフロックを買はざるべからず、日本邊にて調へたる服は到底着らるべきものに非ずと口々に申し居たり、されど來て見れば左には限らず、流石都會は都會にして、大体こゝは右の如くなれ、時候後れ風變りの服装せるものも亦少からず、阿茶服か麻上下に非る限り、態々見て呉れる程の閑人もなきなり、されど人と逢ひ人と交はるなどには、普通の体裁服装をなすに増すことなけれ、新來者は服を日本で造らず、當地にて造るを便とすべきなり、價は評判程高からず、フロック上二つにして二十圓蓋よりあり、三十圓も出さば先づ中等なるが如し、

絹帽は五圓以下よりあり、十圓は普通の上等なるべし

男の靴は黒のボタン詰多し、赤革稀れにあり、白革は亦餘程の洒落者なり、價は仕入物は一圓臺よりあり、五六圓ならば可なりの品なり、注成品は數割高しと知るべし、次に女子に就いて記せんに、女子の服も多くは羅紗にて、夏季なれば薄物を着るものあれども、其れさへ縞子か吳縞位にて、絹を張り込んでも先づ甲斐絹なり、若し夫れ縮緬以上に至りて、貴族富豪に非ざれば之を着ること能はず(但し絹は日本産は佛國産に比して其品位大に劣る)

柄は頗る派手なるものあり、されど黒を以て高尚となし、中流以上、中年以上の女子別して多く黒を着る、右は通常の働き日より進んで日曜日、晴着か一寸の客席位までの所見なるが、其以上例の舞踏會夜會等の服に至りては、奢れば價は無限なり、通常の女子服は日本の女子服に比して高價ならず、上下一着一磅にてさへ可なりものあり、而して夜會、舞踏會等に參與する女子は、倫敦女子の何分に當るか、是れは他日の査察に譲る

乳母、子守女、及び小兒、子守り付きのものは殆んど悉く白衣を着る、金巾ながら汚れたるものなし

女子の携帶品は白、稀れには黒の革手袋、少くとも其片方を穿ち、右手に傘を持てば

左手小さき紙入(パス)に乗る等の小錢入れなりを携ふるを常例とし、男子は小錢を衣囊に納め、女子は必ず紙入を携ふ、其他例の紙包を携ふるは下女か中以下の細君なり

外に男女の必要なる携帶品あり、地下地上の汽車に於て、バスに於て、キャブに於て、少くとも其半數は新聞紙或は小冊子を携ふ、固より單に携ふるに非ず、之を讀むなり、バスの屋根上に於て然り、地下鐵道の燈下に於て然り、長途然り、短途然り、晝然り、夜然り、貴女然り、紳士然り、丁稚番頭下女然り、貧民然り、勞働者然り、是れ予が自分職業の我田引水の爲めに非ず、一般智識の程度に於て、其人民の風尙に於て、健美にたへざる所のものなり、況んや其新聞紙に於ては我邦の所謂三面種子なるもの、鐘太鼓にて搜索するも斷じて一も發見する能はざるに於てをや

(四十六) 倫敦 (續)

▲フリス、ゴサン、キエー、風俗の事は尙今後の觀察に待つべきなれども、差向き意外に感じたるは當地男女の「おとなしき」事にて、男子固よりおとなしく、女子に至りて更にねどなし、されば言語も頗る付きの丁寧にして、予の如き粗忽者は餘程々々注意して舉動聲音を慎しませれば、否な随分慎しみて、動いては輒ち亂暴に

わたし言ふては屢々高聲に遇まつ、さらば當地人は因循惰弱得動かず、得言はざるかといふに、決して左に非ず、其左に非ず」と申す所に、一の妙味ありて存するなり。是れは後日決して左に非ず、去る程にブリースとサンキエーの二語は、旦那モシエ兩の輕薄なる口調に非ず、さりとて特別珍重の敬禮に非ず、普通平等の口禮として行はれ、サーの敬稱亦屢々之を聽く。男女老若賢愚尊卑、假にも口よりはなすべからざる所のものなり、今其數個の例を擧げんに

停車場にて切符を買ふ、何處まで片道ブリース、切符を受取るに先だら、幾何と問へば、三片ブリース、彼は錢を受取り、我は切符を受取りて、サンキエー、サンキエー、プラットホームの入口にて切符を切るとき、サンキエー、サンキエー

汽車に乗るとき少し込んで居れば、ブリース、よけて通す、サンキエー、バス然り、キヤオ然り、茶店にて、茶を一杯下さい、ブリース、此方へおかけ下さい、ブリース、何々上げませうか、何々を下さい、ブリース、勘定ブリース、六片ブリース、金を渡して、サンキエー、金を受取りて、サンキエー、自宅にて下女水を下さい、ブリース、是れでよう、いませ、か見て下さい、ブリース、其れで宜しい、サンキエー、下女亦サンキエー

食堂にて、ボーイに向つて、ジョン、バターを廻はして、下さい、ブリース、廻はす、サンキエー

立番の巡查に向つて、何處へゆく道を教へて下さい、ブリース、教へる、一片遣る、双方サンキエー、サンキエー、(但し巡查に金を與ふることは不案内の旅人の事なり、少しなるれば與ふることなし)

前にも一寸述べし如く、途に突當られて自ら急に御免なさいといふを禮とす、如何に其辭令の鄭重温雅なるかを察すべし、而して其くどくない所に、一の妙味ありて存するなり

▲倫敦の犬 犬を外國より連れ來ることは、豫め農務局の許可を得るに非ざれば、能はざることなるにも拘はらず、當地犬は頗る多く、一戸數頭を飼ふもの少からざれば、蓋し平均一戸一頭以上の割合なるべし、されど之を戶外に出すには必ず轡を嵌めざるべからず、故に狂犬病等の危虞なし

▲倫敦の猫 一大商品なり、廣大なる猫市場さへあり、小鳥屋、家畜店皆な猫を賣る、毎戸悉く猫を飼ふ、鼠こそ笑止なりけれ

▲鶏と鶏 鶏を飼ふ家多し、鶏は稀れなり  
六月二十五日 日晴、七十度

明日は東の極端に午餐にゆくの約あり、其れで一日潰れなり、明後二十七日はニエー、Iカッセル(三百哩内外)に於て日本帝國の最大戰艦初瀬の進水式あり、過日造船

監督松永少將(晚餐に付き)及びアームストロング會社(進水式に付き)より案内ありたれば予は無論ゆくべきに決し、直に其旨返書し置きたり、而して當日朝當地發、先地一泊の上、成るべくは歸路マンチエスタに迂廻するの心算なれば、明日以後數日間の記事は、之を歸京(倫敦へ)後に譲らざるを得ず、諸君諒せよ

(四十七) 倫敦 ニューカッスル行

六月二十六日 月晴

此日東端なるフォレストゲートに住するレバンドパンサイド氏宅に午餐にゆき、晚景に歸る、氏明治の初年日本に在り、其二男二女の内、一男二女は猶長崎に住す(但其嬢の一人は當時暫く歸郷しあり)随つて予に對する待遇特に懇切なり、東端行に付き一笑話あり、抑も倫敦の東部は、其實の如何は姑く措き、貧民窟惡黨窟として世界に有名あり、去る程に今より數日前、多年當市に住する日本紳士に會して談此事に及びし序で、予は右フォレストゲートは如何と問ひしに、紳士は手を振り、決して、近寄りぬが上、分別と注意し呉れたり、而して該地方の状態に關して説く所に曰く、(前略)之を要するに、該地方は政令の及ばざる所なれば、土着の人士と雖も是に行くには、蔽衣汚面に身を篋して全く貧民に混同し、さてパスに乗りて白

晝三時頃までの間に街路を通りて歸ることなり、若し美しき服裝をなし、乃至車外にさまよひ出づる等のことあらば、其危険測るべからず、巡査若し有るもあてにならず、キャブは乗る人無き故、其地方に在らず云々、予が此談を聞きしは、恰も右パンサイド氏の書翰に停車場に出迎へん間、前以て發車の時間を知らせよとありしを、餘りお氣の毒されば之を辭し、やうたる當日の夜なり、されば此談を聞きて予も聊か後悔したれど、さりとて今更改めて出迎を求めんは、心が濟まず、依りて宿所の家族に問ひしに、彼等は決して左様なことはありませぬ、十分安心でよいませうと笑つて居し故、如何にも其れが眞實ならん、何が何でも道を通るに飛びかゝつて喰ひ付く人間もあるまじとて、固より目に立つ美服など持たねば、故らに要すの必要もなく、一切例日の通りにして、地下四十五分地上約二十分の鐵道を経て、豫定の停車場に着きしに、寧ろ奇麗なる市街あり、通行者皆尋常の人間にして、キャブさへ十輛ばかり居並びたれば、先づ安心してキャブに乗り、指す方にゆきしに、此處は日本ならば小路内ともいふべき役人町にして、貧民なんぞ思ひも寄らず、中々高尙の邸宅のみなりけり、さて例に依りてキャブの價をも問はず、だまつて一志(一哩以内)一志を通則とすを與へたるに例の通りに禮いふて去りけり、見ると聞くとは、屢々斯る相違を來すことあり、但し予の行きしは餘りの極端にし

て、現に貧民窟を外れ居り、件の眞の貧民窟は有名なるホワイトチャペル附近を中  
心とし、概ね裏にて見えぬ所に在り、表通りの白晝は必ずしも危険ならずといふ、是  
れは後にて聞きたる談なり、猶貧民窟の真相に付いては、更に探聞詳記せんとす

六月二十七日 火晴

▲新城道中 豫記の通り此日ニューカッスルに於て帝國軍艦初瀬の進水式あ  
り其れに會せんとてゆく、午前十時の急行車は午後三時四十分には彼地に着す、丁度  
好い頃の列車なればと、九時宿を出で、キングスコスの停車場(大北鐵道の起點に  
ゆき)此間地下三十分を要すしに、磯邊彌一郎氏も亦來り居り、予は氏と同車に乗  
しに、尙漸次松方書記官、松永少將其他の人々來會し、思ひの車室に入る  
予等のは例に依つて三等、片道二十三志許なり、但當國の地上鐵道は概ね一等と三  
等のみあり、二等を欠くの例にて、三等は即ち亦二等の代りなり、隨つて其車室の構  
造頗る立派にして、特に驛丁一人に室に導き、鄭重に取扱ひしが、予等の乗りし  
は一車五室、一室四人はゆるゆる座すべく、若し二人ならば横臥すべく、ベンチ窗掛  
一般の體裁、我邦の上等と相伯仲し、室外に長廊下あり、廊下の兩端に男女各別の便  
所あり、便所も大抵のホテルに劣らず、上水、下水はいふに及ばず、手拭、石鹼、鏡、洗面の  
用意一通り完備したり、但し急行車に非ざる通常の列車は、設備必ずしも一定せず

と知るべし、尙此外の急行車には睡眠車、食堂車を屬したるものあり  
倫敦より新城に至る、最近線路にて二百六十八哩、其れに三個所の停車時間を含み  
五時四十分にて到着するの列車なれば、ゆくこと傍若無人なり、數分毎に一車に逢  
ひ、數分毎に一驛を過ぐ、一切頓着せざるなり、敢て緩まず、苟くも憩はず、只ゴ  
ゴとしてゆく、疾風の如く、迅雷の如く、凄まじくまた心地よし、始めて汽車  
の速きを覺ゆ

(四十八) ニューカッスル行 (續)

▲新城道中(承前) 予等と同室にヨークまでゆく夫婦客あり、細君新聞讀み了つ  
て、マリアスを編む、午時過ぎぬれば、乾葡萄酒を取り出で、予等にもふるまふ、親切  
なものなり

汽車は十二時過グラントムに二三分間停まる、此處は硝子の名所、牛董が生れし古  
蹟といふ、一時四十五分ヨークに着、二十分間停まる、一寸下りて午餐す、ヨークは有  
名の舊都府にして、現今北英蘭要樞に中り、停車場は十二のプラットフォームを有  
す、英國大僧正二人の内一人は此地に在り、此地歴史に關係多く、彼小説のサベン  
ンクルーソー亦此地に生れたりと自稱す

此處まで百八九十里、全く山を見ず、茫々たる平原草木青く、毫も禿げたる處を見ず、偶々鋤立ての畑あり、乃至現に耕すあり、馬二頭或は三頭立の鋤あり、小麥あり、菜種あり、花盛りなり、但し大部は秣草場牧場にして、所々農村を見れども家多からず、全体英國は都市多き國なれども、此線路には滅多に見ず、地勢の變化殆んど皆無ヨークを出で、數分間にして始めて右に小高き山脈を見、左に一抔の遠山を認むや、がて石炭の名地なるダラムを経て豫定の三時四十分新城に着く。新城中央停車場は十五のプラットフォームを有して倫敦にも稀に見る程廣大の規模なり。

直に磯邊氏と馬車を驅つて式場に趣く

▲帝艦初瀬進水式 嗚呼何等の幸福を、偶々當國に留りて我 天皇の最大戰國

艦初瀬の進水式に際し、唯一人の帝國新聞記者として參列するの榮譽を荷ふ

場はアームストロング會社詳しくいへばサーダブルニュージー、アームストロングウキツウオース、アンド、コンパニーのエルスウキツクシツプヤードにして、到れば既に若干の人あり、艦は其上部に二竿の海軍旗、艦首陸の方なり、に帝國々旗を翻へし、猶艦首には當國の菊花もて紅日黄緑を畫き出し、其下に式壇あり、其側に賓席あり、各席區畫の胸壁は紅布もて之を包み、賓席の次に樂隊あり、隊の彼方に二等賓席

あり(但見物のみを許されたるもの)すべての準備整ひて、主客定刻を待ちてあり、予等亦待つこと多時にして、豫定の五時四十五分に迫れば、命名者荒川夫人二三の男女に扶けられて壇に登り、今どの信號あるや否や、花束もて飾られたる例の三鞭の瓶を抛ち初瀬と呼べば、艦はスル／＼と滑り出して、瞬く内に河に浮び山の大浪對岸に打たせて、數條の扣へ綱の張ると共に豫定の場所に停留す、初め艦の動くと同時に樂隊(土人の樂隊)は我が君が代を奏し、拍手喝采水陸に起る

終れば約千人の正賓一同或る工場の二階に設けし宴席に導かれて、三鞭及び茶菓の饗應あり、祝酒一過左の通祝辭あり

サーアンドリュウ、ノーブル氏社の重役當日の會主

先づ迎賓の挨拶をなし、次に加藤公使の不在を惜しみ、次に荒川夫人命名の勞を謝し、次に本艦構造の大体を述べて、其艦体のみ重さ八千五百噸を下らざる旨を説き且つ曰く

我々は友人加藤君が此光輝ある進水式を見られざりしを悲しむ、然れども我々は一方に於て君が重立ちたる朋友なる日本海軍建造長官佐曾君及び同委員長アドミラル松永君が出席せらるゝの名譽を荷ふ、殊に此日我會社のウオーカー、ツフプヤードに於て恐らく當タイム河に於て建造せられたる最大商船其はリ

パープールの西印度及び太平洋會社の爲めに建造されたる、長さ五百呎、荷積高一萬一千噸以上の商船の進水式あるに會す、事の偶々同日に起りしは、聊か不便なりしと雖も亦少からざる快感を有す

茲に予は謹んで初瀬の成功及び日本の繁榮を祝し、且つ滿場の諸君が世界の一方に於ける大國民が迅速に、其國民の聲をして注意尊敬すべきものゝ一ならしむる所の這個大海軍を有するに至れるを歡喜せらるべきを信す云々

而して氏は荒川夫人の名を以て祝盃を勸む

(四十五) ニューカッスル行 (續)

己次荒川君

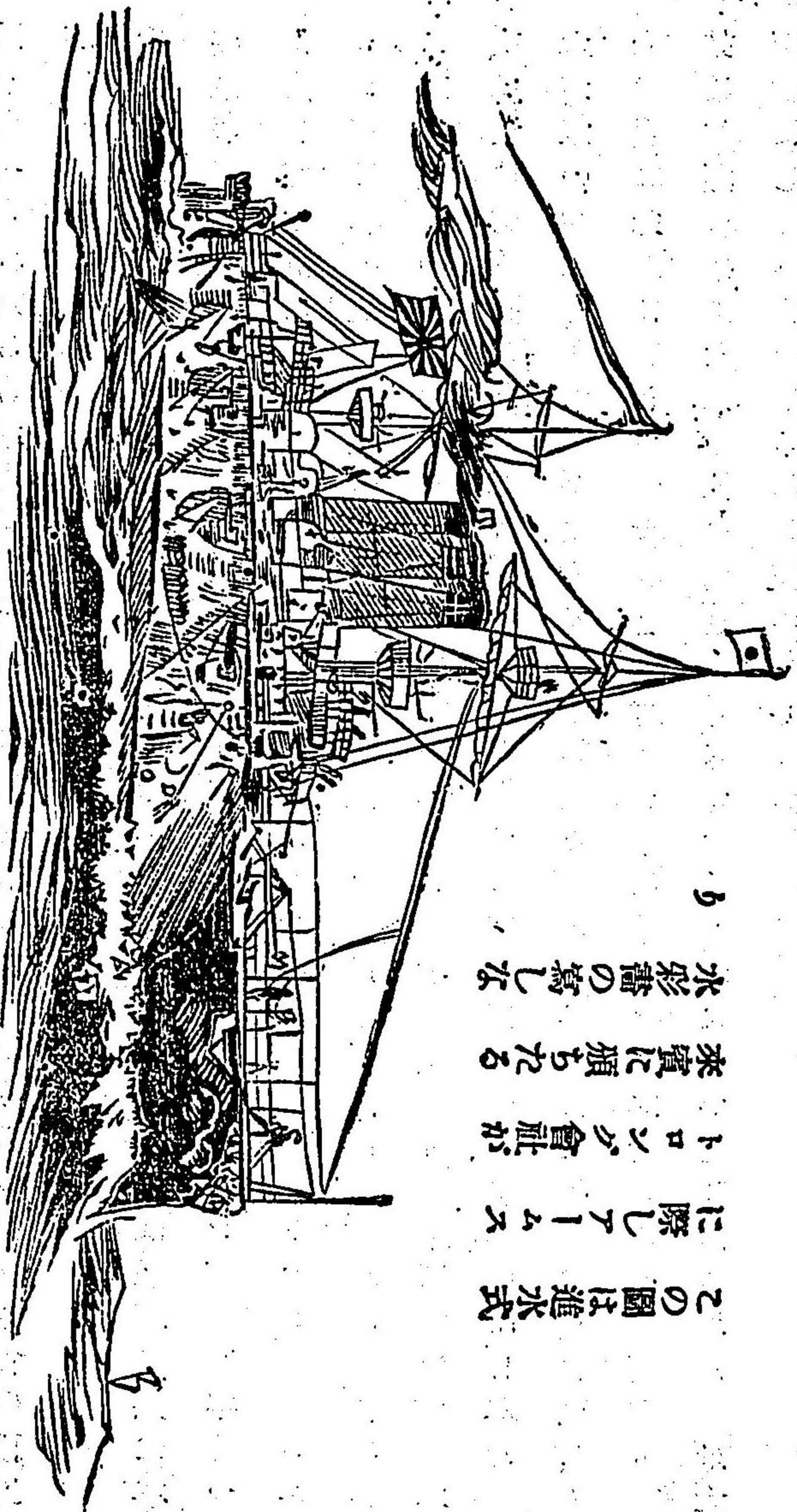
巧みなる英語を以て荒川夫人の爲めに答辭を述べて曰く

荒川夫人は此式に招かれ且つ我 皇帝陛下の一等戰艦初瀬の命名をなすに付大に歡喜し、且つ大なる名譽を有す、只今會長より述べられたるが如く、本艦は最も有勢のものなり、而して予は我海軍は此重要なる新増加を持つことに付き、之を國民の誇りなり自慢なりといふ決して過言に非ざるべきを信す、戦争に對する最先最初の準備たる、有勢の海軍は凡そ平和を愛する國民に取りて、平和

の最強保證なり、而して特に予は英國が世界に於て其好適例たるを喜ぶ云々

終りに會社の繁榮を祝し、且重ねて荒川夫人に與へられたる好意を謝する旨を述べ

英國戰艦初瀬



この國は海軍に際して、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

此時會長ノーブル氏立つて前掲ウオカ―造船所に於ける最大商船が只今見事に



進水したりとの電報を接手したる旨を報告し、且つ初瀬の建造に付き少らざる援助を與へられたる日本監督官諸氏の健康を祝し杯を舉げ且つ松永、佐會の兩氏を満場に紹介す

次に少將松永氏(日本語)及び佐會氏英語の答辭あり、且つ佐會氏は満場と共に本艦建造設計長中佐ワット氏の健康を祝す、次に社長アームストロング卿高年且つ不健康にて出席叶はざるに付き名代としてダブルユー、エー、ワットソン、アームストロング氏、卿の祝意を述べ次に設計長中佐ワット氏の祝辭あり、始終喝采拍手あると略ぼ我邦の式事に異ならずして散會したるは七時頃ありし、來賓中には日本官吏紳士は勿論、英、米、葡、其他各國の武官あり、殊に當國紳士の演說中には、日本乃至日本海軍の事に付、最大、最強、最有勢等の語所々にあり、其度毎に喝采は場に充てり、無論我國は此地に對して、一大顧客、一大旦那れば、随分禮遇せらるべき筈なり、茲に初瀬の構造を記せんに同艦は實に當タイムン河に於いて建造されたる最大戰艦にして、其主要なる項目左の如し

艦 体

長 四百呎 廣 七十六呎六吋  
深 四十三呎十二吋 吃水 二十七呎

排水積 一萬五千噸 公稱馬力 一萬四千五百

速 力 十八節 炭 量 千六百九十噸

兵 器

十二吋砲 四門 六吋速射砲 十四門

十二斤速射砲 二十門 三斤速射砲 八門

二斤半速射砲 四門 水雷發射管 五門

防 禦

甲帶 厚九吋乃至四吋 長全部

防禦甲板 長二百五十呎 厚六吋

胸壁 厚十四吋

ケースマート 厚前部六吋 同後部二吋

砲塔 厚十四吋

(又乗組は一將官、六十士官、六百七十下士兵を要すといふ)  
而して今より四年前、同造船所に於て建造されたる帝艦八島に之を比すれば、本艦は二十八呎長く三呎廣く排水二千七百噸大なり、又其當時は當所建造の最大戰艦艦たりし英艦ビクトリアを以て之に比すれば更に頗る小にして、同艦の要項は即

ち左の如し

長 三百四十呎

廣七十呎

吃水二十六呎九吋

排水 一萬五百噸

馬力一萬二千

初瀬は敷島(テームス)に於て作事中、當秋落成の筈、朝日(グラスコー未進水)、三笠(パーロ)未進水)の姉妹艦にして其大体の計畫は相同じと雖も就中本艦實に其最大のものと豫想せらる

(五十) ニューカッスル行 (續)

▲進水後の晚餐 帝艦初瀬進水の後、日本人の來賓には當地カウンティ・ホテルに於て晚餐を饗すべき旨前以て松永少將より案内あり、式終了の後直に之に趣き、暫時待合はすれば八時頃同ホテルの大食堂に於て開宴、賓主約百人(グラスコー其他の造船所より來れる海軍將校多し)當國に於て本邦紳士が斯程に斯く集合したるは實に此席を始めとする由にて、固より鄭重の献立に三鞭其他の銘酒あり、一の外賓を交へざることを、各自打くつろぎて快食甘食し、後段とありて福田監督官は立つて挨拶をなし、催主松永少將は今夕生憎サーノーブル氏方に招かれ當席に留まるを得ざりし旨を報じ、(此夜ノーブル氏方亦小宴あり、二三の當局者は之に

越さしなり)且つ 陸下の萬歳を奉祝せんと求む、一同起立無論日本語にて日本語の大聲にて 天皇陛下萬歳を三唱し奉る、堂破るゝが如し、次に初瀬軍醫長戸塚環海氏、先着回航委員として、初瀬の萬歳を祝せんと求め、満堂又之を三呼して大に香む

後雜談に夜を更かし一時頃就寢す、予は當ホテルに宿せしなり

▲室番號の間違ひ 是は確に四九尻物語の一章にあたるべきなれども、予當分

多忙にして、戲筆を弄ぶのいとまなければ、茲に事實のまゝ附記し置かん

此日子等の着せしときは既に各ホテルとも塞がり居るとのことなりしに幸ひ海軍にて取置室の少々餘りたる由承知したれば、其を譲つて貰ひて、予はカウンティ・ホテルの四十六番を得、磯邊氏は五十五番を得たり、去る程に二人は帳場にて各自の番號切符を受取り、銘々に其を尋ねゆきしに、四十六番はたしかに三階に在り、五十五番は今一階上なり、予は其室に入つて見しに、固より相應に立派なるが、卓上に一の小靴あり、人の居たさうな氣はひなり、されど番號は幾度見ても間違なければ、右の靴は何れ何處へか片付けるものなるべしと思ひ、安樂椅子に一休みし、悪いことゝは知りながら、外の室にも香ひがしたれば、内々に煙草薫らし居たるに、外より無言に戸を開くものあり、相貌違まじき紳士なりしが、予の在るを見て吃驚

して飛び出し、外より改めて戸を叩く、予は例の通りカムオンブリスと興へたれば、這入つて恭しく一揖し、紳士御免なさい、此室は私のでまいますといふ、予もまたこそと座を立つて禮を返へし、ア、左様でまいましたか、併し私のも此番號でまいますか……、斯く二三の間答をきしたる末、互に番號券を引合はすれば、どちらも四十六番なるにぞ、是は失禮と互ひに相謝して、さて電鈴して給仕を呼びしかた、と告げしに、給仕帳場にゆきて暫くの後、全く帳場の誤りにて重複せし由を斷わり、改めて二番目の紳士は四十七番にと乞ふ故、予は傘一本の身上、二室移るに造作なければ應と諾して直に移る

此間のことなり、アお掛けなさいと兩人互に座を譲りてさて座して後、貴方は進水式にお出で、ムいしましたか、誠に結構な誠に強大な、貴方がたのお國は誠にストロングスト、ラーゼストなんぞありとあらふる讚辭を呈し、自分はエディンバラのものこそ名刺を出し、貴方は矢張役人であらつしやるかといふ故、予も名刺を出して、イエー、タラの人民ですといへば、聾紳士ツク、名刺を打見てア、左様、其れでは貴方は直に大臣になられるでまいます、何故ですか、イエ、我國にて新聞記者は直に大臣になります、貴方がたもいろくの撰擧をお持ちなさる、貴方がたの國も私共の國も政治は全く同じでまいますからなど、一片入らずのお世辭とはいへ

惜氣もなく進呈しつ、互ひに温かに握手して別れしが、翌朝予は食堂に入りしに彼紳士既に卓に在り、ハロー、ゼントルマン、グヅモーニン、サ、茲に貴方の船の事が出て居ますとて、二三の新聞紙を持ち來りいと喜ばしげに讀み、且つ語りぬ、此朝新城の各新聞紙概ね繪入にて初瀬の事を掲げ、最大戦艦の進水と題して、二段乃至は三段を埋めたり、是れが五六年前なりしならば、予は相應にいじめられたるならんにかへすがへすも我大君の御代の光りころありがたかりけれ

(五十一) ニューカッスル行 (續)

六月二十八日 水曇

ニューカッスルは職工の都府なり、人夫の都府なり、石炭の都府なり、されば煤煙天を掩ひて白日暗く、汚風地を掃つて黄塵狂ひ騰る、道や堅ければ坂多く、民や多ければ、美しきなく、馬車に乗つては時々傾斜の甚しきを恐れ、歩しては貧兒の赤足に屢々同情の涙を催され、否らざれば嫌惡の念生ず、之れを要するに生業上止むを得ざるもの、外居るに堪へざる所なり

予は最初此歸途マンチエスターに向はんかと思ひ居りしも、同地は餘りの迂廻にして、他日リッパール地方旅行の序でに讓ること便利なれば、之を見合はせ、今回

は當地限りにして歸らんと期したり(磯邊氏は蘇國へ向へり)ざりとて同じき途を戻らんは無用の事なり、如何にせんかと考案のなかば、恰も此日倫敦行の汽船便(一週二回)あることを探知したれば、これに乗るに決し、先づ其切符を買ひ置きて所々徘徊し、午後二時頃乗船す、出帆は四時なれども、陸には用事なくなりたる故早く乗りしなり

海路蓋し四百餘哩、運賃は食事を除き一等十二志、二等八志、時間は二十三、四時間を要す、割合に安からざる貨錢を拂ひ、汽車に比すれば四倍以上の長時間を費してゆ、當國人が船に乗るは、金の經濟の爲めに非ず、遊樂の爲めなり、贅澤の事なり、予も今度は一等に乗る

新城市只鐵器を積立てたる工場と煤煙の外、何も見物すべき所なし、但一大橋あり、三層橋にして上層を汽車の通路に充つ、ハインベルブリッジと稱して當國に有名なり

▲近海航路 乗れるはタイン汽船會社の新倫敦人號、我大阪商船會社船位にして、當會社船は新城倫敦間、及び同アントワープハンブルグ間等を往復す

午後四時、船はハインベル橋の敷町下なる倫敦波止場を發す、是より河口まで十四五哩、造船造兵の工場にして、其狀況は當地新遊者の必ず一見せざるべからざる所

なり、然るに予は其を序でながらに見る、亦船好きの一得なり

さてゆくに「アルワ」兩岸煙突林立し、黒烟白烟を枝葉とすれば時々火焰の紅葉も見ゆ、斯くいへばどうやら風雅めけど、實際は中々風雅も洒落もあつたものに非ず、火事場の如く戦場の如く鐵鏈の音は速射砲か、小銃一齊發射の如く、汽笛は呐喊に異ならず、其間を縫ふて汽車の走る、船のゆく、人の黒き水の赤き、滿目雜々紛々として面も向けられぬ位なり、建造中の船は根板を据ゑたる、キールを組みたる、腹を張りたる、甲板を張りたる、進水せんとする、進水したる、橋立てたる、試運轉せんとする、試運轉したる、大あり小あり、鐵あり、木あり、其數幾百千なるを知らず、山水の汚れたるは、姑らく之を措き、否な山水の汚れたる程、其事業の盛大、壯觀、偉觀を表現するなり

斯る中をゆくこと一時數十分間にして、船は漸く河口に達す、河口を出で、海に入るも尙暫くは水濁り風黒し、河は我筑後川位か、乃至は窄る狭少にして兩岸丘陵斷續す、而して之を筑後川に例ふれば、久留米は即ち新城にして、其處に於て一萬五千噸の大戦艦を建造し、吃水二十七呎のものを浮べて海に下すことなり、人工の大亦驚くべからずや

六時二志半の茶あり、以てサツパーに代ふべし、故に高し

風雨あり陸見るべからず、且つ寒し(冬服にて)餘儀なく室に立て籠りて十時寝ぬ

(五十二) ニューカッスル行 (續)

▲近海航船(承前)

六月二十九日 木晴

船は大ならざれど、一等寢室六十餘あり、食堂も廣く、喫煙室、女子座室等、立派なり、食堂の給仕は悉く女子なり、是れ我邦に無き所、當分有るを得ざる所  
乗客は男女四五十人もありしが、概して田舎人のことゝて打解けやすく、親切なり  
入ればビヤノを聞いて下さいませうかとて、彈いて聞かせるレディーあり、出づれば是が何處、彼は漁船、其は船燈臺、其處に暗礁ありなど、一々に指示し、其方からも此方からも眼鏡見せて呉れるセントルメンあり  
此船にては、最早酒類を賣らずとあり、前には賣りて弊ありしにや、されば上戸は隠し持て來て喫煙室にて飲んで居る、日本紳士一つ如何ですと杯をさす、何處も同じ人情なるかな、さはれ貴方は印度人ですかと卒然物いひかけて、傍らよりわはたしくノウくく、是は日本紳士だよと遮ぎられて顔赧らめ、さまり悪げに引込む粗忽爺もあり、此方の顔は左程まで黒さか

八時半朝餐、一時半午餐、孰れも二志餘、倫敦ならば五志にも當るべき馳走にて、音に聞えしサーロインの焼肉さへあり、船は陸よりも快適なるものたらしむるは、當國航海業者の目的にして、一般乗客の希望なり、切言すれば船は旅行するホテルにして、ホテル同様の快適便宜を有し、其山水の變化を取るだけがホテルに優るものと看做さる、我邦人が船を樂とせずして苦とする、固より積習の然らしむ所なりとは雖も、航海業者の不注意不勉強、亦其責を分たざるべからず

船は常に沿岸を過ぐ、左は北海又の名は日耳曼洋、右は英蘭の東海岸なり、海岸は概して平地時々丘陵あり、市街あり、村落あり、港灣あり、綠樹青草到處に滿ち、我は碧水の中をゆく(綠樹青草碧水是れ予の一大嗜好なり、道樂なり、讀者予の屢々之を言ふを許せ)

蘇國は風景を以て聞ゆれども予未だ見ず、愛蘭は更に知らず、予が今英蘭を縦貫して、海より陸より眺望したる所にては、殆んど全部平地にして(但西海岸地方には山あり)深山は見ざれど森林あり、原野は青甞を敷けるが如くにして、赭土を現はさず、全國一の大庭園ともいふべき光景、山水の變化は我れ固より世に誇るべしと雖も、其土地を赤裸にせざるの贅澤に至りて、我の到底企て及ばざる所なり、乃至我邦肥沃の土地は、之を庭園となして遺棄する能はざるなり

予等が今日倫敦にて食し居るパンは米國の麥なり馬蹄薯は佛國産なり菓物は  
濠洲印度より來る英國産は肉の一部とナイフ肉叉食匙のみ

乗客は固より船員に至るまで其おとなしきことは感心なものあり殊に食事の時  
の如き當國の風俗として同卓のものは知るも知らぬも遠慮なく貴方鹽を廻はし  
て下さい砂糖を廻はして下さいなど互ひに使ひ使はるゝに拘はらず其禮肅平穩  
なること人なきに異ならず例して言へば當國人が五十人會食するは予等日本人  
が五人會食するよりも静かなり別けては本船給仕の女子共船の給仕なれば固よ  
りよしあるお嬢様にてはあるまじく我邦の酌婦飯盛と同階級なるべきに拘はら  
ず其しとやかにして禮儀あること我邦良家の處女と雖も殆んど及ばざる所なり  
予が今日まで世界半周の路程を経て感知したる所に依れば口聲の最も騒がしく  
入釜じきは印度人にして其次は支那人なるが如し其次は何國人なるべきにや猶  
見聞の上考定すべし

(五十三) ニューカッスル行(續) 倫敦

▲近海航船(承前) 正午過船はチャタムの造船所を左方に望みてテムズスの河  
口に達す河は廣きこと海の如く海は濁れること河の如し是れより倫敦は約五十

哩なり予嘗て此河の下流一部分を通りしも夜間なりき兩岸種々の工場あり丘陵  
森林斷續す倫敦を距る約十哩にして左方岸頭に綠林の病院(海員治療病院)あり如  
何にも宏大壯麗なり其後方の丘上樹林の間に一小堂あり世界半周の起點たる  
天文臺は即ち是れなり

午後三時半自由貿易波止場に着し直に上陸して順路歸宿す

六月三十日 金雨

七月一日 土雨

昨夜大雷ありし由此朝聞く

七月二日 日雨六十七度

七月三日 月雨六十五度

頃日降り見ふらす見の天氣恰も我邦梅雨の如し

▲萬國婦人會 豫記の如く去る二十六日より當地に開かれ其後毎日數部數ヶ  
所に分れて會合あり明日までなり

國會に於て新倫敦法案中女子に參事會員となるの權を與ふるの件數回兩院の間  
を往復して終に採潰みされしが其議事の際議員の言論に女子に對する冷語往々  
あらはれし故かあらぬか婦人會にて男子に對する冷笑の語を屢々聞けり

▲倫敦の便所 邦人始めて歐羅巴に來りて第一に困るは便所なるが當地は歐洲中此點に於ては最良と稱せられざるに拘はらず左程不便もなかりけり先づ公設の便所は街路の廣き所乃至三叉路十字路の真中に於て一小區を畫して鐵柵を繞らし其地中に設けたり階梯は出入の二路ありて内部頗る清潔概ね大理石等にて造られ尾籠ながら大便所には何もかも具足しあり番人ありて其清潔秩序を維持す大便には一片要するもわり要せざるもわり洗面所はあるもわりなきもわり其外柵にはメンストラベトリー或はウイメンズ或はゼチラルなどと標榜す地上にあるものあり地下に比しては不潔なり地下地上の鐵道停車場には固より附屬の便所あり必ず洗面所を備ふ洗面には賃を要するあり要せざるあり大便に是一片を孔に投ずれば戸の開く様にしたる多し其他博物館劇場等皆其設けあり奇麗なり是等は單に標してセントルメン或はレデイースといふ是等の種類の便所は若し其標文を読み得ざるものと雖も場所の模様にて推測し得べし最も困るは屋内の便所なり日本の家は間取りの模様にて分れど洋館は中々左様に參らず主人の寢室の戸も便所の戸も同様にして或は便所の入口に大時計かけたる家さへあり推測を以て之を知ると頗る困難なりさりとて之を問ふとは更に困難なり故に斯る場合に於ては下女を見付けて内々に問ふべく若し下女

もなく且つ急用止むを得ざるに迫らば主人にても客にても詮方なし何にせよ男子を婦人の居らぬ所に引張りゆき極内々に之を問ふべし或は氣の利きたる主人は自ら内々に指示無言にてするとあり或は手を洗ひますならば此處ですとて導くものあり兎に角止むを得ず下女か男子に問ふも手を洗ひたい或は顔を洗ひたいといふ方禮儀なるらしく思はるツライタークローゼットダブルユージンなどは書いてある所無論これなく口にいふことも未だ聞かず例へば我邦鐵道にて驛毎にダブルユージンの大文字に手指示のをかいてある如き場合に於て當國にては小さく奇麗にセントルメン或はレデイースと書き其下に手を書いてあるなり或人嘗て曰く途中にて困りたるときは男子は酒屋に女子は茶店に入りて借るを便とす予の考へにては是は猶更不都合不便利殆んど行ひがたきことなり

#### (五十四) 倫敦 (續)

▲倫敦の廣告法 當地に於て各事各物の廣告法固より多し其第一は新聞紙なり其第二はちらしなり其第三は帖紙なり其第四は廣告人なり新聞紙の廣告は其効用最大なるだけ其料金また最高にして予未だ一々調査したる譯にはあらねど概見したる所にては通例の新聞紙六號か七號かの細字一行一

志一志半以上なり(半片の小新聞は少々安し)されば日本の新聞紙に於けるが如き  
 贅澤なる廣告は中々容易に出來すと雖も、猶且つ新出版の書籍、會社の營業、賣藥等  
 の如きは往々一頁の大廣告を見ることあり、其他に於ては呉服屋、家具店、演戲場等  
 の廣告を派手なるものとす(予の知る某下宿屋は米人を顧客とせるが毎日紐青へ  
 ランドに小さき廣告を出し居り、一年三千圓以上を擲つといふ、故に其家にては當  
 時のシーズン中、米人の客充滿して空室なし、米人は金遣ひ荒しと知るべし)

「ちらし」は配達會社に托して配るもの、辻々或は店頭或は公園等に立つて通行人に  
 頒つもの、停車場等に吊し置きて人の取るに任するもの等あり、其他當地大小の商  
 店にては一寸鉛筆一本買つても、寸筆に奇麗に包んでやるの例にて其包み紙に商  
 品概目代價等を印刷したるものあり、或は別に目錄の冊子を添へてやるものあり、  
 「ちらし」の應用も亦頗る發達し居れり

次は帖紙にして、是は地下地上の鐵道線路を最とし、街頭にては板圖願濟み(我邦  
 らば)工事中の板圖に針程の隙間なく帖つてあり、地下汽車の内部(地上にてはなし)  
 バスの内部外面亦隙間なく最も驚くべきはバスの切符、一方方に足らぬ細き切符  
 の裏に烟草屋の廣告あり(帖紙廣告は烟草最も多し)街路の靴磨きの箱に、單に片足  
 を踏みかけるだけの小さき箱に靴屋、牛乳屋の廣告ある等あり、斯の如く帖紙廣告

殆んど其極端に達せるに拘はらず、當國由來行儀の國體裁の國なることゝて、一も  
 粗末なる帖紙なく、一も亂雜なる帖り様をなしたるなく、悉く厚紙か板に行儀よく  
 美しく多くは赤青等の色物にて染め出し書きなしたるものゝみにて、其れを體裁  
 よく耳際正しく上下左右の釣合ひよく、矢張應接間に書額を掲ぐると同様の寸法  
 注意を以て排列装置したるものゝみあり、其他街頭四ツ角の小店等(多くは菓子屋  
 には概ね他店の廣告を帖うたるを見れども)、一般の商店會社等は自己の商號看板  
 を掲ぐるの外、壁に樂書したるさへあらず、非商人の家は戸番號の外、自宅の間貸し  
 か貸賣屋札あるのみ、其れさへ鐵板か木板ならざれば、厚紙にして其れに美しく書  
 きたるにて、亂書亂形のもの一もなし、故に一般家屋の觀望は奇麗なり、上品なり  
 最後に記すべきは廣告人にして、是は男子が廣告の板を背せ腹にかけ、猶薩摩踊り  
 の負ひ物の如く、肩上高く一板を負ひて、たまつて街頭に立つて居り、乃至づんぐ  
 と歩くものなり(都俗之をサندوقツチと呼ぶ、肉を中に狭みたればなり)  
 新聞紙を別物として効用あるは「ちらし」但し入念のちらしなるを要するべし、帖  
 紙及び廣告人は立つて見てやる程の閑人ありとしもれもはへず、若夫れ汽車、馬車  
 の内部の帖紙をいふか、客は車壁を眺めずして新聞を讀む



(五十五) 倫敦 (續)

▲英蘭銀行(七月四日) は其總裁の許可を経るに非ざれば十分に見物する能はず、予は如何にもして之を見んと欲し、夙に代理公使に相談の末、中井正金銀行支配人に其手續を頼み置きしに、頃日、宜しい來れとの報あり、依つて此日午前より行きしに、氏は特に洋書記一名を附して案内せしめらる、乃ち共に英蘭銀行にゆきしに、行員予の名刺を見て新聞に書ぐや否やを問ふ、予は一考の末無論書ぐ等と正直に答へしに、何故にや其れは廢して貰ひたい、否らざれば觀覽を斷はるの外なしといふ仕方がない故、然らば此處で見たいことは書かぬことにせうと、予はこの條件をつけて同行員の懇切なる案内に依り十分に見物したり、されば同銀行の人が長崎新報を讀むと否とに拘はらず、予は其條件を守らざるべからず、然れども予が熟覽を待つて始めて知る所に非ざる、既に當地に知れ渡り居る所の事實は、予遠慮なく之を報道するを得べし、左ればこの通信は、既に多少の倫敦人が承知し傳唱し居る所に係り、寸毫も予の素破抜を交へざるものなり、予は何處にても素破抜きをせず、英蘭銀行は東京商業の中心點に在り、全く一町を掩うて立つ、其建物は全く他より

離隔したる、不規則なる平家の一塊にして、況いて外面に一窗なく全く盲目家なれば、打見たる所奇能にして高き塀障を見るが如く、或は削れる岩石の塊の如し、建物の中央部はジョージ・サムプソン氏の設計にして千八百三十四年の成工に係る、されど全体の大部分は千七百八十八年より千八百二十七年まで同行建築工師として有名なりしサー・ジョン・ソーヌ氏の手に成れり、其最も巧妙を極めたるは北西の角にして是れタイボリのシビル寺の模型を取りたるものなりといふ、又内部の圓庭は昔時はセント・クリストフエル、ストック寺の墓所なりしとかや、斯くて建物の總面積は約四エーカーを覆ふ、抑も本銀行は今より二百六年前、千六百九十四年の創設にして、蘇國人ウキリヤム・ピーターソン氏の發起に係り、實に英國に於ける合資銀行の權輿なり、國王特別保護の下に、千八百三十四年迄は倫敦に於ける唯一合資銀行として繁昌せしが、其年倫敦及ウエストミンスター銀行の設立あり、續いて諸多の銀行は勃興したり、本行は倫敦に於て紙幣發行權を有する唯一の銀行にして、資本は最初百二十萬磅に過ぎざりしが、其後漸次に増加せられて今や其十二倍以上になるに至れり、本行構内に使役せらるゝ人員は千に上る、發行紙幣通例二千五百萬磅以上に對し、常に少くも二千萬磅の金銀塊を貯藏す

本行は國庫の爲替方を勤む、其他預金、貸金、手形割引等、他の銀行と同じく、通常銀行事務を扱ふ

本行は何時にても、幾何にても、其持ち來されたる金塊を一オンス三磅十七志九片の割合にて買入るゝの義務あり

本行の業務は一總裁、一代理總裁、二十四取締役に依りて執行せらる、營業時間は九時より四時まで、給仕は悉く有髯の丈夫にして、藍色上衣の燕尾服に絹帽を頂き、行内四方に奔走して居る

(五十六) 倫敦 (續)

▲英蘭銀行(承前) 印刷局其構内に在り、毎日五萬枚以上の本行紙幣を刷成す、其額面は一枚五磅より千磅までなり、郵便爲替券、印度銀行券等亦當局にて印刷せらる

古幣局あり、本行に還り來りたる新古の紙幣を抹印す、苟くも一たび出で、一たび還れば直に抹印す、故に或時は其日に出でたるもの其日に還りて抹印せられ、おはれ敷時間の壽命にして、古幣國に葬らるゝことありといふ、既に抹印したるの古幣は裁判事件等に付き證明の爲め、各五年間之を保存す、古幣局にて一枚額面百萬磅

紙幣亦之を見るを得、土俗稱す百萬磅札は全國に只三枚ありと

保存の古幣は函に納む、函の數一萬三千四百之を横に並べても二哩三合の長さあり、紙幣の枚數七千八百萬、其額面は十七億五千六十二萬六千六百磅之を積み上げば五哩六合六寸の高さに達し、兩端を繋いで短冊となせば長さ一萬二千四百五十哩、東西南北のどちらへ向ひて投げても遙か我日本を打越すべきなり、但し之を一枚づゝならべて面積を計れば、ハイドパークより聊か狭しと云々

斯くの如く世にも仰山に保存されたる古幣の末は何となるか、矢張り何とやら、の煙となる、乃ち古幣の火葬場あり、前記五ヶ年保存期滿の古幣は片づ端より燒却せらる、火葬は通例一週間一回にして、高さ五呎直徑十呎の圓竈に毎回充滿すと傳ふ、其他鑄造局、地金局等、是れ予の語るを得ざる所、但量金局にては毎日平均八萬磅を量るといふ

斯くて本行夜間の保護には、兵士の一の小隊と、監警看守の大隊とを要す、金を積んで世話なものなり

七月五日 水晴、六十七度

▲日本品商店 當地に於て日本美術品を取扱ふ日本商人は飯田氏、富田氏等あり、大ならず、土人の日本品を商ふもの少らざる中に、ツゼント、ストリートのツバ

テニス商會は蓋し其最大なるものなり、予前日領事の紹介を得て、此日ゆいて見るに、店は繁華の街頭に在りて、表通りには少々づゝの各國雜貨を陳列し居るのみなるに拘はらず、内部は全家殆んど悉く店舗にして、上は二階三階より、下は地下室に至り、東西洋各國の商品を排列して賣る、予は主として其日本部を見たるが、同部も亦數室に別れて漆器、磁器、金屬器、古物其他あり、品物は別段善良のものなく、殊に磁器は最も少く、例に依りて全く支那品に壓倒せられ居れり

日本流の淺き鉢の花生、近來當地に行はるとあつて、既に當國にて其鉢及び根々の金屬を模造したるものあり、殊に竹細工品に至つて今日にては當國模造品大部を占む、是れ原料を支那等より輸入して製造する所なりといふ、價は固より高きものあり、意外にやすきもの亦少からず

當商會は日本品を横濱神戸の洋商に依り輸入すといふ  
日本商品に關する詳細の意見、報道はどうせ他日に譲らざるべからざるが、大体に於て、當地にては日本品は頗る稀少、頗る無勢力なり、随つて販路擴張の前途や頗る遠く、開拓の餘地や頗る廣しといはざるべからず

### (五十七) 倫敦 (續)

七月六日 木晴、七十五度

昨日萬國婦人會終了、會長アバーデン伯爵夫人より午餐の饗あり

七月七日 金晴、八十二度

本年初めての暑さなり、但し男子は矢張夏下着に冬服を着て居る

七月八日 土晴、八十度

▲觀兵式 午後ハイドパークの隣りの隣りある、セント、ゼームス、パークに於て、倫敦義勇兵の觀兵式あり、皇太子殿下之を檢閲し、其他諸王、諸王妃、諸王女等是に臨まる、予亦見にゆきしに、何さま雲霞の觀者にて足はすくむし、暑くはあるし、終るを待たずして歸る、當國の兵には奇裝多し、ホルスガードは石川五右衛門以上の黒髪帽を頂き、是は王宮の門には始終二騎づゝ立番し居るなり、其他古代の鐵甲鐵冑を着したる騎士あり、軍樂は諸君承知の笛太鼓入りにて面白く、一般の觀望芝居の如し

此日集合の義勇兵は其數二萬七千と號せり  
觀者が澤山立つて居る、時々歡呼することある、矢張我邦の通りなり、獨り其異なる所は、前に在るものは依然として前に在り、後に在るものは依然として後に在り、見えねば見えぬなりで、黙つて立つて居り、後から押したり、隙間からもぐり込んだり

する等の事おきに在り、其順良や及ぶべからず、其呑氣や更に及ぶべからず

七月九日 日晴

▲エドモンド・マドカ氏 は亦知名の一學者なり、著書若干世に行はる、適日突然予に書を致して曰く、君を知る所のノーザンブランドのボサンケツ嬢頃日出京して我家に在り、彼女及び予の義姉妹某夫人及び予、君に逢はんを望むこと切なり、君若し來る日曜の午後、君をデインナーに迎ふるの歡びを予等に與へば幸甚、依つて具さに其路筋を説示す、(遠ければなり)予直に歡諾を答へ置き、此日午前よりゆぐ日曜には午前十一時より午後一時まで汽車馬車全く休業し、其他の時間も車數、度數少し、氏の宅は西北區、ハバーストックヒルと稱する所に於て、テームスの河面以上二百呎、倫敦唯一の丘陵たるハムステッド(四百呎の半腹)に在り、樹下草上の一美屋、一反ばかりの庭園を控ふ

予は少しく早くゆぎたれば、氏嬢等は未だ寺院より歸らず、夫人に導かれて庭に出で綠蔭に坐して待ち、且つ語り居る程に、歸り來りて大に歡び、何やかやと取りもてなして、やがて一向と餐に導かる、餐後氏は予を拉りて書齋に入る、方丈の一室四周萬卷の書を積み、四壁數百の寫眞を掲ぐ、氏寫眞を指して、普く是れ悉く予の朋友なりと、交際に廣く且篤きを知らる、氏其自家の著書を示す、且つ現に從事中の稿本を

示す、且政を論じ教を談す、且つ卒然として問うて曰く、君は孰れの政黨に屬するか、曰く自由黨、伯爵伊藤の派か、然る否な、侯爵伊藤は我黨員には非ず、我黨の側なり、曰く君の新聞は基督教主義か、曰く否な、佛教主義か、曰く否な、神道主義か、曰く否な、然らば君等は何の宗教か、曰く何の宗教にてもこれなし、氏稍々驚けるの色あり、曰く何等の宗教を援くるか、曰く何等の宗教をも援けず、亦何等の宗教をも傷けず、我等の主義は只自由なり、等々、依つて予は今日の日本に於て政治と宗教の混同すべからざる所以を説きしに、氏稍々了解したるが如くなれど、猶中々に満足せず、更に詢々として宗教の人生に必要な所以を説く、如何にも予等の無宗教、乃至宗教無關係主義は、當國人には奇異の感を與ふべく思はる

書齋を出で、氏謝して曰く、予は日曜日には午睡するの義務あり、請ふ、予に一時間を與へよ、去つて寢室に入つて眠る、亦愉快なる男子なり、應接所にゆきしに、嬢獨り待ちてあり、氏の勉強につき語りて曰く、彼は日曜の外寸暇を有せず、現に昨夜も徹宵せり云々

意外にゆるく遊んで居る程に、樹下お茶あり、氏起き出で來りて談笑すること初めの如し、餘程重寶な午睡癖を有すと見えたり、六時、再會を約して辭し歸る

## (五十八) 倫敦 (續)

七月十日 月晴、七十六度

七月十一日 火、曉雨、後晴、七十七度

(予は毎日外出す、されど別段の事なきければ省きて記さず)

露國皇太弟ジョージ大公爵昨日俄に薨すとの報あり

此日三井にて、福岡の平岡浩太郎氏、其所有炭坑爆發の大變報に接し、紐育より引返したりとの事を聞く、痛むべきなり

七月十二日 水、曇、七十七度

嘗て我逓信省雇として東海道電線を掛たるテイー、ジー、ライキン氏近年東洋美術品を商ひ居るとの事を聞き、三井渡邊支配人の紹介にて此日ゆいて見る、可なり結構の商店なるが、氏は二三日前日本勳五等を貰へりとして家に居ながら其略章着けて居る喜び察すべきなり、さて商品は主に支那陶器及び歐洲古美術品にて、日本品は近來不景氣、寧ろ日本の方が高い位ゆへ廢したりとて餘り所有せず、随つて當地の商況談の外予の見聞に益する所なかりき

▲倫敦の市街、家屋、商店 街衢は前にも記せし通り、人の造れるに非ず、おのづか

ら成長せるもの、英人の口吻を借るなれば其不規則なること我東京と一般にして、一町にして長きは數哩にわたるあり、短きは數百間に過ぎざるあり、圓き所あり、三角の所あり、行詰りの袋町最多く、何せよ一見たどりにくき所なるが、少し慣るれば、おのづから數條の太通り、縦横に貫けるを見、歩くに左程困難なし、但し七千餘ヶ町もあることなれば類似の町名頗る多く、注意せざれば間違ふこと少からず

道路は狭けれど固より堅く、車馬道は細き木口を立てたる上を小砂利にて固めたる多く、稀に煉瓦を敷けるあり、人道は悉くセメントなり、樹木は道の兩側に在る所も多く、其他何々スクエヤと稱する所には名の如く方形の空地ありて樹を植え、家屋は例外(十層もあり平家もあり)を例外とし、通例地下四層地上一層なり、其外壁は黄色染みたる煉瓦をむき出しにしたる所少からざるのみならず、家並みの揃はざる所多きを以て、單に家並みの觀望に就いていへば馬耳塞の大通りに比して遜色あり、商店役所等の外、白晝常に戸を扇す、故に出入面倒なり、但し下宿等にては概ね其宿客に鍵を渡し置く

町名は角々に掲げあり、番號は戸々に美しく記しあり、但し商店の番號は見易からざるものあり

商店の表口は五間口にて十間口にて悉く繡玻璃にして、玻璃一枚の廣さ二間

四方以上にも及ぶものあり、表に見本品を臚列し、内部は概ね壁に陳列、我邦市街の商店も其市街の繁昌に伴ひ、漸次此様に改良せらるべきことなり。店の最も美しきは婦人服屋にして、次は時計金銀寶玉店、美術品店等なり、陳列上の注意は無論周到にして、我邦にては亂雑不愉快の極なる鳥獸肉店と雖も、尙菓子店の如く美しく飾つて居る魚店も、体裁は造れりと雖も、品が品ゆへ是れのみは左程美しく飾られず、剩さへ無玻璃の店さへ少からず、當地最醜の商店なり、八百屋は美なること肉屋に譲らず。繁昌の町にては車馬人物、店玻璃に映じて、影と形の區界を知らず、新來の田舎者は玻璃に突き當らぬ様にすることも一心配なり、走つて道を横ぎるとききなど、特に然り。

(五十九) 倫敦 (續)

七月十三日 木晴

日本美術品商富田氏を訪ふ、偶々京都の骨董商某氏巨萬の古物を輸入し來り、正に販賣を開始し居れり、兩氏近日巴里に向ふといふ。

聞く古物に付ては當國人は猶寧ろ素人なれど、巴里は大に進歩し居れりと、古物は之を格別として、凡そ日本新製の工藝美術品は、其品物の用途を知らずして造りたるもの多く、隨つて實用に供せられず、單に好事家の翫弄する所となるに止まる。隨つて販路狭く、價值進まず、多くは贅物として店隅に棄てらる。是れ今更の事に非ずと雖も、我工業家の大に猛省せざるべからざる所なり。

七月十四日 金晴

午後福岡日々の前主筆高橋光威氏を其寓に訪ふ。

去月米國より來り、直に書して面會を求め、予も面會を望みたれども、互にかけ違ひて、未だ逢はず。此日は前以て約し置きてゆけるなり、但し氏は日本にては逢はず之を初對面とす。氏は本月末一寸大陸に渡りて來月十八日當地發日本郵船にて歸朝の豫定なりといふ相伴ひて、渡邊三井支配人の日本晚餐に趨く。蓋し氏の邸は當國に於て日本料理の出來る唯一のものにして、日本の料理人あり、其妻日本服して繪仕するさへいと珍らしく、飯は勿論刺身、蒲鉾、吸物、素麵、和布の味噌汁、日本酒、澤庵、日本茶あり、予は別に欲しきものなし、只日本の茶のみ時々思ひ出す、去れど印廣洋を経り來れる日本茶は日本茶の味を保たざるあり、是は餘事にて且つ饗宴の主人よかり聞きたる事に非ず、別に査問したる事なるが、當國は酒稅最も高き故、日本酒一升二圓近くにあり、正に葡萄酒と匹敵する事なり、但し味は可なりに保

同席には昨日米國より來りし、和田製鐵所長官、日本銀行鶴原氏の一行及び滞在中の早川大藏書記官、佐雙海軍造船長官等あり、更たけて歸る

七月十五日 土晴、七十度

▲倫敦の地勢地區 是れ寧ろ倫敦記事の劈頭に置くを便とせしなり、されど手到着の當初は日々見聞に忙はしく是等の事に記し及ぶを得ざりければ、今後れながら其大要を掲ぐ

倫敦は毎度記せし如く、テムズ河口より約五十哩の上流に於て河に跨りて建てられたる世界の最大都府にして、其地勢は一体の平原、何百哩ゆきても山を見ず、武藏野が原の比に非るなり、但し古昔は丘陵ありしにや、某所の學校にて見し古圖倫敦府のには數個の高臺ありしが、今も町名地名にはヒルを付したる所往々あり、されど實際は丘あるに非ず、若し稍々小高き所にても、小勾配の短かき坂あるに留まり、東京駿河臺にも比すべき程のものは、過日ゆきたるハムステッドの丘陵唯一つあり、其れさへ遠くて目には見えず、之を概するに倫敦府は全く大平原の中の平原なり、而して河水を以て之を分てば、河北は都會の都會にして、河南は都會の田舎なり、繁華の市區、宏大の建物、概ね河の北岸に沿ふ

倫敦は羅馬の占領以前より存在したれど、確には其起原を知らずといふ程古き都會にして、古きが都人の自慢なり、左なきだに萬事守舊的の國民の事とて、市區に付いても盡然たる革新をなさず、隨つて新古錯雜、名實齟齬、日本流に「ハツキリ」と之を分畫表示することは、三代相續の土人と雖も頗る難んずる所なり、況いて外國の一人旅人には之を知ること容易に非ず、且つ別段の必要もなければ、今は只差向き知り得たる所の梗概を記するのみ

(六十) 倫敦 (續)

▲倫敦の地勢地區(承前) 蓋し英蘭に四十郡あり、倫敦は實に其四郡(ミッドルセキス、ケント、サルレ、エスセキス)に跨る、而して其四郡の内に於て、今日にては倫敦の行政郡を組織す

郡部の外に市部(シテイ)あり、是は固より獨立の名稱を有し、政治も多くの場合に獨立し、彼有名なる市長(ロードメーヨル)の下に二十六名のオーガニズメン、數名のセリツフスあり、市内を二十六區、百二十の牧師區に分ちて之を統治す、然らば市は是れだけかといふに決して然らず、實際は其數倍數十倍大にして、當地の所謂市は古代の市、何百年前の市か、今は實際倫敦市街の一小部分たるに過ぎざるに、猶其部分

に限って市名を冠し、世にも仰山ある大市長、率る大臣以上の榮職なりありて之を治む、萬事理窟ッばき日本人の頭腦には、誠に譯の分らぬ様なはなしなるが、英國人の特性なるもの、概ね這般の點に在りて存せり

市部を除きたる部分を郡部とし、郡參事會之を統治し、其下に十九名のオーダーメンあり、土木、教育には各別段の機關あり

政治は本題の外あれば、別に詳述する機會あるべきが、兎に角地區の一點に於て、倫敦は市郡の二政治區に分たれ、其他に撰擧區、警察區、最も範圍廣し、牧師區、郵便區等あり、種々錯綜す

予は當地人の例に倣ひ、市と稱するとき、單に前記の古來市を指し、實際の全市街に對しては、之を都と呼ぶことゝすべし

而して其中に就き最も便なるは郵便區にして、一般の稱呼亦之を用ゐて他を用ゐず、郵便區とは即ち東中央(E)、西中央(W)、北(N)、東(E)、南東(S)、南西(S、W)、西(W)、北西(N、W)の八區にして、各區中に又大字の如きものあり、是は或る時は稱し或る時は稱せず、雖も、同郵便區中同一の町名亦往々にしてあればなるべく之を稱するを便せず、例へば左の如し

一四七番戶(ジ、グロップ)町名

ハマリスミス(大字)西(郵便區)倫敦(郡名)

別に今日にては何の區畫にもあらざるものを猶一般に通稱するものなり、東端及び西端是れなり、是れ全く古名にして、古來市に接近し、今日にては兩端とも都の中心となり、殊にウエストエンドの如きは、華美豪華の源泉として、言語、風俗、衣類、体裁之をウエストエンドスタイルと稱して他に區別せらるゝに至れり

地區の大概は前述の通りにして、而して東は商業の中心なり、銀行會社新聞社各取引所、大商店此部に在り、船渠の大部亦是に屬す、西は豪華の中心たり、劇場、ホテル、遊藝場、音樂會場、公園等の大なるもの、王宮議事堂、官廳亦此部に在り、東に夜番夜を守る時(東市の主なる商店は晝のみにて夜は鎖閉し番人を置くのみ、其等は他項に記すべし)西に舞踏室の電燈は燦かなり、斯故に都人稱して東を生財地、西を散財地とす、東は實に生財地なり、然れども其資本は西より出づ、故に倫敦の金は西に出で、東に働き、其増殖したる利益は西に還りて費消せらるゝことなり

嗚呼十五哩四方の大都、而して都俗之を綽號してペンリージ(村)といふ、亦洒落たるかな

(六十一) 倫敦 (續)



▲倫敦の水道　私設にして八大水道會社の營業に係る、一昨年の供給水量七百二十四億三百萬瓦倫、内四百十億瓦倫をテムズより、百九十億瓦倫をリー河より、百二十億瓦倫を貯水池井より取れり

倫敦水道區は倫敦都區よりも廣し、されば大約六百萬内外の人民が家の三階四階まで引きて其肢体を洗ひ、其体内を通し、其衣を濯ぎて捨つる水、家畜が入れて出す水、すべて是等は如何になるか、人体の神経系の如くに周到せる下水溝を通じて某所の地底に集合し、其處には汚水の一大瀑布ありて更に遠く地底を潜りて、テムズ河外の海中に流出すといふ

排水の完備は都人の誇る所にして、當地が歐羅巴中の最健康地たる所以、主として是に因由すと稱す

▲花を愛すること甚だし　日本人こそ頂上の愛花國民と思ひしに、是はまた恐れ入つたこと、當地の人民が花を愛すること甚しく、我邦人の及ぶ所に非ず、是れ天然の美少き國土に於て人情審美の止むを得ざる所歟

今其狀を略述せんに、都人半弓の餘地必ず花を植ゑ、餘地なきものは鉢に植ゑ、鉢なきものは瓶に活け、瓶なきものは襟に挿み、襟なきものは、まさかあるまじは公園に噴きにゆく、否々餘地あり、鉢あり、瓶あり、襟あるもの各相兼ねて家の内外に植ゑ、挿

み、眺め、嗅いで而して楽しむ

花は概ね草花なり、木花は差向き、薔薇の外植物園にゆかされば見るを得ず、只夫れ草花なり、故に短かし、否な枝なく、花のみなるを通例とす、故に之を生ける花瓶は、拳大の圓き硝子瓶最も多く、其大なるものも一升徳利位なり、但形ち低しと知るべし、而して之を飾るは第一食卓上にして、卓の中央にレース或は縫箔、矢張洋品の袱紗を布き、其中央に前記大の方の花瓶或は鉢の草花を置き、鉢なるときは同上の袱紗もて之を包む、其四隅に小花瓶を置く、其他は應接所の卓上、さては應接所及び座室の暖爐上にして、装置の体裁は大同小異なり、日本人は枝を活け、西洋人は花を活く、故に西洋の花瓶は低く小なり、是れ一は木花なきにも因るべしと雖も、住居の鉢栽主として之を然らしむ、日本人は低所に置く、故に高き花可なり、西洋人は高所に置く、故に低き花可なり、故に日本の花瓶は西洋の花瓶たる能はず、杖立てとせんか、寧ろ下方に切抜きにてもあるに如かず、唾壺とせんか、到底掃除が不便なり、花瓶既に花瓶に適せず、また外の用にも適せず、結局無用の長物として、單に好奇家の室隅に曝らし置かる、是に至つて予はくさいまでも日本の工藝家に對して、實用輸出品を製出せんことを勸告せざる能はず

市中花屋所々にあり、またフラワーガールと稱して路傍貧女、貧男もあり、が花を賣

るて蓋し歐洲都市の名物なりかし  
 灘に日郵神奈川丸にて日本菊若干株を輸入したるものあり、未だ其結果を聞かず、  
 若し多少の資本持久力ありて日本菊を培養せば、而して能く花を着けしむるを得  
 ば必定當るべく思はる  
 日本盆栽の矮樹に關し、當地新聞に仰々しくはめたてたることあり、未だ其場所を  
 聞き出さず  
 日本櫻花は有名なり、都人頗る艶羨の情あり、畫にて見たりといふもの、剪彩花(予の  
 知れる某家また之を秘藏す)を見たりと誇るもの、何月頃にゆかば櫻花が見らるべ  
 きやと問ふもの既に二三にして止まらず、洋人豈に敢て無風流ならんや

(六十二) 倫敦 (續)

▲英國の貨幣 是は今日の日本に於ても小學兒童も知悉する所なれども、實際  
 の狀況は亦格別の者あれば其概略を記せんに、種類は金銀銅紙の四種にして、金に  
 ソポレン(磅)半ソポレンあり、銀にフロリン(二志)シリン(半志)四半志(四志)のダブルフ  
 ロリン(稀にあり)及びクラウン(半クラウンあり、銅に片半片、四半片、フツーシング(我  
 一錢)あり、紙幣は五磅以上一千磅まであり、別にギニアの稱呼あり二十一志に當る

紙幣は携帶に便にして且つ番號を畫留め置けば、遺失盜難等に際し利益ありと雖  
 も、何さま一枚五十圓以上のみなれば日常の小遣錢には不便なり、故に一般に嗜用  
 せらるゝは五圓十圓の金貨とす  
 銀のフロリン(二志)半クラウン(二志半)は殆んど同大同形なれば其紋様に注意せざ  
 れば間違ふこと多し  
 銀には贋貨亦ありといふ予は幸ひにして未だ掴まず

紙幣にも偽造物あり、但英國銀行に持ちゆけば其信用を愛護する爲めに大概まで  
 は知りつゝ交換すといふものあり、眞偽を審かにせず  
 英國の計數法は他事と同じく複數なり、故に日本の老人などは頗る面倒を感ずる  
 なるべく、某在英者は未だ金の勘定が分らぬといへり

▲倫敦のホテル、茶屋、酒屋 ホテルのみにて五百あり、ウエストエンドのセシル  
 ホテルなどは其第一流にして七百寢室、二百座室、大食堂、舞踏室、音樂會場等あり、宿  
 料は寢室及び給仕賃は六志以上、朝食二志以上、午餐四志以上、晚餐六志以上、其他は  
 場所により家に依りて無論差異ありしに依りて更に差異あり、之を概するに寢室  
 及び給仕五志、朝二志乃至三志半、晝二志半乃至五志、晚三志乃至六志、温浴一志、海綿  
 浴半志通例にして、其以上は際限なし、家に依りては午後に出發すれば其日まで算

入することあり、其他油断は損失の基なれば、一々問うて宿るが大丈夫なり、別に寢床屋と稱するものあり、單に寢室のみを供給す、ゆき暮れて失ひたる田舎者か、晝は出歩いて只夜のみ泊るの身軽で巧者で旅人なんぞ、一夜を明かすに宜し、但し、男客のみに限る家多し、何かの流用を恐るればなるべし

レストラントは亦大なるもの多し、但其中の禮儀作法は頗る六ヶしきものと稱す、酒屋固より到處に在り、殊に女中居酒屋(レディースパル)なるもの往々にして在るを見る、當國の女子、烟草呑んでも日本に於て河豚喰ふよりも猶忌み嫌ふ、獨り女中酒屋に至りて、公然看板を掲げさせて耻ぢず、レディース平然として出入す、如何なる理窟あるかは知らねど、予は是を以て倫敦の瓊瑣、英國女子の大耻辱と認めんとす、茶店一千七百あり、茶と珈琲、或はココアとチョコレートなんぞ種々あり、或は假の小晝飯を兼ねるあり、其他フレッシュメントと稱するいは、辨當屋的のもの所々に在り

(六十三) 倫敦 (續)

七月十六日 日晴、七十二度  
七月十七日 月晴、七十七度

七月十八日 火晴

▲路を外國人に問ふ 予は見物の初日より却つて路を問はれたることあり、定めし慣れぬ外國人ならんと思ひ居しに、其後當都の男女にして、車上に、途上に、路を誦ぶもの少からず、多きときは一日數人に及ぶことあり、依つて思ふに、彼等の眼には、道個異色且つ、率る異相なる、明々白々の外國人に對してすらも、一向外國人といふ隔てなきあり

或は若き女中方が、此好男子と同道して、此方は嘘を迷惑ならん、成るべく差控へ居るに拘はらず、先方より用捨なくはなしもして呉れ、是は何、彼は何、日本にも斯様なものがありますか、なんぞ、語り且つ問ひなぞして平氣なり、是れ定めて知己の間ゆへ、止むを得ず、斯く面倒を見て呉れるものならんと思ひ居しに、右の路を問ふ事なぞを以て推せば、彼等は蓋し此點に於て無感覺なり、無神經なり、有りやうのとて、此方にては自分外國人であるとの感念、悪く言へば、ひがみが除かぬに、さりとては耻入りたる事共なり、日本は廣し、在留外國人は多しと雖も、未だ外國人を捕へて路を問ふものはあらざるべし

▲車上と徒歩 人道には徒歩者充てり、是れ何者ぞ、殆んど悉く近距離を歩むの入り、何となれば、或るより以上を徒歩するは頗る不經濟なればなり、車道には車

馬充ち、鐵道には汽車充てり、其乗客は何者ぞ、上は王公貴人(但勿論手馬車と知るべし)より下は裏棚の宿六に至る、上下内外の人類なり、王公貴人は論外に置き、彼等が乗るは經濟の爲めなり、時是れ金なる格言は最も事實に行はれ居るを見る

其他何者が徒歩し、何者がせざるか  
パン屋、石炭屋は概して馬車なり、牛乳屋、野菜屋、鉢の花賣は馬車なるあり、自ら車を挽けるあり

丁稚車は荷箱の前に一種の自轉車を付けたるなり、丁稚之を踏んで走る、是れは長崎にても採用し得べし

配達會社(後に記す)の配達は馬車あり

終始徒歩するは、只郵便電信の集配人にして、是はまた意外なる程悠長なり(路を問ふに巡查なくんば郵丁に問へとは前に記せり)就中郵便集配人は番號の入りたる赤襟の制服を着け、前後に眉底ある制帽を頂き、恰も大黒天の、様な白の大袋を肩にかけ、トボトボと歩いて居る、是れでどうして間に合ふか、其受持區比較的狭く、別言すれば集配人の數多きを以て、毫も遅延する様のことなきのみならず、猶匆卒急忙より越る諸多の過失を防止するを得るなり

▲制服を賤しむ 制服を着せるは巡查、郵丁、鐵道驛丁、官廳會社、ホテル乃至豪家

の給仕、支關番(但し給仕支關番は概ね燕尾服なり、使丁等にして、當地に於ては頗る之を蔑視せらる、故に通例服制の美を誇る所の陸海軍人と雖も、練兵其他萬止むを得ざるに非れば之を着せず、大概の公會公式までは矢張り通常服を用う  
學生また通常制服なし、オックスフォード、ケムブリッジは背廣(但し別に講堂服あり)、ネーソンはフロックに絹帽、其幼年生はイートンジャケット(燕尾服に尻のなきもの)と絹帽を例とせり

(六十四) 倫敦 (續)

▲倫敦の人口 羅馬人時代には一哩に半哩の一小商市なりしもの今は十五哩四方となりぬ其人口増殖の狀況略ぼ左の如し

千六十六年	四〇、〇〇〇
千七百年	七〇〇、〇〇〇
千八百一年	九五八、八六三
千八百二十一年	一、三七八、九四七
千八百四十二年	一、九四八、四一七
千八百六十一年	二、八〇三、九八九

千八百八十一年

三八一、五五四

千八百九十一年

四二一、〇五六

(最近調査)

同年大區域内

五六三、三三三

(グレート・ロンドンと稱するもの)

同 現住戸數

七九七、六七九

即ち一戸平均七人、斯る大都會にしては非常に寛濶なる住居の状況なり、例へば巴里の如きは面積は倫敦の六分一にして、其の住民は二分一あり、即ち巴里は倫敦に比し三倍群集雜居せる割合なり、而して倫敦の住民を家族に分ては

英 蘭 人	三九三四、三六八
愛 蘭 人	八〇、七七八
蘇 格 蘭 人	四九、五五四
ウエールズ人	二八、〇八五
獨 逸 人	二一、九六六
佛 人	八、二五一

澳 人	一一、二七
和 蘭 人	四、一九三
丁 抹 人	五三三
諾 威 人	五九八
猶 太 人	三〇、〇〇〇
瑞 西 人	四、〇八九
匈 牙 利 人	二四七
瑞 典 人	九〇四
露 人	一、七七八
波 蘭 人	六、九三一
白 耳 義 人	一、四九二
荷 人	一五一
西 班 牙 人	四七三
伊 國 人	三、五〇四
希 臘 人	二二八
土 耳 其 人	二五三

セルビヤ人

羅馬尼亞人

四  
三六

右英蘭人三百九十餘萬人の内、二百四十萬千九百五十五人は倫敦に生れたるものなり

倫敦にては平均毎四分間に一人の出産、毎六分間に一人の死亡あり

倫敦人は二百六人の市會議員、百三十八人の郡會議員、六十二人の衆議院議員、大學を合せ一萬六千人の巡查を有す

市は人口三萬七千五百四、戸數五千七百五十、其人口は市の繁昌と共に漸次減少しつゝあり、少くとも家の四千戸以上は夜は空虚となる、之に於てか倫敦の市に夜の人口、晝の人口の目あり

▲使丁會社の事 著名なるもの三あり、第一は千八百五十九年、タイムス社のキヤプテン、サー、エドワードウォーター氏の創立せるものにして善良なる滿期兵を以て組織し、第二は海陸軍年金受得者を以て組織し、第三は通常會社の營業に係り、郵便局より高き賃錢を以て書狀物品を配達し、其他種々の用途をなす、交際の書狀の如き、當地の風習にて郵送を失禮とするものは、概ね之に依頼するなり

▲女中道案内會社 何もかもよく揃ふたものなり、是は女中客乃至は女中同伴

男子の客に限りて其依頼に應じ、都内近郊は勿論内外各國にわたつて旅行の案内通辯をなすなり

### (六十五) 倫敦 (續)

七月十九日 水晴、七十九度

▲サー、エドワード、アーノルド氏 最も日本に有名なる人物なり、某嬢の紹介に依り此日氏を其住邸に訪ふ、通例面會は二度目の筈のものなれども、氏は早速お目にかゝらん、但し執務中ゆへ十分間に御免を蒙りたしとて、直に書齋に導き入れらる、邸は南賢真頓のポルトンガードンスにて、閑雅高尚の地區に在り、構造亦高尚なり、別に文庫あるか、此室内の書籍は左程多からず

氏は殆んど白頭の老翁、風采温雅、且つ洒落、大稿のコートに鼠のチョッキ、ズボンを着つ、其他一体氣樂緩濶に住みなし居り、今や其主宰せるデイリーテレグラフの原稿起草中、特に勉めて金筆を休ませたる所なり、快然聲をかけて、ハロー、ミスター、イノクチ、大日本から何時來られましたかといふ、早速の挨拶が大日本なり、次に御門の大便を稱えて止まず、日本の美を説く、更に切なり  
夫人は世人の知る如く日本レディーなり、同じく室に在りて茶を侑めらる、夫人は

既に六ヶ年當地に住すと  
予は十分間に何をなすべきか、先づ以て當面の用務たるデーリーテラグラフ社一  
覽の紹介を請ひ、其他は出来るだけの談話をなして未だ宜しいと止められたるを  
再會を契りて匆々に辭し歸りぬ

▲倫敦は空虚 となりけり、多くの男女は今月初より或は去月より避暑旅行  
とて方々へ出で去りぬ、議會も近々閉會すとかや、予の知人も大概出拂ひ、今や殆ん  
ど取り遣されんとす、而して予の用務は如何といふに、既に一通りの見物は之を終  
へて、内部事情の探察も亦稍得たる所のあるが如し、されば此上は更に豫期の  
個所二三を視察して、其他材料を蒐集し、結局來月は當地を辭して、豫期の前路に進  
むべきなり

夏季は倫敦時候と稱して世界各国の旅客當地に輻輳し、殊に米人の來遊最も多く、  
爲めに當地の宿料と、大西洋の運賃を騰貴せしむるに至ること、世人の知る通りな  
り、されど、當地の上流社會は概ね七月より避暑にゆき、九月十月に至りて歸る  
みやこ自慢 げに京人の京自慢、世界の何處にも是はあるなり

倫敦人の曰く

米國人は英語を知らず、米國人は取り外づしのカフスを用ゐる程ケチなり

米國人の曰く

英國人は土鼠の如く地下を潜り(地下鐵道を指す)鳥の如く馬車の屋根の上にとま  
りてゆられてゆく程(バスを指す)香氣なり

倫敦人の曰く

巴里は寺院の軒下に妖婦が住む様な所なり

巴里人の曰く

倫敦の公園を散歩すれば霧の中より盜賊現はれ、上衣を後ろに押しまくりてポケ  
ッを攫つて去る、倫敦は左様な所なり(上衣を後ろにまくれば、手を動かす能はざる  
なり)

(六十六) 倫敦 (續)

十月二十日 未晴、八十度

▲倫敦の橋梁 其河筋の長さ割に橋梁の數は多からず、下は塔橋より上はキユ  
ーに至り、人道橋十四あり、外に數線の鐵道橋、地下鐵道もあり、あり、橋の最も有名な  
るを塔橋倫敦橋となす、左に

塔 橋

千八百八十六年起工、同九十四年成工の新橋なり、現今にては最下流橋尙遙かの下流に計畫中のもありにして、サーホレーヌジョンズ、ウォルフパーリー兩氏の設計にかゝり、上橋下橋の二道あり、上橋は満潮水面上高さ百四十二呎、下橋は同二十九呎半、橋下水深満潮三十三呎半、干潮十三呎半、橋の總長約半哩、三區に分れ、左右兩端橋は各二百七十呎、中央橋二百呎、中央の下橋は巨船の過ぐるとき、左右に開きて高く上に立つ、其之を開くに要するの時間、僅に一分半に過ぎず、南端は尙完くは成工せざるに拘はらず、既に要せし工費約百二十萬磅、一ヶ年の維持費一萬四千磅を要す

費用は市の負擔、南端工費は郡の負擔にして、定礎式は皇太子、開橋式は皇太子及び同妃兩殿下之行はせられたり

#### 倫敦橋

倫敦最古の橋梁にして百年前までは實に唯一なりしなり、現今のは蘇國工師ジョンレンニー氏の設計にして、千八百二十五年に起工、同三十一年の成工に係る、長さ九百二十八呎、廣さ五十四呎、工費二萬磅を要せり

下流より第二に在り、即ち塔橋と相望む

本橋通過の車輛一日二萬二千、徒歩者十一萬と申す、たしかに九萬九千の以上に

あれど、是れはむつかしの統計にして、今日の實際は猶多きなるべし

#### ▲倫敦の公園

都内にて、大なるをハイドパーク、リーゼンスパーク、ピクトリヤパーク等となす、其他中小の公園若干殆んど悉く池水を具へ、池には必ずボートあり、茶店は少し、園中鐵柵外の長椅子は無料、鐵柵内の小椅子にかゝれば直に一片取りに来る、慈善會の義捐金あり

世界に有名なるハイドパークは廣さ三百九十一エーカー、實際之に接續合一して名のみ異なる賢真頓ガードンを合算すれば六百三十一エーカー、我二百五十町歩以上なり、クキンエリザベスの時代までは猶狩獵場たり、漸く開けて競馬場となり、降りて夜は盜賊博徒の集合場となりしが爲めに鐵柵は繞らされ、鐵門は鎖され、今は倫敦繁華の中心に於ける、一の誇りとなるに至れり

各公園皆柵門あり、門内には貴族富豪の手馬車のみ入ることを得、されど人民之を常として別に不平をいふものなし

門は概ね夜の十一時に閉鎖す  
都の郊外にはキュー、リッチモンド、グリーンウチ、其他廣大無邊の大公園多々あり、殊に日曜日には人を以て充たす



## (六十七) 倫敦 (續)

七月廿一日 金晴、八十二度

頗る暑し、此頃夜は寝られぬ様の時あり、家の構造に依りて然り

▲デイリー・テレグラフ新聞社

此日午後四時過にゆきて深夜まで留まる、同新

聞は通例十二頁、毎週一回位十四頁の時あり、其時は特に二頁の婦人欄を設く、頗る流行の新聞にして、最も婦人に愛讀せられ、茶店、民屋到る處に見る、サーエドウキン、アーノルド氏あることとて、別して日本最負あり

社は市フリートストリート車馬絡繹の街頭に在り、廣大の家なり、入れれば左右に事務室あり、右は廣告係、左は販賣係にして、會計局は其奥に在り、二階に登れば編輯局あり、其次に數個の校合室あり、其奥に植字工場あり、其奥に紙庫あり、其下(階下)に印刷場あり

予の行きし時は少し早かりしを以て、未だ器械の運轉を開始せず、社員職長等特に試運轉をなし、乃至器械を解崩して頗る懇切に説明す

今其植字器械(ライノタイプ、マンチエスターライノタイプ)會社製、一臺五百乃至六百磅と稱すに付き概略を記せんに、同工場は新報社の工場より少々狭く、新報社が

數十百萬の活字を排列せる代りに、此處には三十四臺の植字器械を整列しあり、器械はタイプライターの大にして更に複雑なるものにかゝり、タイプライターが文字を紙に押捺する代りに、是れは一行づゝのステレオタイプを造出す(故に各臺溶鉛器を具備す)予も教示に隨ひ、試みに二三行やつて見たるに、固より器械が働くことゝて、誰れがやつても直に出来る、勿論便利至極なり

原動力は矢張蒸汽にして、職工一臺一人づゝ、外に助手若干あり、各臺間に奔走して掃除油差其他の用達をなす

文字のキイ(指頭にて押すもの)は大小二様文字と數字と記號を合はせ總計一臺九十づゝあり、日本の假名と數字だけならば、其字母を取り替ふるのみにて直に流用するを得べし、是に付けても我邦の文字改良は急務なり

印刷には大なる輪轉器五臺あり、是れは近年日本にもあれば別に説明するの要なかるべし

五時半植字器械の運轉を開始し、印刷は八時頃之を開始して一時或は二時に至る器械の音のガタ／＼ガラ／＼は是非もなければ、英人の事とて社内工場一體に静肅此器械の傍に立つても、我々のごとく、高聲を發せず、其の代りに、耳に就いて語り工場は隅々まで頗る清潔なり、喫煙はもとより嚴禁なり、茶と麥酒は勝手に呑んで

居る

校合係りは各部門に分たれ、記者亦無論各専門なり、而して紙面編成係と校合係等の外は出社せず、自宅或は出先より原稿を送る、歐羅巴の新聞記者は、固より我々の如く、よろづ屋記者に非ざるなり

原稿は各小片紙に、草書ながら丁寧に読みやすく書かる(餘は全くの私用につき略す)

タイムスには次の月曜日にくぐ

### (六十八) 倫敦 (續)

▲見物交際の面倒 英人性頑新を入るゝに吝なり、故に當國の視察は頗る困難と稱せられ、嘗て鐵道視察の某日本官吏は單に某鐵道にて終點驛乗客の切符を其手前の驛にて取り集むるの事實を視察し得て歸れりとかや(其結果は現に日本に實行せられあり)是れ蓋し極端の例悉く然るに非ざるべしと雖も何にせよ面倒は面倒にして、場所の一ヶ所一ヶ所につき、人の一人一人につき、各別に相當の紹介を經ざるを得ず、日本の如く文部省の紹介を得れば殆んど全國公私の學校を視るべく、農商務省の紹介を得れば概ね全國各種の工場を視るを得るといふが如く輕便な

るものに非ざるなり、故に一事件につき短きも一週間、長きは數週間更に長きは數ヶ月も費し、書面の往復を繰返へさざるを得ず、故に當地の多少交際ある男女は毎日午前を書面書きに潰す程にて、予の如き一路人と雖も亦毎日の様に之を書くの要あり、日本の如くむだ足を踏むことなき代りに、其豫備は面倒にして、別して萬事無造作に慣れたる予等日本の學生には一層窮屈を感じるなり

紹介者を要する前記の如し、されど之を得るに限りあり、故に止むを得ざる時は予は旅人故として無禮を斷わり敢て自ら紹介するなり、左すれば意外に歓迎を受く結局するに、予は未だ困難を語るの域に達せず、只其面倒なるだけは事實にして随つて意外に用事の多きには閉口なり

▲英人の差別無差別乃至矛盾の事 諸君子が屢々這種閑散の問題を記するを答ひる勿れ、是れ某の工場が廣さ何呎職工何百といふ底の記事よりは、多くの時間と注意の費されたるものなり  
男女殆んど自由に相交際す、されど風呂屋、厠圍は勿論、鐵道の待合、船の休息室、居酒屋に男女の別あり、茶屋飯屋亦往々にして男女専門のものを見る、其他男席女席の別あるもの頗る多し  
男女別ありの事實、男禁制、女禁制の場所は今の日本に之を見ずして、却つて英國に

之を見る  
 知り合ひの男女自轉車を共にすることあり(一車に二人乗る)夫婦も其室を同じうせず  
 親も無案内に子の室に入らず、然れども飲食の器具は毫も區別なく、甚しきは犬猫と共にす(自分の皿に殘肉を盛りて之を猫に與へ、犬に與ふ、故に次回は其皿が誰かの前に廻つて居るなり)  
 無論人權は平等なり、されど主従の別は寧ろ日本よりも嚴重にして、婢僕雇人は主人の前に座するを得ず  
 食時に來れば疎友にも食を侷め、他時に來れば珍客にも茶も水も汲まず  
 人に對しては自分の嬾にもミスセスを付け、相對にては、自分の亭主にも其實名を呼び捨てにす  
 國會議場にては帽を被る、婦人の前に被るを得ず、室内にては帽を被る、炎天室外に傘をささず(但し男子)  
 賣藥に毛生へざるのくすりあり、髯ある婦人あるが爲めなり、瘡藥あり、肥えて困るものあるが爲めなり

(六十九) 倫敦 (續)

七月二十二日 土朝雨、後晴、八十五度

昨日市にては日蔭華氏九十三度に上りたる所ありといふ  
 ▲英國大學運動會 實は當國オックスフォード、ケムブリッジの兩大學と米國エール、ハーバード兩大學との競走會なり、此日午後西賢眞教女王俱樂部の園内に施行せらる、此處と米國とは隣りではあれど、斯る聯合運動會は稀れなれば、(數年前にもありしといふ)士民争うて之に趨く、此炎天に拘はらず、予も見物事の致には洩れと汗を絞つて駐付けたるに(鐵道にて)わはや門限の間際にて僅に拒絶されざるを得たり、蓋し運動は四時よりなれど、門は二時半に締め切るの定めなりしなり、而して五志の椅子は最早一脚もあらず、二志半の立ち賃を出して立つて見たるに、何さま萬千の觀者の事とて、暑く苦しきこといふべからず、其を人なみに辛抱してやつとの事定刻を待ち受け、二三番の勝負を見て逃げ歸りぬ  
 さて、予の見たるは巾飛(四大學一人づつ)、百ヤード競走、一哩競走等にて、其外には鐵鎚投げと、高飛及び三哩、半哩、百二十ヤード等の競走ある筈なり、固より辛勞を償ふの面白味も何もなければ、當國人は中々運動熱心にて自ら運動するを好むと我

に、亦之を見るを好むこと甚だしく、凡そ運動事といへば食を欠いでも見にゆくことなり

此日皇太子殿下及びヨーク公夫妻臨場せらる

七月二十三日 日雨七十五度

▲英國の氣候 英國は緯度は何邊にあるか、倫敦北緯五十一度、英蘭の南緯五十度、蘇格蘭の北端(其以北の孤島を姑く置き)五十九度の處に在り、故に倫敦は樺太の中央にして、英國大體はカムサツカと同緯度なり、されば頗る寒からんとは最初何人も想像すべき所なるが、天は獨り此國民に對して殆んど偏頗至極の良氣候を與へたるぞ不思議なる、其原因は主として潮流に在りといふ

地球の赤道以北に於て、一年平均華氏六十八度、最寒季の平均同三十二度の温度を示し、略同一の良氣候を有するの一帶あり、英國は實に此帯に包まる

帯は日本に於て奥羽の央より以南、琉球の央以北を包み、朝鮮半島の半を掠めて支那大陸に入り、中央亞細亞にて其幅を狭め、地中海にて之を擴張し、南は亞弗利加之北西岸を侵し、北は黒海の過半、バルカン半島、伊太利及び佛蘭西の大部を併はせて一たび太西洋に出づるや更に大に其幅を北方に擴張し、那威の西海岸を掠めて遙に北緯六十四五度の洋中に至り、漸次退却して太西洋中に大なる三角形をなし、米

大陸に渡りては更に縮少し、合衆國の南端と墨西哥の間を貫きて太平洋岸に出で更に稍擴張して太平洋の東方に不等邊三角形をなし、漸次に縮少して日本に還り再び前述の狭さとなる

而して英國は實に前記太西洋に於ける大三角形の中央に在り、乃ち緯度は遙に北方に在りながら、氣候は日本と同一なるを得るなり、諸君若し其世界地圖に前述の指點に隨ひて二線を畫せば、如何に造物主が此國に對して殊恩を垂れたるかを見すべし、實に英國と同緯度に在りて、英國同様の良氣候を有するを得るは、世界に於て唯英國一國のみなり

(七十) 倫敦 (續)

▲英國の氣候(承前) 英國は大體に於て、其氣候線に付大幸福を享有すること前述の如し、而して其最寒季と最暑季との平均温度の差は、倫敦に於て二十六度、英蘭を通じて二十四度半、エデキンバラの併行線に於て二十五度に過ぎず、之を巴里の三十度、聖彼得斯堡の五十度に比す、豈に其至福を發見すべからずや、又冬季三ヶ月の平均温度は愛蘭のダブリンに於て三十九度にして、遙か南方なる伊太利のミラノよりは三度高し、故に當倫敦の如き、夏は暑さも冬服を脱するに至らず、冬は日本

の東京より却つて凌ぎ易しといふ風なき故なり  
 然れども右の幸福に伴ふ一の不幸は空氣の濕潤にして、南西の風之を齎らし、十一月を中心として冬季數ヶ月殆んど雨季なり、降りみふらず見の雨は深々として、晝暗きこと夜の如く、固より日は八時後にいで、四時前に没することゝて、其不愉快耐ゆべからず、健康に害ある論なきなり  
 されど此不幸は前の幸福を以て之を償ふて餘りあり、加之人工の衛生法頗る周到せるを以て、當國は歐羅巴中一の健康地を以て目せらる  
 ▲大學運動會の結果 昨日同運動會の結果左の如し

一、巾飛 (英勝)

- (一) オックスフオード學生 二十三呎
  - (二) ハーバード 二十二呎三吋
  - (三) エール 二十一呎九吋
  - (四) ケムブリッジ 二十呎四吋半
- 二、百ヤード競走 (米勝)
- (一) ハーバード 十秒間
  - (二) オックスフオード 此差僅に半ヤード

(三) エール

(○) ケムブリッジ

三、一哩同上 (英勝)

- (一) ケムブリッジ 四分廿四秒間
- (二) オックスフオード
- (三) エール
- (○) オックスフオード
- (○) エール

四、百二十ヤード同上 (米勝)

- (一) ハーバード 十五秒間
- (二) ケムブリッジ
- (三) オックスフオード
- (○) ハーバード

五、鐵鎚投げ(鐵鎚重量十六磅) (米勝)

- (一) ハーバード 百三十六呎八吋半
- (二) ハーバード 百二十二呎九吋

百九呎六吋

百九呎六吋

六、半哩競走 (英勝)

一分五十七秒

(一) ケムブリッジ

(二) オックسفオード

(三) エール

(四) ハーバード

七、四半哩同上 (英勝)

四十九秒

(一) ケムブリッジ

(二) エール

(三) エール

(四) オックسفオード

八、高飛 (米勝)

六呎

(一) ハーバード

(二) オックسفオード

(三) ハーバード

五呎十一吋

五呎十吋

(四) ケムブリッジ

九、三哩競走 (英勝)

十五分二十四秒

(一) ケムブリッジ

(二) エール

(三) オックسفオード

(四) オックسفオード

(五) ハーバード

(六) ハーバード

斯くて九番の内、英五勝、米四勝、結局英の一勝なりけり

(七十一) 倫敦 (續)

七月廿四日 月曇

タイムズ社、自介紹介にて豫め社長ウラルター氏に照會せしに早速快諾の報を得たれば、此田事務編輯の各部を経て印刷局に至り、文撰植字、ネラレオ印刷、賣捌の順序を一通り観察す(社員ゼロムスハンソン氏案内す)

社は東市クキンピクトリヤストリートの入口にして、ブラックフライス橋畔に接し、其近隣は諸器械其他の大商店のみにして、頗る雑踏の所なり、家は赤煉瓦にして、稍々他より高く、上下二個の大時計あり、以てタイムスの意を寓す、構造は堅固朴實を主とし、入口左右に事務局ありて、頗る手廣なり、編輯校合等は階上より裏の印刷局にわたる

印刷局は後方プリンティングハウススクエヤにありて、裏町にも入口あり、表よりも行かる

此社には猶數多の文字棚ありて、矢張文撰をなしライノタイプと併用す、ライノタイプはデリーリテレグラフィのとは其式を異にし、其數左程多からず、次に製字場あり、數臺の器械にて活字を製す、目のさめたるものなり

ステレオ場は地下層にして、其設備殆んど一個の小鐵工場の如く、ステレオの取り方頗る瞬速なり

印刷場は地上層に在りて、其下に紙庫あり、印刷器械は精巧を主として、數割合に多からず、五六臺有名なるウアルター印刷器は稍小にして、十數頁を同時に刷成し、一時間能く三萬部を造るにたへ二ヶの受箱に一部づゝ繰出す、其最大の印刷器(米國製)が二十四頁を同時に印刷し、切つて重ねて四ツに折つて吐き出すはいふまでも

なく、其に比しては頗る小なる週刊タイムス印刷器は十餘頁を印刷して切つて重ねて糊付をなし、猶其上に針金もて二ヶ所綴ちて、然る後に差出す、其れが人力を要するは只一人の器械方のみにして、而して其刷成の新紙を隣室なる配達整理場に運搬するには二人或は三人の人手が不斷に百度參りをして居る、イヤハヤ何もかも黄金次第是さへあらばと思ふことのみなり

印刷場の隣りは配達整理場にして、頗る手廣、其側に賣捌所あり、口を裏町に開く、本社より配送するものゝ外、數十部數百部を求むる小賣捌人等、休息所に溜つて待つて居る(タイムスは毎日午後第二版を刊行す)毎日朝は此所に人山を築くこと數時間なりとぞ

之を要するにタイムス社は、一筆世界の帝王等を喜憂せしむる、世界最大新聞の本局としては、寧ろ其規模狭少の感あり、蓋し堅固朴實は、當國民の特色にして、タイムス社内徹頭徹尾其特色を表現せり

最後に局員サインを請ふ故、常の通りに記載せしに、貴國のお方は珍らしいから、どうか貴國の文字にてどの所望に、さらば斯くなん、但し日本の文字は随分大きく候ふぞとて、大日本長崎新報主筆何某と幅廣に認め、謝意を述べて歸りける

因みに記す、一昨日のデリーリメールに在支那の某宣教師が支那文字四千を押

採し得るのタイプライターを創製したる由を報せり、小新聞の記事なれば、おてにはならぬが、若し萬二事實ならば、之を移してタイプライターとなすこと容易なり、果して然らば日本の新聞紙亦十分其恩澤に浴するを得べく、殊に我新報の如きは千か多く二千字以内にて編成するを期すべし、漢字廢止の順序としては先づ以て漢字を減少するの外なきなり

(七十二) 倫敦 (續)

▲倫敦の新聞紙 筆の序でに其概略を記せんに、凡る郵便條例に依りて新聞紙として發行する新聞雜誌類倫敦に於て約五百あり、雜誌は姑らく之を措き、自刊新聞紙に付いていはんに、タイムズは無論最大にして頁數十六より二十四に至り、價は一部三片なり、外に週刊タイムズ及びリテラチュアなる文學雜誌を發行す組織も主義も獨立にして、無論世界の新聞王なり、其他デトリミエースは自由黨、スタンダードは保守黨の首部機關にして、モーニングポストは貴族の機關たり、通常新聞紙は頁數約十頁にして朝刊多く夕刊少く、一片を通則とし、小新聞は半片とす、夕刊の内名あるはベルメルガゼット、イーグニシグスタンダード、グローブ等に

て就中グローブは夕刊の最古、千八百三年の創刊に係る、英國に於て最も古きは倫敦ガゼットにして、千六百四十二年の創刊に係り、其他タイムズは千七百八十八年、最古と自稱するモーニングポストは、同世紀にして少し早し、發行部數は各社の秘密、最も自分の廣告吹聴に勉強するデトリミエースは、其他の各新聞よりも毎週百萬部多しと自稱す、されば他新聞が一週間百萬なれば、同新聞は二百萬、他が一萬なれば、同新聞は百一萬と申すことなり、如何にも圖法な計算法と稱ふべし、タイムスの用紙一卷長さ四哩有半、約六千部を印刷し得と稱す、而して他に於て聞く所に依れば、同社は毎日約三十卷の紙を費すといへば、即ち三六、十八萬、果して事實ならば、輕少に過ぎたり、但し同新聞は高尚と高價と頁數多きとの爲め、之を讀むものは殆んど世界の一流社界に限られ、當地にても讀者多からず、都内重立つたる場所の外、多くの賣捌外賣子等は之を賣捌かざる程なれば、或は事實なるやも知らず、記事は其社會の高尚なるよりも高尚にして、之を英國新聞の特色と稱せらる、然れども地方新聞に至りては必ずしも然らず、往々夫婦喧嘩を記して、彼等夫婦平生の仲らひは犬よりも淺問しかりきなど、殆んど日本の小新聞の如く、酷言するを見る、但し日本新聞の所謂三面だねはこれなし



當地の新聞は日曜日に休刊す、故に當地の新聞社にては或る部局は土曜日午後より日曜にかけて休業し、日曜日の夜執業することなり、近來其隙を窺ひて起りたる日曜新聞(日曜日のみ發刊する)四種あり、餘り行はれず、當地の人は日曜日には、寺参りと公園行をなすのみ、新聞讀むことも好まぬなり、新聞賣捌店は市街の到處及び停車場に必ずあり、路傍の賣子亦無數にして花賣マツチ賣を合はせたるよりも遙に多し、随つて新聞を讀むことも亦甚だ少からず、毎日一種以上を買はざるもの極めて稀れなり

### (七十三) 倫敦 (續)

▲サムエル・セト・ハウス(セーキズピーヤ遺言狀) は一寸役所の勸工場ともいふべき面白き所なり、即ち國稅徵收所、稅粉検査局、戶籍其他の登記所遺言狀局等悉く一屋内に在り、加之キングスコローシなる一大學亦之を合む、其遺言狀局にはセーキズピーヤ、ニエートン等の遺言狀を有すと聞き、予は役所見物旁々其を見んとて此日ゆく

家はウヲータールの橋畔に在りて、其堅固廣大なる、まるで一個の巖山なり、窗の數は三千六百、官吏乃至雇人の數が千六百人、其俸給年額が三十五萬磅といはゞ以て大概を察知すべきか

予は固より不案内のことなり、迷兒となりて地下地上東西南北廊下梯子を奔走して各役所の概況を見、最後に遺言狀局に至りてセーキズピーヤの遺言狀謄本交附を請求せしに、是は其限に非ずとて拒絕せられたれば止むを得ず、閱覽のみに満足し、規定に依りて手数料を拂ひ、其請求をなし、一の傳票と共に、其保存係りの室に送らる、保存係は老吏なり、一人徒然の折にてもありしか、マアおかけなさいと椅子を與へ、四方山の物語りをす、程なく一人の給仕數多の鍵を携へ來りて案内するに隨ひゆけば鐵扉幾たびか之を開きて地下倉庫に至る、見わたせば數十坪の庫内、數十百の架棚に、各番號を打つて丁寧に排列保存せられたるの遺言狀其數幾萬千なるを知らず、此處に數人の看守あり、一人大なる箱を取り出し來る、予の請求したるものは是れなり、看守予に椅子を與へて件の箱を其前に置き、錠を開きて取り出すは即ちセーキズピーヤにして、黃に染み縁は爛れたる書簡三枚各硝子の額に納めていと勿体に保存しあり、實に世界の珍品ありと贊辭を呈すれば、保存上の注意また至極には候はずやと看守誇り顔にていふ、日本の井口某に著書の版權を譲るとも何とも書いてあるではないに、只其を見んとて斯く骨折りける、實に好奇ころ小供らしけれ

再び隣の室に戻りて、謝して去る

▲ナシヨナルガラット。トランプアルガトリスクエヤ、チルソンの像の背後に在り、外部は巖山疊々たり、内部は金光燦爛たり、當地最大の油繪館にして古今にわたり、内外をかねたる、大畫小畫數百千、上層下層數十室に掲げらる、之を仔細に見んことは一日半日の事にあらざれば、飛脚でばしど人の問ふまで駐けまはりて去る、裸体美人は少からねど馬耳塞のものはど派手なるものなし

七月二十五日 火晴

七月二十六日 水晴夜雨

此夜近街高等小學校褒賞授與式の案内状を得たれば七時よりゆきしに既に式は始まつて居り、晝の學校に夜の授與式、是は父兄參列の便をはかりたるにて、當地に於て有職業者が晝の時間を欠くことは容易に非ざるを以てなり、場所は學校のホールにして、割合に大きく堅固なり、滿場盛裝の佳人、百花の春を争へるが如し、男子は極めて少數なり、男兒の學校ながら參列者は父兄少く母姉多し、式を兼ねて音樂會あり、生徒の唱歌奏樂、生徒教員混合の狂言あり、すべて二十餘番、其中間に褒賞授與、校長管理者の演説あり、最後に女王祝の唱歌あり、一同起立、演説、唱歌奏樂の間は固より褒賞授與の際は各授與毎に滿場拍手破るゝが如く、演説中

にも滑稽を交へて屢々レディースを笑はしむるものあり、萬事謹嚴内氣にして突飛、手の如きものを退屈せしむる英國の社會にしては、殆んど稀有の快活の狀態なり、終式は十時半、來賓の半は褒賞授與の終ると共に歸り去れり、校の職員は例の法服、生徒は悉く小兒禮服を着せり

### (七十四) 倫敦 (續)

七月廿七日 木、七十四度

七月廿八日 金、七十二度

七月廿九日 土、七十三度

暑いと思へば直に涼しくなる、是れ冬服にて通さるゝ所以なり

▲男女、髪の毛の事 黄金髪は歐種美人の一資格なるがさて實際は極めて稀れなり、偶々是れを眞の黄金髪といふを見認めて、前にせはりて顔を見れば、所謂後ろ千貫前一貫の什物なり、三十二相具足の美人は廣き世界にも多からずと見えたり、婦女の髪は後ろに引きあげて凝みて平圓子の如く束ねたると、少しく髪を張らるるとの二種にて其他の結び様は餘り見ず、近頃日本に流行つて居る束髪、長く後より前頭へかけ道はせたるは一も見ず

裝飾は髪にあらすしてボンネットに在ること勿論なれど、毛髪の餘りに少きを厭ひて「かもじ」を用ゐるもの猶進みては髭を用ゐるものさへに有り、若きレディスが、あはれ我髪黄金色になれがし、獅子の鬣の如く縮れよかして、氣を揉み金を費やし、縮らかし屋にゆき、乃至藥を用ゐるなどのことは餘り珍らしからずと知るべし、婦女通例十五六歳までは所謂ガールの時代にして、髪を束ねず、被りて長く垂るゝこと疾く御承知の通りあり

男子は六七歳の小供に至るまで、髪を左、或は右に別けて美しく撫で付けて居る、壯者は必ず髯を貯ふれども、鼻下八字のみを通例とし、髭鬚は老人の外、之を存するもの稀れなり

女子は後れ毛の多きを厭はず、男子は一毛もこれあるを忌む、男子は脱帽を禮とするが故なるべし、男女通じて黄金髪を最上とするはいふまでもなく、其他は總じて薄きを尊び、濃きを賤しむ、故に我々の毛髪は零點以下なり

廿七日新聞紙北京電報を掲げて曰く、日清同盟の事に關し、一の日本アドミラルは北京に入り込み、清國の陸海軍の日本士官の訓練にて組織せんことを求め居り、日本の一小艦隊は太沽に在りて、其艦にはプリンヌコムラ(小松宮殿下を意味するか)乗り込み居れり、云々、虚實は知らねど、何だか心地よげのはなしなり

又ステッチンに於ける甲鐵巡洋艦八雲の進水を報じ、又布哇大地震死者二百との紐育電報を載せたり、死者の中には定めて邦人も多かりしなるべし

▲英國の三尊 英國の名譽界に三尊あり曰くタイムス主筆、倫敦市長、内閣總理大臣是れなり、之を併稱して其中に就いていはす、蓋し好き／＼と申すことなり、首相とタイムス記者の意思は以て世界を動かすに足る、其名譽あるや當然なり、獨り市長が僅々一年の任期間、僅々晝の人口五萬夜の人口三萬餘の一小自治體を管理するに過ぎずして其名往々首相を凌ぐものあるは、蓋し由緒の久しきに由歟

### (七十五) 倫敦 (續)

▲英國人の家庭 是れ寧ろ困難の問題なり、只其れ困難の問題なりと雖も、予は之を研究せざるべからず、何となれば家庭は人情風俗の根本、世道人心の源流たり、究竟すれば一國の文野治亂興廢存亡は國民家庭の善惡美醜に原因し、古人の所謂治國平天下の道、其歩を一家一身より始むるものさればなり

斯故に予は限りある短かさ旅程に、なるべく多く、なるべく密に、其真相を知らんと欲し、爲めに聊か苦心したり、即ち通常洋行者が敢て忍ばざる窮窟を忍び、一切日本人としての除外例(日本人は慣れたる家にては通例或る程度に於て日本人を度外

に置くを謝絶し、賓客としての特權を抛棄し、全く家族の一員として某の民家に寓し、飲食起居座臥行遊を共にし、其他交友の間は質して、以て觀察に努めたり、辭言すれば予が宿にては、一の探偵を養ひたるなり  
されど得る所甚だ多からず、乃至得たりと思ふ所は平々凡々外遊前より見聞想像せし所を質にするに過ぎず、されど事實は事實なり、平凡の故を以て必ずしも捨つべきに非ず、否、平凡こそ事實にして何か珍らしきものあらんを期せしは此方の誤りなりしかり、即ち善悪大小を問はず、事實のままを左に記載す、固より一例に過ぎずと雖も、傍ら参照併記したる所あり、且つ此一例は亦以て一般の概況を察するに資すべきを信す

都人の曰く、英國民に四個の階級あり、貴族、ゼントル、クラス、コムモン、クラス、プーア、是れなり云々、猶我國に華族、上等社會、中等社會、下等社會あるが如し、而して貴族は固より貴族にして其境界判然たり、以下の三階級は之を精密には別ち難しと雖も、概別すれば略ぼ左の如し

上等社會(ゼントル)

勳爵士、僧職(但し其中のビショップ以上は貴族相當とす)、富豪、學者、政治家、高等官等、主として資本若くは高尚の職業に依りて贅澤に衣食し、所謂社會の上流に游泳するものを含む

中等社會(コムモン)

商工、農、公私月給取り社會等、自己の能力及び多少の財産に依りて、儉素但し確實安きに衣食するものを含む

下等社會(プーア)

車夫、馬丁以下勞働者を含む  
又或る時はゼントル、メン、とクラフ、キング、メンとの二に別つことあり、斯るときは大約小實業家、書記、番頭以下クラフ、キングに屬し、身自ら勞働せざる主人及び其相當以上ゼントルに屬す  
前掲のゼントルは稍々嚴格なる意味なり、日常稱呼のゼントルは區域頗る不判明、乃至頗る廣濶にして、其極端の場合にては男子全体をゼントル、メンと稱し、女子全体をゼントル、ウ、キ、ン、或は、ン、デ、イ、スと稱すること猶我邦にて或る場合に男子全体を殿方、女子全体を姫御前と呼ぶに異ならざることあり  
却説今予が記せんとするは中の中の家庭なりとす

(七十六) 倫敦 (種)

▲英國人の家庭(承前)

一、其家屋

倫敦は西區舊市を距ること約六哩、某の大通より別れて他の大通りに通ずる大横町、左右一帯の非商店街にして道幅廣く、並樹美しく、家並概して揃ひて高尚なり、並樹の内に人道あり、人道の側に手投げばかりの鐵柵あり、其一方に柵門あり、柵内に薄き生垣、まばらに往來を見透す位の生垣あり、生垣の内に傾きたる三坪ばかりの小庭あり、其側らに地下層なる下女部屋の通用口あり、日本の所謂勝手口にして、臺所の用聞き是より出入す

蓋し門を入れれば其側らに下り段あり、是れ勝手口にして門の正面に上り段あり、是れ木戸口あり、非商店街は通例皆な此構造にして、地下層は半地下層なり、半ば下りて之に達し、半ば上りて地上層に達す、商店街にては地上層平面に在り、故に地下層は全くの地底なり

木戸口の側には葛蘿長く生へ上りてあり、其傍らに案内鈴あり、戸は半硝子但し不透明硝子にして其中央にタ、キ鐵或は眞鍮にて造る、カラ／＼と叩くものなり、ありタ、キの下に郵便口あり、戸の外に靴磨き臺あり、戸の内に靴磨き席あり、さて入れれば左に傘棚帽子臺あり、右に應接所あり、突當りに居室兼喫煙室あり、其外

に裏庭あり、長方形にして凡そ二畝、三邊に草花を植ゑ、中央を空地とす、家は四層にして地下を合はせ即ち五層、先づ地下より始めんに表の方に廣き食堂あり、其次に臺所兼下女部屋あり、其傍らに下女便所あり、無論表裏に入口あり

地上層の表は應接所にして、其次に一の寢室あり、其傍らに前記の喫煙室あり、二階に三個、三階に三個の寢室あり、四階には一の寢室と物置とあり、二階に便所兼洗面所あり、三階に浴室あり、都人地下層を基點として地上層より一二三階と數ふることあり、或は地上層を基點として二階を一階として數ふることあり、其例一定せず、今日本の例に隨ふ、凡そ地下層より四階に至り、各室必ず一暖爐あり、其構造は應接所と食堂のみ眞の大理石にして、其餘は概して紙大理石なり

斯くて十數箇の煙管は屋上に至りて集合し、土製の煙突十數本となりて豎に相並ぶ、火力の利用も簡單ながら巧妙にして、地下の臺所にて料理をすれば、同時に二階の洗面所、三階の浴室に澤山の湯が沸く、水道の利用は三階まであり、四階になきは能はざるに非ず、せざるなり

各室に瓦斯燈あり

家屋の構造大概は前述の如し

二、其家財及び裝飾

他人の家財を數ふるは聊か失禮の沙汰なれども、是れは予の職業に面して特に有免を請はざるを得ず

裝飾の府は無論應接所にして、此處には先づ以てピアノあり、上等の長椅子二脚と椅子善惡六七脚、大小三個の圓卓あり、暖爐の額上には例の鏡の前に結構なる置時計あり、大小の英國製彫像、其他の置物あり、卓上には英國製花瓶數多あり、孰れも毎日草花を生く、壁に畫額寫眞額、支那及び日本の皿、英國及び日本の扇面(此家日本に縁故なし、右日本品は單に物數奇にて買ひたるなり)其他種々あり

### (七十七) 倫敦 (續)

#### ▲英國人の家庭(承前)

##### 二、其家財及び裝飾(つゞき)

次は食堂にして、時計額面其他略ぼ應接所に同じ、但し椅子は勿論更に多し、毎日食卓に現はるゝ器具は悉く英國製にして、餘り粗末なるものはなく、魚叉魚刀は無論銀製にして其他ナブキンの環の内二個とバター入れ、ジャム入れの縁が銀、一の茶瓶が全部銀製なり、之を店頭の前札に徴すれば確かに六七十圓以上のものなり、喫煙室亦數個の椅子、卓、額面あり、此室と食堂とに書架あり、藏書約六七百卷、種類は歴史

地理器械、詩類、拉丁、聖書、小説等多し、小さき圖書館には無きものもあり

各寢室に無論一人一個づゝの寢臺、洗面棚、箆筒、卓、二以上の椅子、四五個以上の額面あり、押入もあり、其他裝飾は各等差あり

喫煙室には廉價の置時計、二階の上り口には高價の大時計あり、予は地金屋にも質屋にもあらねば、眼が利かぬは勿論なれど、兎に角是を店頭の前札に參し、其概略を算するに、家屋に附屬せざる一切の家財裝飾、どうせ少くも二千圓を下らすとは思はれたり、而して是れ決して贅澤の家に非ず、中民儉素の生活に於て、殆んど必要欠くべからざるものゝみあり

畫額の最も良きは細君ミス時代の自作二三面にして、其他は概して仕入物なれども、其れさへ店價は五圓十圓以上の品物のみなり

老若男女即ち小供に至るまで悉く各自に懷中時計を有す、亦聊か味ふに足るべし

##### 三、其家族

斯くて此家に幾人の家族乃至眷屬住むか、老祖母一人、父母、三女、二男、一外客、一婢、一料理人(女子都合十人と猫一頭、小供の鳩三羽、其内下女と料理人は晩食の後は自宅に歸り、早朝に来る)、倫敦の下女は此例多し)

祖母は高年と眼疾の爲め毎日應接所の長椅子に休んで居り、但し學者にして佛語

も出来、一の作文の女生徒を有す父は某會社の月給職員にして毎日十二時間外に在りて働き、母は家政に忙はしく、長女年二十一、時々専門學校に通ひ、長男十八、書記學校を卒業して、辛うじて郵便局小吏の地位を得て居り、二女十四、二男十一、三女十歳、二女は小學を卒へて、其前途未だ定まらず、其以下は猶小學に在り  
祖母は地上層の寢室を占め、二階に父母あり、其隣りに三幼兒あり、長女は三階、長男は四階といふ如く、結局弱きもの好位地を得、強きもの之に反す

### (七十八) 倫敦 (續)

#### ▲英國人の家庭(承前)

#### 四、其衣服

父は固より絹帽にフロック或はモーニングなり、家居の時は粗服を着て居る、長男は未だ絹帽を被らず、丸帽に背廣にて濟まして居る、小供上りといふ故と、書記の多くの風俗が然るを以てなり  
母、長女は外出の時可なりに美服す、されど未だ絹衣せるを見ず、絹は袴の紐と少女の髪束ねとのみあり、二女(十四)は猶ガールの被髪、長靴、足袋ながら、既にコルセットを嵌めて居る、三女は未だし、二女今三四年もすれば、ミス何某と稱して髪束ね

袴の裾を引摺つて歩くことゝなるなり(衣服の部參看)

#### 五、其飲食

日本にて上流社會は朝遅く晚早し、當國にては上流は朝朝夕共に遅し、此家は中の中、自分の汗にて生活する階級ゆへ、朝夕共に早く、朝食八時、晝一時半、茶三時半、晚七時とす、通例は晝がランチ、晚がダイナーにして、只日曜のみ晝がダイナーにて晚がサッパ一なり、日曜は時間も遅くして朝が九時、晝二時、茶四時半、晚を九時とす  
其献立は朝ベーコン、或はベーコン、卵子に、パン、バター、ジャム、茶及び珈琲(ホテル相場二志半)、二週間に一度位ベーコンに代ふるに鹽鮭或は鹽鯖を以てすることあり  
一週間に一度或は二度牛肉タキを以てすることあり、朝は食卓に就くこと能く揃はず、其事務の種類に依りて八時に家を出づるものあり、十時後に出づるものあればなり、曰く是れ當國の通例なりと、晝は父、長男、時としては長女も留守にてあどは母と二三兒に過ぎず、祖母は起居不自由ゆへ別に自室にて食す、頗る小人数なり  
肉は牛羊或は牛一種に馬鈴薯外一菜、後段は二種を通例とし稀れに一種のときと三種のときとあり、外にバター、チーズ、パンあり  
晚は悉く揃ふの時なり、スープ、牛羊或は牛豚に馬鈴薯外一菜、其他晝に同じ料理屋

相場約三志)

晝晩の内一度稀れに魚肉を加ふることあり

晝と晩には麥酒或は葡萄酒あり、父母等少々づゝ用ふ

茶は茶と珈琲或は茶のみとパン二種、或は外に菓子あるときあり、貧民は此茶を以て午食に代ふるもの少からずと聞く

凡そ食卓にては父はテーブルマスターにして、母はテーブルレディたり、マスターは肉を切り、レディは野菜を分つ、父不在なれば母之を代理し、母不在なれば長女之を代理す、食の初めにはマスター極めて簡單なる祈禱をす(一同起立)其後にあらざればナイフを採るを得ず、食の終りにもまた祈禱す、其後に非ざれば席を離るゝを得ず、若し事故ありて離るゝものは長幼必ず御免を請ふ  
マスターとレディは卓の兩ともにして、他と異なりて大なる椅子あり、其他の席は必ずしも一定せず

### (七十九) 倫敦 (續)

#### ▲英國人の家庭(承前)

#### 六、起居、作業及び娛樂

朝起の時間は亦一定ならず、父は毎朝六時前後に起きて一たび出で、並樹の露深

く、入道の塵鎮まれる間を散歩し、歸りて人々を起して廻はる、母は稍々遅く起きて家事を執る、其他思ひくゝに起きて通例九時前に全部朝食を終る

父は十時半に出勤し、七時前に歸りて晩食を濟まし、食卓未だ終らざるに辭し去りて再び出勤し、夜十一時歸りて寝る、其勤勞寧ろ驚くべきに係らず猶優に交際讀書娛樂の時間を有す、即ち朝食前に手紙を書き、朝食後に新聞を見、書籍を讀み(此地方新聞遅し)談話し、晩歸の際一分時にても庭に出で、草花に培ひ、其他食堂にては食器を運び、凡そ家内雜事の手傳ひをなし、朝暮母に逢ひてまめやかに仕へ、靴も自ら之を磨く、然り而して從容自適、何處やらにては君子の風ありなど、もてはやさるゝに足るべきが、當國にては何でもなき一の律義なる凡庸男子、乃至通常の好人物なり、乃至一般の氣風が略ぼ斯の如きなり、此人若き頃巴里に留學したることあり、實際一の日本人と同宿し居たりといふと雖も、既に其名を忘失して、松田か中江かと問うて見ても、何とも思ひ出さずといふ、孰れ松田氏等の時代なりしなるべし

晩は長幼に依り九時半十時十一時等漸々に寝る

母は家政を治むるの外、賄ひ向き其他に働き、夜も遅くまで続ひ縫ひやら何やかやの仕事して居る、長女二女またこれにならひ各相應の仕事をする、下女なきこと數週間、長女と母と其代理をなし、料理人なきこと亦數日、母と長女と其代理をなし、長男



重症數週間、二女と母と専ら看護し、長女また慰撫を怠らざりき、母はミスセス何某として相應の學識經驗あり、同等の交際社會に一地位を有す、長女はミス何某として現に高等學校の女學生たり、其交友もまた甚だ少からず、是等所謂ミスセスとミス、何處に出してもミスターよりも尊敬せらるゝ母と娘が、内に前垂をかけて働くは物かは、時々手籠提げて買物に出かくるを見る、所謂女の生意氣、女學生の生意氣なるもの、女權の微なる日本に於て、人往々これありと稱するに拘はらず、女權の盛んなる英國に於て、我れ却つて之を見ず、是れのみは予が意外の一なり、女子問題に關しては別に記するの日あるべきか、何にせよ當國女子の最も静淑温和なるには予れ驚きぬ

予は當國に於て女子の高笑ひせしを未だ聞かず、男子の高笑ひもまた未だ聞かず

### (八十) 倫敦 (續)

#### ▲英國人の家庭承前

#### 六、起居、作業及び娛樂(つゞき)

家族一同能く働くこと前述の如し、而して彼等は如何なる娛樂を持つか、新聞を讀むは必要の傍ら亦娛樂の一なり、此家にては嘗てスタンダートを讀みし

も婦人仲間の動議に依りて近來デーリリーテレグラフに改め、其他は時々小買ひをす、外に雜誌四五種あり、婦女子の有なり、斯くて新聞は人々之を讀むの外、眼病の祖母に對しては、母娘等かはりつゝに讀み聞かず、故に此家にて時事に通ずるは祖母蓋し隨一なり

庭園の草花また娛樂の一なり、小供は別に人形を持ち、鳩を持ち、チェス、ドラフツ、ハルマ、其他の遊戯具を持ち、乃至鐵道の摸形を持ちて之を庭園に布設し、汽車を走らせて以て遊ぶ、土曜日の夜など稀れに音樂をやることあり、母ピアノを彈じ、長女歌ふ

或る時は家族の過半揃ひて馬車を郊外に驅り、半日綠樹青草の快を食ふことあり、但し儉素を専らとして車賃の外に一錢を費さず、茶店の椅子に倚るかはりに樹下草上に座して憩ふ

或る時は有名の見世物にゆき、一夜珍景奇觀の興を取ることあり、木戸錢の外に一錢を捨てず

飲食は前記の如く、日本人の眼には寧ろ贅澤なるが如きものあり、而かも決して贅澤に非ず、体を養ふの必要のみなり、其他金錢を浪費せざるは亦當國民の一特色なり、蓋し生活の度高ければ無論金を要すること多く、金を要すること多ければ之を

愛すること亦切ならざるを得ず、茲に貯金の風習は起る、他の一方に於ても結婚以後、獨立自活の風習は茲に貯金の必要を生ず、茲に於てか老若男女各自に金を貯ふるの念、愈々切ならざるを得ず、益々強からざるを得ず、所謂一錢を貯ふるは即ち一錢を儲けたるなりとの諺、最も事實に適切なるを見る

最も娛樂するの時は日曜日なり、日曜日には何をするか、寺院に參る、朝、晝、夜、三度の勤行に對し、朝、ゆくあり、晚、ゆくあり、晝、ゆくあり、二度ゆくものあり、三度ゆくものあり、一度ゆかざるものはあし、老病の祖母は格別ながら猶且つ時々テエヤ(人の挽く椅子車にて極めて安樂遲鈍のもの、老人病人等之に乗る)に乗りてゆく

寺にゆきては神を禱り神を讚美し、女王以下皇族の壽、乃至國家の幸福、時代の平和を祈る

是れが信心なり、最上の娛樂なり、或は寺より公園郊外にゆくものあり、此家の人は寺の外何處へもゆかず、家に歸りては小供に聖書を教へたり、何かなぐさみの本讀みたり、談話したり、座眠したりして長閑に暮らし、一切仕事といふものをせず、倫敦人の多數は此通りなり

(八一) 倫敦 (續)

▲英國人の家庭(承前)

七、交際

此家汎交なし(英人由來汎交の民に非ず)常に相來往するは親戚親友のみなり、母或は長女時々出で、人を訪ふ、來客は通例茶時に在り、當地の訪問時間は通例三時乃至四時にて恰も茶時に當る、家族と茶を共にし、暫時談話して去る、女客多く男客少く、殆んど三と一との割合なり

夜會舞踏會等に列することなし

主人の兄弟は某地に僧職たるものあり、主人の伯父に八十餘歳の某將軍あり

八、家庭の禮儀道德

家庭は和樂圓滿なり、而して其和を節するに禮を以てすること、その空文は東洋に在りて、其事實は西洋に在り、全家祖母を敬愛すること深く、祖母また兒孫を敬愛すること深し、單に愛せず、合はせて敬す、故に親子の權限を侵さず、子固より親の權に背かず、日本にては權利義務などいへば、早速に之を訴訟沙汰に聯想し、軋轢火を出すもの、如くに思惟するものあり、萬事理窟ッばき頭惱にては然かく感ずるも無理ならざるべし、然れども泰西の事實は之に異なり、此機關を運用するに敬愛の油を以てす、故に圓々滑々なり、而して習ひ性となりては民其然る所以を知らず、然る

所以を考へず、所謂無爲にして化するの概あり。子は固より親に孝なり、親は同時に子に孝あり、親権は強し、然れども限りあり、親の愛は深し、而して限りなし、限りなきの愛を以て限りあるの權を行ふ、何處に不平の起るべきものあらんや、何處に不孝の子の生ずるを得んや、人々分あり責任あり、苟くも他に對して分外の恩恵を求むるをなさず、自ら責任を欠かんを憂ふ、自ら分を失はんを憂ふ、人々斯くの如くんば、何處に家内の不和合あらんや、朝起るや、子は親に禮し、親は子に禮す、親子は接吻す、出づるや、禮す、入るや、禮す、嫁と姑また斯くの如し、夜寝んとするや、相禮して別る、姑は一切命令を發せず、一切干渉せず、父母は兒女に命令すれば、兒女之を奉ずること神命の如し、敢て不當の命令を發せざればなり、之を要するに此家庭の禮儀道德は殆んど間然する所なし、而して其原因は如何と問ふに、宗教の力必ずやあらん、教育の力必ずやあらん、獨り子は之を以て主として家庭の組織、習慣の宜しきを得たるに歸せんとす、接吻の事、親子の之をなすは所々の家庭にて之を見たり、未だ夫婦の之をなすを見當らず。

(八十二) 倫敦 (續)

▲英國人の家庭(承前)

九、家政

一家財政の事に就ては予未だ之を詳言する能はず、只其推算する所に依れば、月約四百圓位の活計なるが如し、家政の執行者は母にして、母は會計出納より、兒女の教育、乃至交際の事務を司どり、父は職業に従事するの傍ら、其全体を補助監督し、兒女は父母の命に依りて各自の任務に従ひ、且つ家政を補助す、之を日本の官制に比していへば、母は内務、大藏、文部兼外務大臣にして、父は農商務兼内閣總理大臣たり、兒女各省の試補屬等となりて、茲に一家の内閣は組織せらる、母の權力は頗る強大なりと雖も、我邦の所謂嗚且那に比しては其趣き頗る異なり、乃至表面のみ亭主を家長に立て、内實之を左右するの寧ろ陰險なる才女に比しては更に趣きを異にせり、斯の如くにして家政善く整ひ、男女長幼各其地位を楽しみ、各其生活を楽しみ、各其禮儀道德を楽しみ、敢て支那の古人の堪忍をなすを要せず、無論壁に向つて泣くも

のを出さず、夫婦兄弟父子姉妹悉く琴瑟和樂するを得、畢竟するに權利義務の分限をば、敬愛を以て之を行ふの結果に外ならざらんか  
英國中民の家庭の一例略ぼ前述の如し、若夫れ上民と下民とに至りて各専門的の探検を要するものあり、予は只其幾分を聞知せしのみ、未だ全部を驗知せざる所なり  
予ぐだくしく家庭を記す、敢て直に我同胞をして之を學ばしめんと欲するに非ず、以て他山の一石となさんとするのみ、諸君若し是に依りて、諸君が友として之に交はり、乃至客民として之を統御する所の、歐洲人の家庭の一般は斯くの如きかといふことを諒せられれば幸甚

(八十三) 倫敦 (續)

七月三十日 日晴、七十二度

高橋光威氏外數友來る、輕氣球乗リスベンサー外一人昨日水晶宮より佛陸に渡り此日歸る

七月三十一日 月晴、七十四度

三井にて遞信技師玉木、梶浦の兩氏に逢ふ

午後金澤氏來り訪ふ、共にグレートブリテンエキシビションに至る

▲グレートブリテンエキシビション 世界に於ける英國の全領地を包含したる大見世物にして、毎年冬季數ヶ月を除き毎日開く、倫敦隨一の大呼物なり

大門一人一志、中は廣大の仕掛にして、淺草千日前乃至新京極をゴタマゼにして其れに商品陳列場、勸工場を加へたるが如きものなり、右もイラツシヤイ、左もイラツシヤイ、獅子が踊れば虎が歌ふ、手藝、足藝、天窓、馬角、蛇足の見世物は三片より三志まで、別嬪の番頭、何ぞ御用は、コレ御覽なさいませ、コンナに珍らしいもので價はタツタワン、パウンドおど、男客女賓に強いて付ける、品は世界の各國を兼ねて、半片三個の木樺寸より一粒萬金のダイヤモンドに至る

手相見もあり人相見もあり、即席肖像かき、道化寫真、新奇發明種々雜多  
大車輪あり、高さ二百餘呎、汽力を以て徐ろに廻轉す、其轍にうひて無數の箱あり、之に盛られて空中に昇り世間を眺むるものもあり、壁を畫いて山となしては、山に高低鐵道の自動車あり、水を導きて油となしては、池に遊船の逆落しあり、佳人試みに之に乗つて膽を冷やし、一張羅を露す

仕掛の最大なるはエムプレスシエトルの南亞米利加蠻人にして、蠻人四百を捕へ來りて、其起居生活、作業、飲食、戰鬥、狩獵、遊戲百端の現狀を演出せしむ

當キキシビション土曜日の夜などは四萬以上の觀客あり、一人三圓として十二萬圓、一圓としても四萬圓の費消金額なり、之に物品購買の金を合はせば更に驚くべき巨額となるべし

▲倫敦の物價及び勞銀 其概略

○借家賃 市部五千七百五十戸の惣額一昨々年四千四百八十一萬千六百圓 此一戸平均 七千八百十圓餘(一ヶ年)

而して其最高の場所は一呎平方二百圓より七百圓に至る

郡部概算八十萬戸の惣額一昨年三億六千百十餘萬千九百圓 此一戸平均四百五十一圓餘(一ヶ年)

市部は格別とし、郡部平均額の割合に低きは必ずしも家屋の小なるに非ず、金利のやすきと火災の憂きと修繕費を要することの稀なると、家屋保存期の長き等の爲めなり

○人夫 一日一圓、一圓五十錢、二圓

○番頭丁稚 手飯無給、一週間五志七志の手當より、白鼠株年俸三千圓四千圓五千圓一萬圓乃至其以上

○下女 賄附年百五十圓乃至二百五十圓、乳母料理人は五割或は其以上高し

○パン 二斤半位の束十錢より

○鶏卵 一ツ四錢、五十錢に付き十二より廿まで

○マツチ 日本同様の木マツチ三箱二錢

○理髮 髮摘十二錢、髯六錢を普通とし、其以上も以下も少し

○風呂 普通五十錢、土耳其浴一圓、水浴二十四錢

○日用雜貨 日本の所謂舶來店にて賣つて居る品物に比し概して數割數倍高し、品が違ふ故なり

○金錢の相場 は日本の四錢が此處の一錢に當る心持なり、然るに生活費が往々十倍以上にも當るは物價の高き故のみに非ず、生活の度が高き故なり、當地中民の生活は日本の上等社會に越え、當地極貧民の食物粗末ながらパンと肉なり、は寧ろ日本田舎の大地主(米と魚が最上のみに優ることあり)

(八十四) 倫敦 (續)

八月一日 晴七十五度

自由黨本部、監獄署、其他數ヶ所數方角に奔走し、終日外に勞働す  
▲リフト、オートム俱樂部、自由黨本部、附各政治俱樂部、リフト、オートム俱樂部即ち

英國自由黨本部より此日午前十一時半に來れとの報あり、乃ちゆく、俱樂部は有名なるベルメルに在り、ベルメルは俱樂部町にして、政治社交の俱樂部團體此處に在るもの多く、政治家紳士の集合所なり

本俱樂部は其第四番戸にして、外面例の岩石然たる大厦、戶外に例の制服の立番あり、入れば玄関の左に郵便電信局あり、右に受付給仕部屋あり、例の燕尾服の給仕所々に奔走して居る、書記の案内にて進みゆくに、第一はホールにして、グラッドストーン、ブライト、ゴブデン、其他諸名士の大理石像あり、階を登れば肖像室あり、此處には小形の肖像額數十百を掲ぐ、委員室あり、喫煙室あり、面會室、會議場、茶室、食堂、無論悉く完備し、而して其結構の壯大美麗なる、建築費のみにも無論數百萬金を要したるべく、兎に角日本の政黨に於ては何年何十年の後斯る俱樂部を有するを得る様になるかと思へば、羨ましくも腹立たし

前記三傑其他諸名士の大壁畫は階上所々に在り、圖書館あり、藏書萬卷、階下のホールには電報揭示場あり、世界各地よりの新着電報直にタイプライターに付して之を揭示す、一切の設備誠に斯くありてこそ、大政黨の本部なれど、徐るに感心感服して、政黨狀況の概略ども聞き謝して歸る

本俱樂部の會員は僅に千四百人なり、黨員は無論此外に在りて全国各地に充滿し

あり、本部の會員は即ち單に本部の會員たるのみならず、序でに在倫敦政治俱樂部の名目會員數等を左に

自由黨

ブルックス俱樂部即ちホキッヅ俱樂部

市自由俱樂部

テボンシヤイア俱樂部

國民自由俱樂部

セントジエームス俱樂部(外交俱樂部)

保守黨

カールトン俱樂部(保守黨本部、ベルメル九四番) 會員千八百人

市カールトン俱樂部

保守俱樂部

憲政俱樂部

青年カールトン俱樂部

青年保守俱樂部

青年憲政俱樂部

會員千五百人

會員五千四百人

六百五十人

會員千八百人

千三百人

六千五百人

三千百人

五千五百人

五千五百人

國民保守俱樂部

セントステフェニス俱樂部

ブリムローズ俱樂部

五千人

右自由黨本部を合せ十六俱樂部の内四俱樂部は共にベルメルに在り、其他は概ね近街に在り、此邊國會議事堂に近く、ハイドパーク其他の公園に挟まれ、ベルメル風ビカデイリー風ウエストエンド風など、稱して紳士風俗の源泉たる所たり、而して這個俱樂部に出入するは悉く貴族富豪なり、いふまでもなく當國政治家と富豪は相離れざるものたり、某は政治家なりといふときは同時に富人を意味するなり、且つ同時に學識を意味す、金と學識と政治の才との三者今の日本にては相離るゝを常とし、當國にては相合するを常とす

### (八十五) 倫敦 (續)

▲セントジョージ監獄 看守長一人鄭重に案内して沿ねく各部を視察せしむ  
本監獄は倫敦最大獄の一にて、二年以下の輕罪男囚を容る

大体の規模

都内北區に在り、廣大なる建築にして、石壁高く、鐵門厚し、門は勿論不斷に鎖して、内

と外とに門番あり、外來者は外の門番問訊の上、内の門番に合圖して開門せしむ、表門を入り事務所を経、更に數ヶの大小門戸を通れば、(無論一々に錠鎖す)檻房あり、其外方に遊歩場、其四方に各種苦役場、寫真場、病院、其他種々の建物あり、之を要するに大体の構造は或る重要ならざる部分を除き、悉く石と鐵とより成れり  
現在囚徒千二百人に付看守百人、家の構造設備より囚徒待遇懲戒の諸事、概して新式を採れりといふ、予は勿論素人なれば此監獄が世界の第何級に屬するかを知らず、故に批評の權利なし、只見聞の事實を記するのみ

檻房

大体の構造はラヂイモーターングプリンシプル即ち光線發射式ともいふべき方法にして、旭光線の如く車輪の如く各檻房建物的一端は一所に集合す、故に其中心點に立てば各檻房を一目に見渡すを得、監督上頗る便利なり、  
建物は地上三層樓にして、地下層は有るも無きもあり、各建物の空隙は通路にして、黒きセメントタキを毎日洗ひ拭ふことなれば頗る清潔なり、其上は硝子屋根なり、斯くて建物の列は之をABC順に分ち、各列數百の檻房は之をAの第何號Bの何番と稱す  
さて房内に這入つて見るに、數房に這入つて其臥床等を實驗し見たり、廣さは四疊

敷に少し幅の廣さか位の長方形にして、四壁は煉瓦に上塗をかけ、天井は石、床は黒  
セメントにして、戸は鐵或は堅木を交へたるもあり、格子にあらず、前後の高處に窗  
あり、一方の窗は開閉自由なる代り、其外面に鐵柵あり、白木の卓に白木の腰掛、白木  
の組板然たる寐臺に、椰子毛入の布團、同じく枕、ブリツキの皿各種に洗面盥、木の食  
匙あり、聖書讀美歌、數學地理等の書籍あり、夜着るものは毛布夏は一枚冬は三枚、冬  
は暖爐の無き代りに床下に通せるユタンボあり、壁には獄則摘要の摺物が貼つて  
ある

櫛、ブラシ、石鹼もあり

ホテルの様に呼鈴あり、之を捻れば鳴ると共に外なる番號札がニヨキと立ち、看守  
の直に之を認むるに便す、實に囚徒はお客人、看守は宿屋のウエーターなりけり

(八十六) 倫敦 (續)

▲ベントン、ビル監獄(承前)

囚徒の服装等

服は卵色粗羅紗の仕着せ、帽も同色羅紗の幅の狭き中折にして頗る意氣、一見した  
る所兵隊か何ぞの如し、若し囚徒の名なかりせば中々下品なものに非ず

服に青章三個あり、一は囚徒自身の番號、一は檻房の番號、一は善行狀を表す、此善行  
狀章の數積れば漸次面會を許し書信を許し、其他若干の自由を與ふ

帽に赤章あるは初犯囚なり

働くときは勿論、遊歩のときも、綱もなければ鎖もあらず、單に看守が附いて居るの  
み

其食物及び起居

食物は朝齋色パン半斤に粥、晝、晚同パンに牛或は羊豚肉、馬酪、一週間二回位晚に  
ソップを與ふ、パンは病囚の外悉く齋色なり

斯の如くにして凡そ囚徒は入檻の當初二週間は寢臺の布團を與へられず、板に臥  
す、朝食粥の代りに汁を給せらる

毎日六時間苦役し、一時間遊歩し、三十分間、寺參りし、其餘は室に在りて讀書、默座し、  
夜は一定の時刻に眠る、日曜日には炊事當番の外は苦役なし、只寺參りするのみ

苦役場及び苦役

苦役を大別して輕重の二種とす

重苦役は三十人にて大磨車(製粉用)を踏むことにて、是は本日暑いかちとて休業し  
あり、され程暑ければ休むかと問ふに、華氏六十八度以上の日には之を止めて他の



輕苦役を課すといふ  
而して裁判所の宣告に重苦役とありても、監獄醫官にて若し其体格に不相當と認  
むれば之を輕苦役に換ふとなり

輕苦役には郵便用の布の袋縫ひ方三日一袋木工、ブリツキ細工、椰子布團製造、柳枝  
の籠細工、印刷製本等あり、孰れも生産補給の目的に非ず、只懲戒の爲めのみなるを  
以て、諸器械等悉く舊式乃至最舊式、仕事頗る緩漫なり  
料理、パン焼亦囚徒の苦役とす、各數十人々に從事せり  
囚徒には一週間六志乃至十志の手當を給す

浴室其他

浴室には浴槽三十餘あり、無論各別室あり、毎囚、毎二週間に一浴す  
寫真場其他種々の附屬物完備せり

(八十七) 倫敦 (續)

▲ペン、トン、ビル、監獄(承前)

病院及び狂室

病院は重症、輕症、全快後期等數區に分たれ、寢臺も食物も世間同様のものなり、殊に

上花數多生けてあるを見る

重症は別室、輕症は雜居、全快後期はまた別室なり

發狂其他亂暴人を幽する室數個あり、如何に狂ひても怪我せぬ様に、四壁、床の全部  
帆布或はゴムの布團より成る、相撲柔術に持つて來いなり

禮拜堂

新教禮拜堂は八百人を容る、日曜の外は毎朝三十分間、日曜日には更に多し  
羅馬加特力教禮拜堂二百人を容る、毎週二回

同監獄の概況は右の如し、別にホローウエイ監獄(違警罪及び未決男女檻)の紹介を  
持ちしも時間なきを以て此日はゆかず

▲ウ、エスト、ミン、スター、ア、ベイ、國會議事堂の正面に在り、歴代帝王、歴代相國、詩  
人文豪等の墳墓、堂内に在り、デキツケンヌもグラッドストーンも、誰もかもあるは  
論なく、大朝敵のクロムウエルもいと恭々しく葬られてあり、後醍醐天皇も足利尊  
氏も一穴に葬りて怪しみます、當國人の腹中は亦格別のものなり

本堂の縁起は頗る古く、丁抹人破壊の後再建せられたるは紀元九百八十五年に在  
り、今の建物は十三世紀の後半、ヘンリー三世及び其子エドワード一世に依りて大  
成せられたるものなりといふ

## (八十八) 倫敦 (續)

▲カ、ル、ベ、ー、シ、ョ、ン、ア、ー、ミ、ー、エ、キ、シ、ビ、ョ、ン(救世軍博覽會) 所謂救世軍の博覽會にして、一の奇なる見世物なり、蓋し其の目的は金を儲くるの外、救世軍なるもの狀況組織を普ねく公衆に知らしむるに在り

先づ一志を拂ひて大門を通れば中には種々の入口あり、建物は粗末ながら廣大の木造硝子屋根にして、すべての部局悉く其屋内に在り

すべて軍員老若男女が營む所の各種の工場、商店あり、工場にては構寸、紙箱、狀袋、靴、印刷製本、織物、裁縫、樂器、自轉車、ペン、刷毛、杖、傘、指輪の製造等、技能々々に随つてあり、とあらゆる工業をなし、乃至家畜を飼養する所あり、悉く其現場を縦覽せしめ、説明をなし、商店にては右製造せる所の各種の物品を販賣す、店員工人は男女老幼跛足、瞎目混淆にして、同軍の制服を着せるあり、好んで異装をなせるあり、滑稽の空氣場に充てり

見世物には音樂あり、猿藝あり、印度、亞刺比亞、支那、露西亞蠻民住居の狀況あり、凡そ救世軍が侵襲し得たる世界各地の狀況と、なるべく其土人までを蒐集して、其狀況を示し、乃至其土地々々の産物を製造して之を觀客に賣らしむるなり

中に日章旗掲げたる小舎あり、近づき見れば日本部なり、一洋女あり粗末なる木綿緋の日本單衣を着し、赤き髪に緋のたてものを結び付け、友染澤井の帯に緋金巾のシゴキをめぐり、日本足袋に堂島の表付穿いたるがあり、今日は「とてお辭儀して來る、可笑しいけれど暫時相手になりて其談を聞くに、此嬢今より四年前に三ヶ年間岡山にありしといふ、道理で言葉も可なりに出來、着物の着付も餘程宜しく、殊に下駄さへ穿いて歩くこと中々にうまし

此小舎はジャバンテイーハウスとありて、紙張屋根に、朝日に鶴、其他の草花を齧きたる襖をたて、まはし、中には花菟布きて屏風の外に汚き座布團五六枚ならべてあり、表には田舎芝居的、板の鳥居に金針的、日本文字「救世軍」の額をかけ、其内に錢、饅頭、笠、編笠、さてはふじくら草履、ピツタリ下駄、紙製玩具品なんぞすべて下さらぬものゝみを臚列し、其四周には大小無數の鯉轍をかけてあり、此軍中に日本人なし、是等諸品は嬢が齎らせし見本、乃至其差圖に依りてすべて異人達が模造したるものなりといふ、さりとては器用のことどもなり

お茶一杯とすゝめられたれど又こそと辭して他にゆく、さて徘徊するに、樓上樓下千狀萬態、數多の女子が臚列して衣縫ふて居る傍には紙傘さして歌ふて居るあり、行列してゆく樂隊あれば、立つてカタパンかぶる男あり、

數多の寢床も見せてあれば食堂食器もさらしてあり、茶店もあれば便所もあり、立つあり、居るあり、行く、走る、笑ふ、踊る、歌ふ、泣く、酷言すれば狂態百出

其ゴッドに勤行するを見る、男女異装し、旗を持ちたる、自轉車に乗りたる、列をなし、歌ふて囃して奏樂してゆき、禮拜堂の前に圓陣を作りて廻はり、踊り、祈禱し、讚美し、説教し、禮拜し、堂に入りては更に益々狂歌亂舞するの狀態、すべて道化的、滑稽的にして、日本の天理教會は我未だ之を見ず、昔しの空也念佛に髣髴たり

嗚乎英國秩序の社會、儼として一の非禮を許さず、生存競争機關の密なる、牢として間隙の能く投すべきなし、乃ち不平家窮民を集めて、這個無禮講的、宗教社會を組織し、以て渴するものに飲し、以て飢うる者に食し、以て不平を狂樂に洩らさしむ、畢竟社會の反動たるを思へば、悚然として牀の毛いよだち、惻然として涙下りつ、長嘆大息して歸りぬ

八月二日

水晴、七十三度

閉居

### (八十九) 倫敦 (續)

八月三日

木晴、七十五度

▲心附けの事　人のはなしに聞いて居しまゝ、最初は巡査にシガーを與へ、シガト盡きては錢を與へつ、其れも最初は日本氣質にてきまりがわるければ氣の毒くと六片與ふれば喜んで取る、三片も喜んで取る、二片も喜んで取る、一片も喜んで取り、人の前でも何も構はず、サンキューといふて居る、其れより段々慣るゝに隨ひ土地の風俗を見聞するに、抑々巡査に金を與ふるは畢竟不案内の外國人の事に、都人は左様無暗に與へず、只特別に手數面倒をかけたる時に限り、幾分與ふるを紳士の風儀となすといふこと分り、二週間の後は予も全く與へざることゝはなりたり

郵便配達に道を問ひたるときは一二片を與ふるを可とす、是れ彼等を本分以外に煩はせばなり

商店の人が道を教ふることは頗ぶる懇切なり、依りて予は數多たびこれに金を與へしに決して取らず、是は亦感心に高尚なり、故に其際は入らぬ物でも一寸買うてやるべし

王宮其の他王室所屬の建設物にては特に巡査看守人等が謝儀を受くるを禁じおる所あり、只それ特に禁じあり、普通は受くるを默許しある様な譯なり  
裁判所の公判傍聴などによき席を得る爲め、先づ一志を戸番に與ふるは公然の習

例あり

諸役所、會社等の立關番には與ふるが都合よき所あり、與へざるがよき場合もあり、見物、視察等に就ては其案内者に與へ、部局々々の説明者に亦與ふることあり、額は最低二片より、其人物の地位と煩勞の多少に依り、六片、一志、或は二志を與へ、此人間には金は如何と思はるゝものにはシガレットでも買ふてやることあり、シガレットならば一本、一片を通例とすれば五十本入の小箱にても二圓あり、シガートは一本六片位以上ならざれば人には出されず、故に大概までは錢を與へて濟ますを得とす

ホテル下宿等の下女、ボーイには一志、或は二志、尙滞在期長ければ時々と與へ、何か別段の手續をかけたるときは別段に與ふ

整理屋、飲食店にては其階級に依り一志以下、六片、三片、二片、ロバ等種々あり、やる等の所にやらぬも都合よからず、一志の習慣の所に二志與へては蔭では田舎者と笑はるべきことなり

鐵道にて荷物等あり、ホルダーを煩はしたるときは六片、一志等、其勞の多寡に依りて與ふ

之を概すれば一志は當地心附けの單位なれども、其以下二片位まで割引するは專

ら時宜に隨ふべきことなり

總じては苟くも人を煩はしては必ず之を謝するを以て紳士の禮儀とせらる、されど紳士に道を問ひて金を與ふるなどは無禮なり、其他金錢を用ゐざる場合に於て、サンキエーの謝辭は銅貨の如く、サンキエーペリマチは銀貨の如し

心附けには正札がなき故知り難し、旅行者は先づ其郷に入つて、其風習を聞き繕ふべきことなり、大陸旅行案内などには其額を記したるものもあり、實際と合ふや否やを知らず

金は都會程効用あり、都會程入用あり、予の如きは郷國に於て、日常小遣錢を持たず、に家を出る程無頓着なりしが、當地邊は無論格別、老若男女、家居平生悉く其小遣錢を持つて居り、自分の年は假令忘るゝども金の勘定の分らぬものはなし、實は文明とは金の謂ひなり、萬事萬物悉く金、極言すれば一口の談話にも、結局多少の金がかかる、可愛い子に旅をさせよとやら、小生此處まで旅をして、どうやら金の難有味を知り初めたるやの心地仕つる、是れ何よりの學問なり

(九十) 倫敦 (續)

▲金貨と月賦賣り

倫敦の新聞に金貨の廣告多きは在郷の折より自に着きし

が當地に來りて猶注意し見るに、其廣告は毎日各新聞に澤山にして、其文言は「金貸します、二十磅以上千磅以下、秘密に、低利に、早速に、無保證、無抵當、タッタ證文一枚にて云々」といふを例とせり

さる程に予は之に就きて不審を懷き、如何なれば斯く寛大に金を貸して損失せざるを得るか、如何なれば斯く放任的に金を借りて、能く返へさる者なきを得るか、法治の方か、宗教の方か、教育の方か、何にしても其真相こそ知りたけれど、一念發起してはさしも置かれず、知れる都人に問うて見たるに、借らぬ故知らぬのか、知つても斯んなことは知らぬ風をするのか、知らぬといふこそ多かりけれ、就いては其廣告主に就いて問ふべきか、其れも乙なり、兎やせまし、角やせんと案じ煩らひ居ける折柄、或る世事通の老翁に逢ひ、幸ひに其事實を聞いては始めて安心致したり、即ち其事實に曰く、所謂金貸は高利貸なり、彼等は十の八九猶太人にして、甚しきは年六割の高利を貪るものあり、孰れも利子は前引にして、千圓ならば先づ六百圓を差引き、残る四百圓の代りに、週賦或は月賦にて千圓を拂はしむることなり、而して若し怠れば直に裁判に持出す的の仕掛にて、無論常人の敢てせざる所なり、若し夫れ通常正當の金貸に至りては、利子低廉に償却法寛大なる代りに、證人或は抵當を要す云々、さては英國の人民も、矢張聖人のみにはあらざりけり、太古の民にもあらざり

けり

次に各商店の正札乃至新聞廣告に特に現金と記したる多し、現金あれば掛賣ある筈斯る大都會に如何にして、掛賣は行はるゝかと段々注意詮索したるに、是は全く月賦賣りにて、其方法や便利安全、彼の高利貸の類に非ず、多くの都人は其恩澤に依り比較的容易に斯る快適高價の生活をあし得るの事實分明したり

さて其物品は何々かといふに、主として家財、ピアノ、自轉車等にして、價額は數百圓より數千圓數萬圓に至り、金利等を斟酌したる價額を以て賣買し、爾後週賦月賦等にて期限は數ヶ月より二年、三年、最も長きは十年に至り、買主は其拂ひ込みを怠りたるときには現品を引渡す責任を負ひ、(但し相當の割引割戻しあるべし)即ち抵當となし置くことなり、さてこそ今日結婚したる新夫婦も、明日其資力以上の新世帯を持つを得、其日暮らしの車夫馬丁も、家にピアノを藏するを得、無給見習の丁稚もよく自轉車に乗るを得るなれ

即ち新夫婦の貧しきものは其獨居の時の下宿料にて、あばら屋ながら平次が住宅一の家庭を創設するを得るなり

即ち丁稚番頭は其通勤殆んど悉く通勤と知るべし、往復の汽車賃馬車賃を以て自轉車を買へば、其拂込を終へたるときは、自轉車は全くコッパにて儲け出したること

なるなり

三〇六

(九十一) 倫敦 (續)

八月三日 木晴、七十五度

八月四日 金晴、七十三度

久しぶりに六月末より七月二日迄の新報接手、歡喜甚だし

八月五日 土晴、七十六度

早朝よりルーター電報社、市役所、市長職邸等にゆく

▲ルーターテレグラムの「ユニオン」 東市オールドジュリーに在り、小さき横丁

ながら、英蘭銀行と市役所の間にして重要な場所なり

家は間口も狭く奥行も深からず、行燈の如き小さき建物、這入れば受附、給仕番の体

裁等例に依つて例の如し

副支配人自ら予を案内す、先づ曰く家が此通り狭くて困ります、此家は百數十年前の建築で餘程古いので云々、其れより受電所、發電所、東南洋局、太西洋局、編輯局等に導き、一々其部局の長を紹介して、詳細に説明せしめ、猶諸器械を運轉せしむ、原稿は發受とも悉くタイプライターなるが無論新式にしてタイプライターは當地大流

行にして各製造者は其新式の發明改良を争ひ居れり、頗る瞬速輕便なり

同時に都内數十ヶ所に發電するの器械などあり、其家屋こそは狭少なれ、世界電報通信の中心たることゝて、組織設備は頗る整頓しあり

本局社員職工等僅に五六百人ばかり、中に婦人のタイプライター係り二三あり、各地通信者の員數は明細に知るを得ず、之を要するに、日本支那を除くの外、全世界の各都市町村に配置しあり、但し概ね其國の中央に代理店あり、其れより市町村に連絡したるを以て、さてこゝ實際通信員の數は本局にては知り難しとなり、日本と支那は事情の不便の爲め、重立ちたる都府の外、通信員を有せず云々

四階には小食堂、小寢室等あり、曰く本社は年中晝夜打通し故、斯く小ホテルの如く設備し居るなり云々

何さま全世界の出來事を此横丁の一小屋に集めて、最先に自ら之を知悉翫味し、其糟粕を全世界の新聞社、政府、政黨等に分與す、亦愉快なる職業と謂ふべし

▲ギルドホール(市の諸廳) 亦頗る廣大なる建築なり、最初の建設は千四百十一年より同三十九年にかゝりしが、有名なる千六百六十六年の大火の後、漸次數回に再建せられ、其最新の部分は千八百六十四年至七十年の建築なり  
大ホールは長さ百五十二呎、廣さ四十九呎半、高さ八十九呎あり、市長國會議員等の

選舉市民總會等に用ゐらる。

毎年十一月九日、有名なる市長就任披露の大晚餐會を此處に開く、客は國務大臣を始め約一千人にして、時の内閣總理大臣の例の有名なる演説あり、會の費用は市長及びセリツプスの分擔に屬すといふ。

市會議場あり美麗なり、舊市會議場は今裁判所たり、其他各事務室は論なく、書籍館藏書十一萬二千卷、博物館、美術館あり、皆見るに足る。是れが僅々五千七百戸の市の廳舎なり。

### (九十二) 倫敦 (續)

▲マンシオンハウス(市長職邸) 英蘭銀行と相對して三角形をなせる三層の大建築物あり、一は株式取引所にして、他はマンシオンハウス、即ち市長の職邸なり。此日市長の特諾を得て、其の職邸を見る、構造は例の外壁内美埃及ホールと稱する。舞踏會場は長さ九十呎、廣さ六十呎、彫像壁畫澤山あり、應接所數個、市長事務室其他種々あり、市の警察裁判所あり、市長は其裁判官なり、是は毎日二時間づゝ公開せらる。

凡そ官公の廳舎は集合的にして、例へば内務、外務、印度、殖民地の四省の如き全く

一屋内に在り、故に廣大なる建築をなすを得ると共に、事務交渉往復の便は更に大なり、事務は勿論十分の分課にして或は一入一課をなすあり、或は一課一室内に數人以上列席するも、喫煙は嚴禁なり、談話もせず、其行儀のよくて勉強するさま、予等には到底一日も我慢の出來べくは思はれず。

八月六日 日、雨、七十七度

八月七日 月、曇、七十五度

▲バンクホリデー 八月をクリスマスの後に都合四日が此ホリデーあり、今日は正に其日にして、銀行會社商店は固より、諸官公廳亦殆んど悉く休業し、例の日曜日が元日の如くなれば、此ホリデーは數入の如く、都民悉く浮かれて遊ぶ、さる程に近きは十哩二十哩の近郊より、遠きは百哩二百哩の田舎に至り、大々小々群をなして出かけるもの、其數を知らず、馬車と鐵道と河蒸汽と田舎の茶店は年中屈指の大當りなり、獨り子は此日外出せず、所謂怠惰者の節句働きをなしたり。

▲此頃の家庭 長男は病後の保養にとてデボンシャイヤの叔母の方にゆき滞在し、居る、長女もサルズベリーにゆきぬ、ハムプンシャイヤに住む主婦の妹、數日前其娘を連れて來り、之を預けて歸り去りぬ、近隣の何某氏は家を舉つて蘇國にゆきぬ、と申す如く、當國此頃の家庭は、人の出違ひ入り違ひ、訪問往復送迎出遊に忙はし

▲此頃の新聞紙 何處も夏日は新聞だねの飢饉時と見えて、帝國議會殘んの議事がせうことなしに掲げらるゝと、其他は競争運動會、ツランスパール、ドレーフス、平和會議等、一定の記事のみ、頁數も十二は十、十は八と減少し居れり  
去る土曜日夜、巴里近郊ジュビシー停車場に於て汽車の衝突あり、三車粉齧せられて死者十六人、傷者七十三人あり、工部卿は即夜に出張し、大統領は其家に役人を特派する等の騒ぎあり

## (九十三) 倫敦 (續)

八月八日 火晴

八月九日 水晴

八月十日 木晴

## ▲西倫敦病院

宿の細君の知己なる醫員あり、乃ち細君と共に見にゆく

同病院は蓋し倫敦大病院中の一にて、近年の建築に係り、一切新式の設備なり、廣大なる二階家にして、藥局、醫局、診察所、手術所、患者室、其他各部の區別は別段、我邦のと異なる所なし、治療に對する便否得失如何は予の眼には分らず  
只素人眼に最も著明の想違と感じたるは、患者室の完備快適と、看護婦の信切とに

在り、患者室は多くは大なる室にて、外科、内科、男室、女室、小兒室等に分たれ、一室の中に多きは二十人も臥床を整列したるあり、採光、通風、保温の設備完全なるは申すまでもなく、壁に家庭同様種々の畫額あり、床に數多の生花あり、小兒室には木馬、人形、撲造禽獸、其他各種の玩具あり、我邦多くの病院患者室が、滿目荒涼寂寞なるに比し、最も目立ちたる相違なり、我邦にては動もすれば病院を患者の監獄となす、當國にては病院を實に患者のホテルとなす、是れ經費の潤澤なると否とも原因すること勿論なりと雖も、一は考へが異なる故なり、一例を擧ぐれば生花の如き、病院職員も之に注意し、其所在地の風流家など、其生花を時々病院に陳列することゝなせば、事や頗る容易にして、其道の功德や大なるべきなり  
該病院は矢張慈善金にて建設せられ、維持せらるゝにて、其建築の礎石は某の王女とデボンシャイヤ卿など之を据ゑたり  
當國は慈善事業最盛の國にて、病院其他公共的營造物が其管理に屬するもの多かり

## (九十四) 倫敦 (續)

▲倫敦の巡査 〃は亦蓋し世界の一名物なり、孰れも六尺ゆたかの大男にして體



格は無論容貌さへに揃ひて見ゆるが、兜形の黒帽に奪る上品なる黒の制服を着し路上に立つて往來の車馬行人を整理指揮するものゝ外は、ノソリ〜と市中を歩いて居り、防禦の器具は短小のツランサムを有すれども上衣の下に隠し居る故見えず、手は左右とも無一物なり

其従容として迫らず、寛爾として笑ふの状は如何にも愛らしく、巡廻中に近所の下女と物語るもあれば、立番中は貧民乞兒と狎々しく談話して居る、其人民に親しさこと、塞の河原とやらの地蔵が小供に於けるが如し、されど一たび犯罪あるを知れば現に親しく談話し居る相手と雖も、寸毫之を假借せず、忽然閻魔となつて之を捕縛すること芝居の早變りに異ならず

路人金を與ふれば之を受く、一志も受け一片も受く、路人煙草を與ふれば之を受く、一本も受け十本も受く、サンキユ〜と謝して酒蛙々々たり、然れども之を與へざればとて、其相當の義務をなさざるに非ず、之を與ふればとて相當以上の保護をなすに非ず、彼れよりいへば是等の賄賂は全く餘計の取りとくにして、彼は貰ふても貰はいでも只其分を盡すのみ、寸毫法を狂ぐることなし、されば賄賂は無効の賄賂にして別段事に弊害なきあり、支那朝鮮土耳其等の賄賂と混同すべからざるなり、倫敦行政郡の巡査は其數約一萬四千にして内務省に屬す、他の各郡は地方に屬す

市の巡査は九百七十人にして市自治體に屬す

巡査の俸給は一週間十八志乃至二十五志にして、先づ薄給ながら、其勤績年數に依り二十磅乃至百磅以上までの退職年金あり、生涯巡査を以て終るも亦小民老後の計をなすに足る

▲分業、分課に就いて、當地の社會は特に最も整頓せることゝて公私各般の分業分課蓋し十分に行はれ居るが、其一例として一笑あり、些末の事ながら左に

予尙不案内なりし頃始めて理髮店に入り髪を摘めと命じたるに、彼は摘みて香水をふり是れで仕舞といふ、予は驚き何故鬘を剃らぬといひしに、鬘もですかとて剃り了りぬ、予の習慣は固より其れにて満足せず、髪を洗へと命じたるに、丁寧に洗ひは洗ひしが顔を殘せり、心持が悪ければ又別に命じて顔を洗ひ、更に命じて口を漱ぎしに、彼又香水を髪にふりたり、予は猶物足らず改めて髪にブラシユをかけさせたるが、若髪摘鬘剃髮洗顔洗等悉く各別の賃錢なりき、されば其後は始めから何々々々と一度に命じ置くに、其通りに順序よく執行すれば、一事を命ずれば其れだけしか執行せず、尙可笑しきは何れの理髮店にても鬘を剃らすれば鬘のみを剃りて、顔、額、眉等一切剃らず、是は西洋の風俗にてもあるか、成程多くの男子は其頬べたの接吻せざるべき所と願鬘のみ剃りて、其他顔面には猫毛をモヤ〜生やして居る、

但し猶探究の上確かむべきなり  
 其他馬車の車夫は車より下らず、轉宿の際など手荷物運ぶには近邊から人夫が付いて来て之をなす(但しホテルにはポルターあれども)下女は一定の掃除をなすのみ、料理人は料理をするのみ、と申すが如く、何でもかでも極つただけにて而も其極つた區域が甚だ狭少なる故、却つて面倒なる事多し

(九十五) 倫敦 (續)

八月八日以後、取調中の記事未だ完結せず、閉居從事中八月十七日に至り予は左の悲報に接したり

▲嗟呼此悲報 是れ固より純粹の私事なり、之を公に紙上に記するは頗る憚りありと雖も、予が倫敦着の廣告と家弟の死亡廣告とを併せ掲げたる長崎新報を讀みたる諸君は、予が胸中無量の涙の其一滴を本紙に漉ぎ、せめて無限の苦衷を慰するを特に寛容し玉ふべきか

八月十七日午後、七月三日以後八日までの長崎新報到る、急ぎ破封し例の通り先づ最近のものを披閱したるに、嗟呼々々這は何たる悲惨の事ぞ、電光の如くに予が眼を射、且つ心肝を貫ぬきたるは、井口潮七月七日死亡云々、井口丑二親戚中の廣告な

り、嗟々這は何たる悲惨事ぞ、三讀誤讀に非ざるを知り、三省夢に非ざるを知る、予が今萬里の孤客たるも事實なり、夢ならんを希ひても夢に非ず、而して實弟死去の廣告を見たるも事實なり、夢ならんを欲しても夢に非ず、嗟々這は何たる悲惨事ぞ、予は自ら進退に迷ふ

予は長男にして潮は次男なり、幼より苦學、且つ予を助けて父母に仕へぬ、予は兄長の義務として之を東京京都に送りぬ、彼は留學多年の後歸りて長崎に留まりぬ、出で、黒川氏を繼ぎぬ、更に東京に遊ぶこと數年、業漸く成りて未だ歸らず、不幸難治の病を得たり、斯くて昨年八月歸りて長崎の養家に在り、九月去つて故郷の實家に留まり、本年一月離別復籍しぬ

斯くて予が出發の際は猶は養病中なりしなり、予の深憂は實に是に存したりき、されど病は慢性なり、醫言に徴し實例に憑り、若し果して難治とするも、敢て數年の壽を望み難きに非ず、實に寸延ふれば尺とやら、斯くて姑息にも生存する間に學術の進歩は、凡そ世の難治不治の症を一掃するの時節到來せざるを期せず、とは病弟自身も之を信じ、予も僥倖せんとしたる所なりき、斯くて予は西遊を決しぬ、豈に今日の悲哀あるを期せんや  
 三月初旬、予は告別の爲めに歸省しぬ、當時潮は辭を離れてありき、蓋し東京より歸

養以來半歳間の趨勢は遅々ながら可良なりしなり、さて別るゝに臨み、囁して曰く阿兄若し巴里を訪は、ウオールドシエトルの舞臺だけなりとも見て來玉へど、其言猶ほ耳に在り、予未だ其囑を果さるに此事あり、嗟々是れ何たる薄運ぞや、予は其下旬に長崎を發せり、發の前日母の書到る、曰く、潮容体大に可、汝が來しとき、の比に非ず、十分安心して往いて來よ云々

斯くの如くにして予は發せり、半歳敢て長時間に非ず、二萬哩必ずしも長程に非ずと雖も、而も哀別離苦の人情、之を言は、豈に限りあらんや、而して特に心にかゝりしは、病弟の上にて、船中旅中夢幾夜、其全快したるを見、其快談健歩するを見、或る時は亦其死せるをも見たり、而して前者悉く虚夢にして、最後の「一夢正夢となりぬ」夢逆様の謬を怨めしき

潮壽三十一、文學を好みて著書蓋し若干あり、歸朝後整理すべきなり

予は今自ら進退に迷ふ、先づ謹んで假喪に服し、後徐ろに計をなすの外なし

### (九十六) 倫敦出發 巴里行

八月十七日實弟病死の報に接してより、旅中なるを以て取敢へず一週間の喪に服し、同二十四日自ら申明し以て前路の計をなす、蓋し服喪中猶ほ熟考の末、結局豫定

の任務を果し、豫定の路筋に依りて行き且の歸るの外なきに決せしなり、但し大陸は最初伯林まで行く心算なりしも、倫敦滞在中之を變更し、滯英一ヶ月の延期を以て之に代へたり、(英國滞在は二ヶ月の豫算を三ヶ月とせしなり)。

右服喪中の事なりき、一夜憂悶眠る能はず、起きて後園に出づれば、月三更、蟾顔正に圓かなり、さては陰曆は何月の満月かと入りて、筐底に探りて日本曆子を檢すれば、おはれ七月十五日、生別變じて死別となりける、我亡弟が初精靈とて、例の舟にて淨土に送らるゝ夜なりけり、家族親族の悲しみ如何なるべきか、我のみ斯くて心なくありけるこそ罪恐しけれとて、そゝる哀情の極まるまゝに

故郷の今宵は如何に旅人の

露けき袖に宿る月かけ

八月二十五日、日を算して直に前途に進まんとし、二十七日巴里にゆき、九月一日歸りて二日出發渡米するに決し、切符の購求、手荷物の整理、其他の準備をなし、乃至倫敦の知人は概して避暑旅行中なれば、其等には書面を以て、居合せの向には訪問して告別をなし、豫定の二十七日までに略ぼ其事を終へぬ

英國に關する記事の前に洩れたるも少からず、其他比較評論を要して事の性質上、旅行の最終に記すべきもの多々あり、其等はいづれ一括して後に詳載すべきを以

て、本日記の倫敦記事は一應茲に擲筆す

八月廿七日 日曜、晴、雨

▲巴里道中 倫敦より巴里に至るに、現今四個の線路あり左の如し

一、英フオーケストン佛ブローヌ線(最捷路)

英陸七十二哩 海二十八哩

佛陸百五十八哩 合計二百五十八哩

急行時間八時間 内、船、二時間

切符中等片道一磅十六志

二、英ドーバー佛キヤレト線

英陸七十八哩 海二十二哩

佛陸百八十五哩 合計二百八十五哩

急行時間八時間 内、船、二時間以内

切符同上二磅十九志八斤

三、英ニューヘーブン佛ドイツ線

英陸五十五哩 海六十四哩

佛陸百二十五哩 合計二百四十四哩

急行時間十時間 内、船、五時間

切符同上二磅五志七片

四、サウザンプトン佛ハーブル線(最長路)

英陸七十八哩 海百二十二哩

佛陸百四十二哩 合計三百四十哩

急行時間十三時四十五分 内、船、八時間

切符同上二磅四志十片

(九十七) 巴里行 (續)

▲巴里道中(承前) 右各線毎日、日夜二回づゝの急行車あり、略ぼ同時に兩端を發

す、但し急行車は通例二等までにて、夏季の夜行車に限り特に三等あり

四線中第一は最速を以て貴とく、第三は風景を以て顯はる、予は乃ち第三の往復切

符を買ひ此日(八月二十七日)午後八時五十分倫敦ピクトリヤ停車場を發す

此地方は前に一たび通りたることあり、且つ暗夜なれば見るものもなく、二時間に

してニューヘーブンに着し、汽車を下りて税關検査場を通り抜ければ、但し出國に

は検査なし、直に汽船が横付けしてあり、ドヤ〜と乗り込めば直に發す、發すれば

直に英蘭海峡、名にし負ふ艱險の海とて、風なければ浪頗る荒く打つて屢々甲板を越ゆ、流石西洋の海國男子、船暈して嘔吐するもの多く、中には何を喰つたのか、萌黄のへ下を吐けるものあり、歐羅巴人のへ下は違つたものなり、左様かと思へば佳人、才子の肩に縋りて猶腰を支へられ、よるめきながら碎くる浪を見に来るものあり、感心々々

着くまで荒れ通しにして午前三時過佛のドイツに着し、上陸すれば同じく税關の検査場を一つ挟んで、汽車が横付けして待つて居る、船車接續とはいへ便利などとなり

此處の税關は昔時程には嚴ならざれど、若し有税品を隠蔽して發見されるれば大變に付、成るべく持たぬに増すことなきなり、主として搜索するは煙草に燐寸にして、頃日倫敦の某は燐寸二箱を携へ居たるに、其一箱は道中不用のものとおつて課税せられたりと船にて聞きぬ、其税額は煙草量目一磅に付き、六志乃至十志、シガー同上約十三志なり

船車接續と税關の検査とは、兎に角手荷物に對して不便利なれば、英佛間の旅行者は、其手荷物を自身提げ得るだけに限るを可とし、若し止むを得ず其以上のものを運ぶときは、出發地の停車場にて登録預をなすべし、左すれば道中構ひなしにて税

關の検査は先地到着の上、之を受くるを得るなり

但し予の手荷物(手抱一個)は錠もわけずに通過せしめられたんぬ

### (九十八) 巴里行 (續)

#### ▲巴里道中(承前)

税關検査場の内に飲食店あり、正に用意して待つて居る、空腹なれば此邊は初旅船を上れば英語不通初試験の佛語は頗る險呑なり、旁々用心に如くはなければ急ぎ汽車に乗りて發車を待つ程に夜は全く明はなれたり、諸君三時過に夜は明け侍りぬ、耻かしながら予が歐羅巴の夜明を見たるは蓋し是れが始めてなり、予が起き様の遲きに非ず、夜の明け様が早きなり

ドイツは港水深きを以て其名あり、人口二萬二千七百七十、小奇麗な市街なり、汽車は評判の如く古風の粗末なる構造なり、頗る動搖して走る、市街を離るれば直に一哩以上の大隧道に入る、隧道を出づれば原野森林、所々小高き山脈あり、所謂ピクチュアレスクの風景、倫敦附近に比しては目覺めて見ゆ、予の同車室は悉く佛人、悉く眠つて仕舞ひぬ、予も睡たけれど觀望の惜しさに、睫を張つて辛抱して居る、牛馬羊の牧場多く、農家の中には土壁草屋殆んど我邦の田舎に似たるものあり、英國

の田舎とは稍々其趣を異にせり

一時間にしてルーウアン(人口十一萬三千二百)に着し五分間停車其れより有名な  
ルセイヌ河岸を溯りて進む河は曲れり鐵路は直なり故に螺旋の曲線と其中心な  
る直線の如く汽車は河水を縫ふて之を横断すること數多たびルーウアンより二  
時間にして豫定の通り午前七時十五分巴里市サンラゼールの停車場に着す  
さて馬車を驅つて程遠からざるルイデイエフオ町なるホテルブルガンデイ  
に投ず六層樓一百許の寢室あり特に其地位殆んど市の中心に在りて何處にゆく  
にも便利なり

(九十九) 巴里

八月二十八日 月晴

八月二十九日 火晴

八月三十日 水雨

八月三十一日 木晴

右四日間滞在して晝は概ね馬車を驅り夜は散歩し以て遠近及ぶだけの見物をな  
す

▲巴里の地勢地區等 巴里は北緯四十八度五十分東經二度二十一分に位置す

セイヌ河の上流にして河口を距ること約八十哩河は屈曲して市内を流れ以て要  
害を助け景致を添ふ

其面積は市内の三萬エーカーにして内一萬二千エーカーは建物を以て蔽はる

斯くて有名なる壘壁は市の要部を繞ること二十一哩高さ三十二呎厚さ四十八呎  
以て廓内廓外を界す

行政に付ては都内亦市部郡部の別あり郡部はセイヌ縣知事の管理にして市部は  
市參事會(コンセイユ)ミューニシパール之を管す市は亦之を分つて二十區となし  
各區に區長一人參事員二人あり區内の行政を掌る市の總豫算額三億法とは亦大  
したるものなり

地勢大体は平原なれども都外遙に山嶺の繞れるを見都内亦所々高地丘陵の窟起  
する所あり假令エツフェルの塔なしとするも巴里全都の大觀を賞するに難から  
ず而して都内樹木多く森林近く河水の碧にして波面玉樓金殿を映せるなんと誠  
に美麗壯快にして倫敦の無變化無觀望の地より來りては特に數層の快感を加ふ  
倫敦は無論世界の最大都會なり然れども徹頭徹尾平地にして輕氣球に駕するに  
非ざるよりは以て其大を觀るの術なし巴里は亦世界の都會なり而して都内或

は郊外より所謂鳥眼観を以て全都を一日に集め得るの地あり、兩都地勢上の差異は斯くの如し

▲巴里の人口 十三世紀の初めに於て既に二十萬あり、千六百七十五年路易十四世の治世に於て五十四萬に達し、千八百六十年には百五萬三千餘、千八百七十年に百八十二萬五千二百七十四、千八百九十一年二百四十四萬七千なりしが、昨千八百九十八年に於ては無慮二百五十三萬六千八百卅四(内十八萬一千餘外國人)に達せり、英國某學者の言に曰く佛國民畢生の大願は巴里の市民たるに在りと、實に佛國の人口は年々減少せんとするに拘はらず、巴里の人口は只増加するのみなり

(百) 巴里 (續)

▲市街、家屋、商店等 街衢は斜形圓形の個所もありと雖も、其大部は方形にして道幅廣く、特に家屋は六層樓、但概ね地下層なしの切つて揃へたるが如くに整列せざるを以て、其觀望の壯なること倫敦の比に非ず、倫敦は家概して低く、且つ家々媚びたる形狀をなして、一家一家に之を見るには美なりと雖も、長鎗の如き直道を見渡したる所の觀望は其壯んたる場所頗る少し、  
通行人は倫敦より遙に少く、且つ馬車も少しと雖も、往來指揮の巡査なき故、道を横

切ることは却て危険なり、且つ人も車馬も右よけにして倫敦とは勝手が違ふ故、猶町名標は最も緻密に掲げあり、故に精密なる新版の地圖を携へ、其れによりて歩めば間違ふことなく、容易に何町何番戸に到るを得べし

商店は商品陳列の狀粗末にして、其体裁遙に倫敦に劣れり、但女中呉服店のみは流石、絹織名産國のことゝて、美麗なるもの少らず、さて、斯様な織物もあるかと男子も立つて見る程なり

之を要するに市街家屋の建てかたは、倫敦は廣大堅固にして、巴里は廣大雄壯なり、其美麗の點に於ては銘々美人も好きく、にて容易に軒輊すべからずと雖も、予を以て之を見れば、倫敦の美は寧ろ陰にして籠り、巴里の美は陽にして開けたる、兩國民氣質の差、街頭輕微の事物にも亦明白に表現せるを覺ゆ、以下一通り見物の概略を掲げ、猶其他に及ぶべし

▲パレトスコーヤル 千六百十九年より同三十六年にわたりカーテイノリセリユーに依て建てられたるもの、古雅宏大の宮殿なり、但内部は縦覽を許さず

▲サンポール、エサンルイ 寺院なり、其美麗いふばかりなし

▲ブラリスド、コンコルド(凱旋馬場) 方形の廣馬場にして、一方は河に瀕し、左右遊園あり、中央有名なる方尖塔あり

方尖塔は埃及の總督モハメッドアリが、ルイフィリップに寄贈せし所にして、千八百三十一年埃及に於て之を授受せしより五年の後、同三十六年に及び巴里に移轉建立の功を終ふ、塔の高さ七十六呎、重量二百四十噸、技師ジエバの設計に依りて之を轉送再建せしものなりといふ

(百一) 巴里 (續)

▲シム、テイ、エール、モン、ト、マル、ト、ル (モン、ト、マル、ト、ルの墓所) 有名なる墓地にして、埋葬者の數二百萬人に上れりといふ、石龜墓標の宏大なる、目を驚かすもの多々なり

▲サン、シヤ、ベル、の、寺院 裁判所と同構内に在り、門に番兵あり出入を監す、さて其本堂の樓に登れば、誠に金銀珠玉を鑲めたる美觀にして、倫敦にても多く見ざりし所なり

▲ハ、ト、ル、ダ、ム、の、寺院 更に廣大美麗

▲リ、ユ、キ、ザ、ム、ブル、グ、の、美術、館 同名の公園内に在り、油畫及び大理石像の陳列所にして有名なるもの固より多く、特に男女の裸體像裸體畫無數なり、如是我聞、泰西の俗男子の陰具を畫くを咎めず、只其陰毛を付するを以て猥褻となすと、如何に

も男根は累々たれども孰れも毛なし、又女根は敢て之を掩はざれどもまた明々地には之を畫かず、以て日本の所謂猥褻畫と寸異を存す、彼京都博覽會の裸體美人の如きは當地にては何でもなきことなり

▲エ、ツ、フ、エ、ル、の、高、塔 (ト、ウ、ール、エ、ツ、フ、エ、ル) 名よりも高く、雲表に聳えて何處の隅からも見られざることなし

塔すべて鐵を以て組成す、さて大別して三層を畫し、三個のプラットフォームあり、第一層高さ地上より百九十呎、廣さ五千八百六十方碼、第二層高さ三百八十呎、廣さ三十二方碼、第三層高さ九百四呎、廣さ五十四方碼の涼亭を保つ、斯くて塔の總高さ九百八十四呎、都俗依つて呼んで三百米突塔といふ、塔の頂上より晴天に於て五十五哩の距離を見通すを得、勿論世界第一の高建築物にして他の有名なる建築物は殆んど其半分以下なり、即ち左の如し、

五百五十五呎 華盛頓塔

五百二十八呎 アルムカセドラルの塔

五百一十一呎 コローヌの塔

四百九十五呎 ルウアンの塔

四百四十九呎 大ピラミッド



四百四呎

聖保羅カセドラル(倫敦)

塔に登るに螺旋階と昇降器の兩道あり、各所定の料金を要す

塔は千八百八十七年七月より同八十九年五月に至る二年以内の短日月に於てジ  
エツフェル氏が建てたるものなり

▲敷物製造所 名を忘れたり、廣大なる建物の内に先づ古代敷物の陳列所あり  
奥に這入れば數多の工人其製造に従事して居る、其様高く廣き機械と申しても只  
上下に横木あるのみ、其横木に緯糸を掛くこと恰も我邦の田舎にて蓆を織るが  
如く、而して工人は其裏面に在り、緯糸を以て種々の畫樣を織り出し、時々小鏡に照  
して其正しきや否やを見る(工人の眼は畫の表面を見る能はざるが故に)其入念緻  
密ある、流石敷物一枚に五年七年を費し、價格數萬金に當るといふこと實に左もこ  
うと思はれたり、邦人由來手工を以て顯はる、斯の如きの藝術は之を學んで將來出  
藍の譽れを得るに至らんこと之を企て得べからざるか、但し巴里は世界美術の中  
心我邦人は先づ以て多數の畫學生徒を此地に派するを要すべきなり

(百二) 巴里 (續)

更よけかたにぞつくことあり

▲ペールセイエ 有名なる王室の別荘地にして、現今公園として其宮殿亦縱覽  
を許さる、二十九日馬車にてゆく、市より約十五哩西方の高地なり

途、ブローヌの森林を過ぐ、市より續ける園林數哩樹繁く氣清く、數條の大道其間  
に通ず、何となく我邦舊大諸侯の城下の入口の如き心地す、又ロスチャイルド家の  
所有林を過ぐ、さて湖を經、河を横ぎり、且つ普佛戰爭の因縁地を訪ひて、數時間の後  
到達すれば、先づ第一に目を驚かすは林泉の美觀なり、固よりすべて人工に成れど  
も、其美しきこと例ふるに物なし、林泉にうひて數棟の大宮殿あり、外面宏壯、内部華  
美、是は路易十四世の接客室、是は奈翁一世の寢室、是は女皇徐世賓の化粧の間、是は  
某王遺愛の卓子、是は某妃婚禮の衣裳など、珍品奇物指屈するに遑わらず  
オテルフランセイといふにて午餐し、更に數個の宮殿を見る、奈翁の馬車、露帝奉迎  
の馬車(近年の)などを主とし、其他畫善畫美の物々、到底旅中鉛筆の盡す所に非ざ  
るなり

路易十四世の宮殿には日本及び支那古代の陶器あり

奈翁一世の寢臺は頗る短く、試みに手をもてはかるに、手ならば足がつかゆる程な  
り、奈翁如何にも小男なりけん、其眞實の肖像といふを見る、眉目峻厲、意氣銳敏、如何  
にも人でも殺しさうなる顔付なり

ベルセイユは現今セイヌ、エ、オワス縣の首都にして人口五萬七千餘を有せり、馬車にてゆくは頗る不經濟なれども別に汽車あり廉價あり  
予は此日一日を此處に消し、晚景他路を取りて歸宿す、廣い巴里の内外に於て蓋し此地第一の見物場所なり

(百三) 巴里 (續)

▲巴里の馬車 キヤブは倫敦との同様のものもあれど輿馬車亦頗る多し、賃は一寸乗り一法半以上  
バス即ち乗合馬車は倫敦のより奇麗なり、且つ二階の上に屋根あるものあり、二頭立あり三頭立あり、其他電氣鐵道、輕便鐵道縱横に通せり  
▲公共便所 其數頗る多く、場所に依りては二十間位に一ヶ所あり、六角形の小さなものにて體裁可ならず  
▲新聞紙及び新聞賣子 最古の新聞はガゼット、ド、フランスにして千六百三十一年の創刊に係る、現今政治新聞百六十以上あり、其重立ちたるは

共和黨 ラベタイシヨルノイ(最流行紙)  
朝刊

ルマタン ラリブルパロル  
ランツランシジャン ルシヨルノイ  
ルシユドバリ(右二は寧ろ文學的)  
ルラントルヌ

保守黨 ルゴロフ ルソレ  
ロートリテ(ホナバート派) ルユーニベール ルモニトールユニベール  
セル フイガロ(販路廣し) ルシヨルノールオフフィセ

夕刊

共和黨 ルシヨルノールデデデバツ  
ルレン ルナチヨノル  
ラルブブリクフランセイス ルソワ ラリベルテ  
保守黨 ラガゼットドランス

等にして價は五珊より二十珊に至る但十珊が通例なり  
賣捌所は路上の六角堂にして、形は便所と同様なるが數は更に多し、中に老婆か少女座して各種の新聞雜誌を賣つて居る、是等事物の體裁は馬耳塞と同様にして、否  
な馬耳塞が巴里を學びたるにて、若し馬耳塞を見て巴里を見ざらん人は、馬耳塞の

大通りを横丁にして數十倍の大市街をなしたるもの即ち巴里と想像せば大過なからん

▲ホテル の大なるもの亦多く、概ね三百乃至六百の寢室を有す、其料金は室六乃至十法、燈光一法、給仕一法乃至一法半、朝食一法乃至二法半以上、午食五法、晚食六法を通例とす

▲葡萄酒は、ロハ 一二の最高等ホテルを除き、通例のホテル及び料理店にては葡萄酒料を食料に算入しあり故に呑んでも呑まいでも同様なり、但し下戸は之をラムチに代ふるを得べく且つ最初より反對の契約をなせば格別なり

(百四) 巴里 (續)

▲佛國の貨幣 所謂デシマルモスタリ式にして其計算は簡易なれども、通用貨幣の多種なる爲め旅人は特に注意するを要す

單位は即ち法(約我四十錢)にして其百分一を珊とし、以上九十九珊まで順に之を數ふ、別にソーと稱する舊名あり五珊に當る、巷間専ら呼用せらる

さて固有の貨幣は金貨百法、五十法、二十法、十法、五法、銀貨五、二、半法、及び五分一法、銅貨十珊、五珊、二珊、一珊、佛蘭西銀行の紙幣五千、千、五百、二百、百、五十法の各種あり

外に貨幣同盟國をる伊太利、白耳義、瑞西、及び希臘の金貨通用し、同上諸國中瑞西と伊太利の或る種類を除きたる銀貨亦通用し、其他銅貨は略ぼ同形同價の各國貨幣相混同して通用す、故に實際通用貨の複雑にして且つ屢々廢貨を混同するの事ある等頗る旅人を煩はすに足る、英貨は金銀紙とも略ぼ相當の價格にて多くの場合に授受せらる

▲博覽會場 來年の萬國大博覽會場はセヌの河岸に廣大なる長方形の地區を畫して方に建築の工事中に在り、柱を立てたる壁を築きたる、屋根を葺きたる、葺かざる、高さ、低き、圓き、角なる、大小の建物參差斷續、既に一大觀望の地を占す

▲巴里の風呂屋 河上に浮べるもの頗る多し

▲日本公使館 アベニユーマスヌーの七十五番、高尙の場所にて家も鐵柵の門あり可なりの結構なり、予は三十一日尋ねゆきしに、土人の玄關番と小使とのみあり、栗野公使は豫想の如く旅行中にて其他も概ね不在、何某といふ當直あり、午後二時に出廳すべしといふ、依つて折角の事なればと十二時頃より三時過ぎまで待ちしもその人來らず、予は此夕出發の豫定なりければ終に待ちおはせで空しく歸りぬ、斯くて巴里四日間に於ては全く日本人を見るを得ざりき、但し聞く、此地須磨某とて日本人のホテルを營業せるものありと、其住所名を詳かにせず

▲氣候 此頃は倫敦と大差なく、日中通例七十度臺なりき、風は倫敦よりも多く大道往々黄塵を揚ぐ、但し空氣は清澄あり

▲橋梁 セイヌに架するもの都合三十幅は道路に伴ひて廣げれども勾欄概して低き爲め觀望遙に倫敦のものに劣れり

(百五) 巴里 (續)

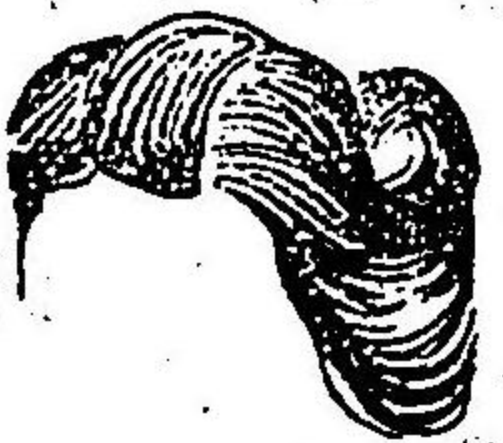
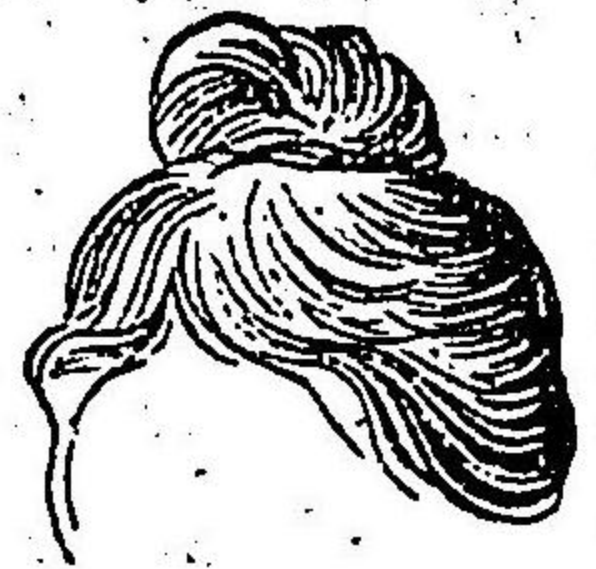
▲男女の風俗 予の滞在は四日三夜、如何に寢食を廢して勉強するとも其風俗の詳細を視察するの餘暇なかりしなり、乃至生活の裏面に立入るの機會なかりしなり、されば茲には其外形上、路上公園店頭ホテル料理屋珈琲店等にて目撃したるだけのことを記し、以て自ら満足せざるべからず

先づ第一に驚きたるは其服裝の質素、惡くいへば鄙びたることなり、巴里さうは世界驕奢の府、其家は金玉、其人は花の如くならんとは從來人の談話にも聞き、豫期豫想せし所なり、然るに來て見れば思ひきや、家は前述の通りなりと雖も、人に至つて絹は帽フロックコートなどは容易に見當らず、男子の大部否な殆んど全部背廣に丸帽、乃至麥藁帽にして特に女子などは、垢衣蔽帶帽を被らざるもの十の八九、其歩調さへに風采さへに徹頭徹尾田舎風ならんとは、男子の輕裝者多きは是れ外國の

見物客多きにも因るべしと雖も、大體に於て男女の人物體裁の華美ならず、氣が利かず、威儀禮容の倫敦に比して遙に劣れるは争ふべからず、御者の概ね絹帽を被れるは殊勝と、就いて見れば悉く是れ紙張子にして只形狀だけを似せたるなり、其他杖傘携帶品に至り、不規則亂雜粗末なる、英都と同日の談に非ず、或は廣告の張り様

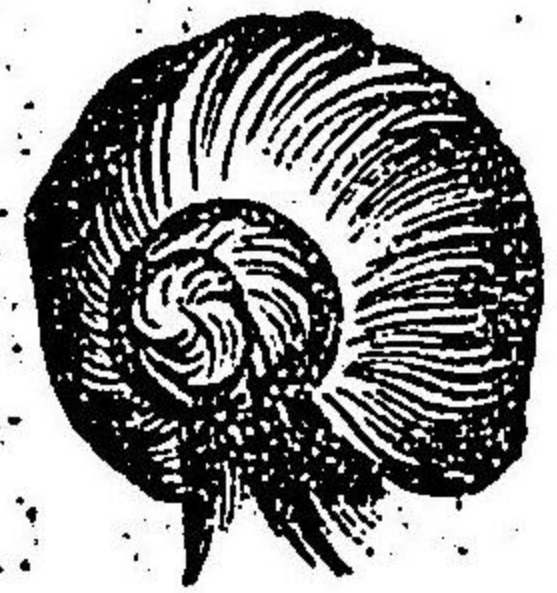
佛國風一

同上二



英國風一

同上二



にしても亂形亂行のベタハリ多く、其傍らには大文字にて張紙無用と書いてあるなど、倫敦に無き不體裁なり

但し言語應接に至りては、其都雅丁重なること流石に毫も倫敦に譲らず、之を概するに巴里人は意外に質朴にして且つ呑氣なるが、只其不規則亂雜の處に磊落の氣風存すと見えたり、乃至躁急の弊も伏すと見えたり

▲婦人の頭髮 頭髮の差は一見其英國婦人たり、佛國婦人たるを鑑別して誤らざるを得、尙少しく注意すれば單に歩調のみにて之を知ること容易なり

兩國とも上段の風が普通なり、佛國の二は時々之を見るもの、英國の二は書記番頭等室内にて帽を被らずに働くもの多く之を結ぶ、兩國大體の差は佛は束髪を前頭に高く揚げ、英は後頭に低く下ぐるに在り。

### (百六) 大西洋

九月一日 金晴

昨三十一日午後六時巴里を發し舊路に依りて此朝倫敦に着す、豫定は七時五十分なりしも、昨夜海峽風波の爲め、九時頃に延着したり、さて宿に歸りて朝食し、明日は愈々亞米利加行の日取りなれば、此日多少の殘務を果し、晚景より予が第一の下宿なりしオサギ夫人の方にゆき、倫敦にての舊友周防已氏、オサギ夫人、同嬢、及び近日日本より着して此家に宿れる、東京日々及び人民新聞の特派員今西恒太郎氏と晩餐し、餐後ドロッキングにて尙ほ杯を勧められ嬢の奏樂唱歌さへあり、酒も煙草も打くつろいだる歡待に、國を去つて以來始めて酔ひつ、盡きぬなごりを惜しみて歸る。

九月二日 土晴

英國より米國に航するには、リバープール、サウザンプトン、グラスゴウ、及び倫敦等

の内より二三日置に出船あり、其最も大なる汽船を有するは北獨逸ロイドの線路にして、次は亞米利加線、白星線等なり、さて貨銀は線路に依り、船に依り、時候に依り、室に依りて其差甚しく、上等百圓内外より以上、中等七八十圓以上、下等五十圓以上、某の線路の中等は某の會社の上等よりも高きことあり、夏季の下等は冬季の中等よりも高し、特に頃日は米國の旅行家が歸國の折柄とおつて、毎便各線人を以て充たされ、數便前より申込み置かざれば切符が手に入らぬといふ有機、隨つて價格も頗る騰貴して、上等の内の室に依りては五倍十倍に競り上げたるもありとなり、手が選びたるは亞利加線の中等にして、船は新約克號噸數一萬六百萬馬力二萬一千、速力二十節と號し、最初は巡洋艦なりしを改造せしなり、該線の汽船は毎週一回、カウザンプトンを發す。

却說此朝早起將に出發せんとすれば、主人初め宿の家族何角と注意手傳ひをなし、呉れ、六時過に朝食して、七時十七分近傍の停車場を發し、八時ウオトターロー停車場に至る、此處よりザウザンプトン行、右汽船會社の特別急行車發車するなり、宿の子息クルーコックス氏、此處まで見送り呉れらる、さて乗り込みて待つ程に周防氏朝寢の常例を破りて亦遙に來り見送らる、人々の芳志感謝の外なし。

(百七) 大西洋 (續)

九月二日(承前)

乗客満車、見送人はプラットフォームに満てり、八時半豫定の通り發車すれば、男女車窓に追ひ縋りて、半巾、帽傘をふり、さては聲をあげてさへ泣くあり、予が同室の客誰れに別るゝのか亦シク〜と泣いて居る、予は今歸朝の途に上るもの、若きたらん日の事思はれて嬉しくこそあれ、何を悲しむことあるべきに、送り送らるゝ人々の様見ては貰ひ泣きにぞ泣きたりける、やすき涙もあつたものなり、おはれ歐人の天下を家とし、東西萬里に横行するは、愛郷の念の薄きに非ず、哀別離苦の情の淡きに非ず、畢竟之を忍べるなり

汽車は例の通り平原を走りて、午前十時過サウザンプトンに着す、地倫敦を距ること七十餘哩なり、汽車の留まる所船待ちて居り、直に乗り込みて室など取りきわむる程に、正午解纜西に向ふ、埠頭送るもの更に多く、泣くこと更に甚だし

サウザンプトン港は圓形の港灣にして三面丘陵之を繞る、其風景可なりに美なりやがて港外に出づれば大西洋、さしたる風はなけれど浪小ならず、流石の大船漸次動搖し初む

巴里以來の睡眠不足に、寢室に入つて横になるや否や、夢はいつしか故山をめぐりて日の暮れ夜の明るるを知らず

九月三日 日晴

晴天ながら浪頗る高く、所々小間物屋の門店あり、予は巴里以來稿債山積せるまゝに、強めて筆を執るに筆躍りて字をなさず、詮方なさに物の本讀み、さては時々甲板に出で、眞甲かけて打つて來る浪を眺めて時間を消す

此日兩舷側に鐵網を張る、人の洩れ出でんことを恐るればなるべし

九月四日 月風雨

烈風雨よせば宜いのによるばひ〜食堂に來りて一口食ふて吐くものあり、異臭紛々の中に在りても、予はひも吐ければ食はねばならず、あるだけ食つてボーイを驚かし、あどの腹をなしには自ら頼まれぬ看護婦となつて船暈者の看護に従事す

是れ予の船中風波の時の常例なり

九月五日 火晴雨

浪愈々高く船益々動搖し、一浪去つて來る毎に車輪空を斬つて聲あり、所謂カメラとなるもの是れなり、但し速力は未だ大に減せず、昨正午より本日正午迄に、四百二十八哩を走れり

風浪はかゝるも船はすゝむなり

あどらんちのつくとに引かれず

(百八) 太西洋 (續)

九月六日 水晴

浪更に高く、速力減じて三百八十四哩となる

九月七日 木、風雨

船醫に就きて種痘証明を受く、但し米陸着の際此証明なければ、隔離所に抑留せらるべき旨船中所々に、英、佛、西、露、獨、伊の六國文にて揭示しあり、依つて其備をなしたるなり

船走四百三十七哩

九月八日 金晴

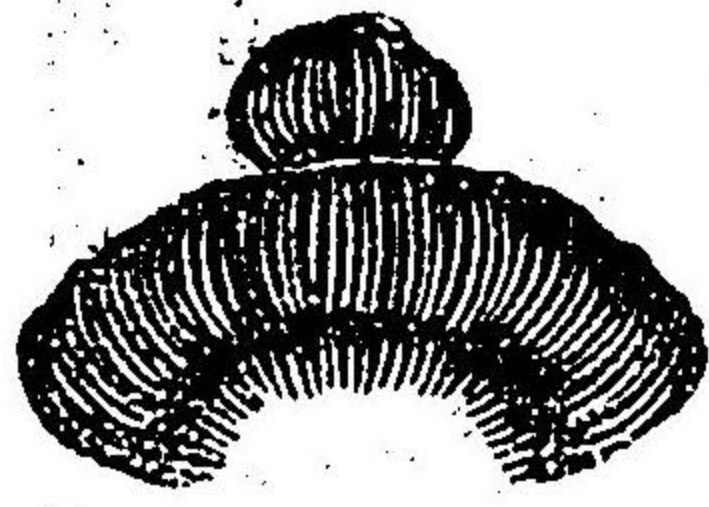
風浪稍減す、船走四百四十三哩

九月九日 土晴

始めて平穩、舷側の鐵網を撤す、午後五時遙に陸を見る、低し、八時新約克の港水なる、ホドソン河口に着し、十時河内に停船すれば、直に檢疫船と郵便船と来る

斯くて漸く新約克には着きけり、最初本船の獨出しは航海時間六晝夜半にて、金曜日(八日)の午後には到着すべしとのことなりしも、風波の爲めか一晝夜餘を延着して、土曜の夜とはなりにけり、さて今頃上陸しても迷惑なれば、今晚までは留まるに決す

サウザンプトンより此所まで三千一百十里、現今の船舶にては六晝夜を最速とし、運きは八九晝夜を費やす、現在の最大船は北獨逸ロイドのカイザー號にて噸數一萬五千、二萬餘噸のオセアニヤまた遠からず開航すべしといふ、斯くて世界の最大商船は常に此航路に在り、船には申分なしと雖も、浪の荒きは亦格別にて、由來世界第一の難海を以て名あり、併し予は敢ていふ、日本遠州灘の風波に耐え得るの人は、此洋を航するに餘力あらんと、且つ彼船暈病の如きも日を重ねれば治癒すと見え、て、風波は日々に増高したるに拘はらず、該患者は日々に減少したり



佛國風

▲佛國婦人の頭髮

前文英佛婦人の頭髮中佛國風の上段に

掲げたるはおもに西班牙婦人の結べるにて、佛國にては稀れに之を見るのみ、現今同國に専ら行はるゝは上圖の通りにして、一見筆ろ奇態なれども慣れては頗る風致あり、但し帽を被れば頂

上の束髪は其中に隠るゝなり、英人は必ず帽を被る、故に束髪は無造作なり、佛人は盛装の時は帽を被ふれども、平常にありては概ね帽を被らず、故に束髪に意匠を凝らすなり

(百九) 新約克

九月十日 日、晴

午前新約克に上陸してパークアベニュー第三十二及び第三十三なるパークアベニューホテルに投ず、屈指の大ホテルにして、地上八層寢室八百餘を有す、而して予の得たるは五階五百六十三號とは随分高い階級ながら猶其上に三層三百餘の客入あり、實に世の中は何處にゆきても下もありけり上もありけり、昇降は電気昇降器にして、其係り番及び玄關の給仕等は黑人(印甸)なり、何さぞ世界第一等のホテル地の第一流ホテルの事とて、其結構其便利快適申すも中々感かなり

兎角する程に午後となりければ、取敢へず電気鐵道にてブルックリン橋を見にゆき、夜は近街を散歩して後寝ぬ、予は此地に二泊の豫定なりしも、汽船延着の爲め一泊に減じ、明日午後の出發と定む、故に當地の見物は明日中にて満足せざるべからざるなり

九月十一日 月、大雨

朝來大雨、雨を侵して銀行、停車場其他にゆきて用務を果し、更に中央公園にゆき、午後三時歸宿す、出發は午後六時なり

▲ブルックリン橋 有名なる大橋梁はホドソンの東河を横切り、以て市とブルックリンとを連接す、如何にも宏大にして橋上の觀望は亦更に美なり、橋高さ水面

上三百五十呎、兩岸高く屋上に架す) ▲中央公園 當市唯一の公園にして面積一方哩三分の一、平地ながら樹木密生し、グラント將軍の墓其他見るべきもの多し、他に公園と稱するもの若干あれども、只名のみ

▲バンドービルドの住宅 世界一二の大金持の住宅、此地に在り、六層樓、頗る廣大堅固なり ▲パークロービルディング 世界第一の高層家屋にして二十九層、猶ほ其上に

五六層の高塔二個あり ▲港灣 無論河港にして船は殆んど悉く棧橋に着す



## (百十) 新約克 (續)

▲市街家屋人口等 新約克はホドソンの河流に添ひて建てられたる一大都市にして、面積三百五十九方哩七五(巴)里は四百、倫敦は六百八十八方哩、人口二百九十八萬五千餘

市街は古き一部分に個々一々の町名あるのみにて市の大部は之を方形に縦横に畫し、(南北)に十三の大道を通じて、最初の二個の半端道をアベニュー、アベニュー、アベニューとなし、其次より第一アベニュー、第二アベニューと數へて第十一に至り(予)の宿せるパークアベニューは第四アベニューの別名なり、横は第一より第六(十餘)かに至り、之を第幾街と稱す、斯くて某の家、某の店を呼ぶには例へば第五アベニュー第五十八街第何號、バンドービルトと稱するを以て、其町數を數へて歩めば可なるを以て、我が西京よりも分り易し、且つ路上瓦斯燈の玻璃に一々町名を記しあり、又中央公園に當る線路第五アベニュー邊を中心として街を東西に分ち、西第二十五街、東第三十六街と稱するの例あり、斯くすればアベニューの名を忘れても分ることなり

家屋は誠に不揃にして、右に十五層の高樓あるかと思へば左に二層の矮屋あり、大小高低出入不整にして、目前生存競争の頗る激烈なるを示すと共に、且つ觀望の美を損す、商店亦不整不同、其体裁未亂雜なる到底英佛の都會に比すべくも非ず、六體各アベニューは高尚且つ壯大なれども、若し一たびストリートに道入れば、貧民家居の状態の頗る不潔不快なるもの多きを見るべし

▲風俗(外形上の) 男子の服装は區々なれども、矢張り派手なる縞柄色物は之を見受ず、絹帽、フロックコートは頗る稀れなり、女子は夫體英國に同じく、只其英國女子の如くしとやかならざるを異なりとするのみ

ホテル等の内部を別とし、市中言語應對は頗る亂暴にして、倫敦巴里より突然に飛び込みては殆んど喫驚する程なり、特に下人は下人程横柄なるは蓋し平民國の平民國たる所以か

予は最初自分が日本人なるが故に、彼等が特に然るかと思ひてよく注意し居たるに、予ニ誰れかれの差別は無し、べらんめー言葉が彼等の常習なるを發見したり、又或主人の説を聞くに曰く、ゴイダウンサン、オプビッチを言はざるものは眞の亞米利加男子にあらずと

## (百十一) 新約克 (續)

▲サン、キ、ユ、ー、い、は、す、オ、ー、ラ、イ、と、い、ふ　　倫敦巴里にて上下共に常にいふなる  
 サンキユールメルシーの辭禮、此地にては一向に耳にせず、ボーイか巡査に金を與  
 ふるに黙つて居る故、是は少いのかと思ひ、今度は例外に奮發して與ふれば、尙サン  
 キユーといはずオーライといふ、汽車電氣車等にて婦人が傍に来て立て居る故、試  
 みに席を避けて遣はせば、尙サンキユーといはずクワイスライなぞいつて居る、如  
 何にも失敬なる者どもなり、兎に角英佛の辭儀禮讓と申すことは此國にては最早  
 多く行はれずと見えて、停車場其他群集の場所にて人を左右に押し分けて先を越  
 さんとするものさへ珍らしからず、歩行する様も亦激しくして、突き當られて御免  
 なさいをいはぬは物かは、自ら突當つて「何故避けぬか」と叱りも仕兼まじき權幕、新  
 聞紙等亦亂調にして、裏店の夫婦喧嘩も初號乃至は番外の大文字もて記し、人名を  
 記するに多くは呼び捨てにするといふ有様、タツタ三千哩の太平洋一ツ隔て、人  
 氣の違ふこと雲泥の如し、故に英佛の禮讓辭儀を窮窟なりと思ふ身には、此所の風  
 俗は自由にして快濶活潑なりと感ずるを得べく、彼の禮儀を相當とし乃至これに  
 慣れたるものは、米國人を無禮亂暴激烈の徒としも思ふべきなり  
 されど之を結局するに米人敢て亂暴なるに非ず、無論故らに無禮なるに非ず、只無  
 造作無頓着なるなり、而して是れ實に國体政治上社會上の組織及び其年齢乃至生

活上の状態より來れる必然の氣風なりとす、米國は無論新開國、平民國、平等國、其國  
 民は青年なり

▲交通機關　凡そ器械上の文明は此國遙に歐羅巴の上に在り、而して當市實に  
 米國文明の首府單に政治上を除き、なるを以て、人間生活上の器具機關一切整備上  
 達せるが中にも、交通機關は更に其著明なるものにて、全國各州に通せる大鐵道の  
 孰れも此地に集合せるは論なく、市内鐵道縱横に通じて、隣りにゆくにも歩むの要  
 なし、市内鐵道は所謂高架鐵道と地上鐵道の二種にて、高架鐵道は通例二階と三階  
 の間なる高さを重立ちたる路上に走り、地上鐵道之を補足して、隅より隅に達す、甲  
 は倫敦の地下鐵道の代りにして、乙は乗合馬車の代りなるが、其快適便捷は固より  
 同日の談に非ず、而して其料金は市中は遠近に拘はらず五米錢なり  
 辻馬車はあれども、多くは二頭立にして一頭立は稀れにあり、料金一頭立一哩五十  
 米仙一哩以上一哩に付き二十五米錢の定めなれども、實際は其れより高く、且つ手  
 荷物に依り別に要求する故一寸乗つても一二弗以上取らるゝことなり

## (百十二) 新約克 (續)

▲ホテル

は世界の第一等地と稱するだけあつて、流石に大酒店少からず就

中其最夫なるはウォルドルフアストツヤホテルにして、即ち現今世界最大のホテルなり、予は雨中ながら見にゆきしに十六層の大厦にして其數個の玄関口のいかめしきこと何人の宮殿かと怪しまるゝばかりなり、場所は第五アベニュー第三十三街にして予が宿の近隣なりしに、知らざればこそこの宿らでパークアベニューには投じたりけれ、但しウォルドルフは寢室千餘、予が宿は八百餘にして設備價格等矢張同等の大ホテルなり、特に予が宿には毎夜(夏季中)中庭にて樂隊の奏樂あり、是れ同ホテルの呼物なり

宿料は普通亞米利加プラン(食事付)三四弗以上、歐羅巴プラン(室のみ)二弗以上にして、中には一室數百金に價ひするものありといふ、されば人若し金が遣ひたくば一夜千金二千金、何の手間ひまも入らぬことなり、食事は一食七十五米錢以上を通例とす

▲米國の貨幣 是は世人の熟知する通り、單位は弗にして約我二圓に當り、弗を百分して錢となす(本記事我邦の錢及び墨西哥香港等の銀弗と混同せんことを避くるが爲めに、米弗米錢等と記すべし)

而して其貨幣の種類は銅一錢、二錢、白銅五錢、銀五錢、十錢、ダイムと稱す別に十二錢五厘をセントと稱す、名目あり(二十五錢、五十錢、一弗、金一弗、二弗、二弗半、五弗、十弗

二十弗、紙幣(大藏落省及び銀行)一弗、二弗、五弗、十弗、二十弗、五十弗、百弗、五百弗、千弗而して日常通用の小錢は五米錢(我十錢)が最小なるを以て、燐寸一の買つても矢張日本の十錢を拂はざるを得ず、英の片、佛の十珊(共に我四錢)を遣ひなれたる小巾着は其減ること正に二倍半の速度なり、故に米國の旅行は歐羅巴に比し、彼是平均二倍の費用を要すと思はる

▲煙草が意外 米國にゆきたら煙草がやすくて且つ所々自由喫煙の場所を得るならんとは、内實久しく樂しみ待ちし所なりしに、さて來て見れば意外千萬、煙草屋はあれども主にシガトにて價は倫敦巴里に比して左程やすからず、且つ停車場すら禁喫煙といふ有様に、是は全く失望に歸し了んぬ、何さま今數句間横濱に着くまで不自由なことなり

▲公共便所 英國風にて概ね地下に在り奇麗なり

(百十三) 米陸横斷

此日(九月十一日)午後五時頃宿を出でんと、帳場にゆきて勘定をおし居たるに傍らに肥滿せる一老紳士あり、フロックコートに山高の帽を被りたるが君は日本人かと問ふ、然りと答ふれば、我れは先年しばらく箱館に在りたることあり、ハカブール

ドと申すものなりとて例に依つて種々讃辭を呈し、且つ番頭に向ひ此お方は日本の紳士ゆへ特に注意して待遇せよと勸告す、既に立つときになりては注意も待遇も間に合ふたはなしにあらねど、何さま資本のいらぬ親切なりけり、さて予は勘定を仕舞ひ、手荷物を卸して呉れよと命じて待ち居たるに、一男玄關より來りて馬車は宜しうムいますといふ、馬車は宜しうもムらうが、まだ手荷物が下つて來ぬといひたき所をしはぶきにまぎらして、兎も角もと出て見れば表に着けて居る二頭立の馬車に大は外に積みて合羽をかけ、(大雨中なり)小は車内に丁寧に積みてあるが、悉く是れ予の手荷物あり、五階の五百六十何番といふ室に在りたるものを、何時の間にも何處から卸して(但し人間昇降器の奥に手荷物昇降器あり)何處で積んだのか、其手廻しの敏捷なるには流石の僕も恐れ入つたり、但し停車場まで五六丁の所を二弗とは價も甚だやすからず、斯くて午後正六時、新約克大中央停車場を發し、先づ北に向ふ、抑々新約克よりサンフランシスコに至るに、南北數多の線路あり、其距離約三千二百哩にして、日に依り線路に依り等級に依り到達に遅速あり、且つ乗替の多少あり、一等最速五晝夜にして、二等は半日遅延することあり、且つ一等にして睡眠車あれば、車を以つて接続する場合に二等(稀に睡眠車あるときあり)は人を以て接続す

るものと見えて其乗替の度數頗る多し、料金は二等七十米弗、一等約八十米弗(睡眠車座敷車等は此外なり)予は睡眠車なしの二等を買ひたり、多少の不便困難は覺悟の前なり

車室は一二等とも一にして、其堅固廣大美麗なる宛然宮殿を見るが如く、床には絨氈を敷き詰めありて全く睡の吐きどころもこれなし

#### (百十四) 米陸横斷 (續)

車中にては手荷物を持つたの仕掛けにて、椅子の下には足かけの横木ありて、何ものをも入るゝ能はず、眞鍮の網棚はあれども僅に帽と傘を保つに過ぎず、剩さへ此夜乗客満車にて一の空座もなかりければ、銘々多少の手荷物は足を置く筈の所に之を置きて、足は其上に置かざるを得ず、其窮窟さ言はんかたなし、但し此窮窟が嫌ひの者は、一等に乗つて睡眠車券を買ふべしとなり

七時過晚餐用意済みと觸れて廻はる、空腹なるまゝ、急ぎ食堂車にゆくに途、數多の睡眠車、座敷車あり、睡眠車の寢床は汽船のよりも廣き程にて頗る快適に見受けらる、最後に食堂車あり、設備家屋内に異ならず、只其價は頗る高く、一食一弗半の料理は新約克の七十五錢のに劣れり

新聞雜誌小説菓子(但し食はれぬ様な菓子)菓物等の賣子乗つて居り、時々廻つて之を賣る、新聞紙の外何もかも常價の倍以上の高價なり

九月十二日 火晴

朝六時パツフロロに着く、是れまでは新約克中央及びホドソン河鐵道會社の線路にして、是れよりは湖岸及びミンガン南方鐵道の線路なり、依つて茲に乘替を要す此地ナイヤガラ瀑布の上流なるエリ湖の岸頭にして、瀑布までは僅々二十五哩に過ぎず、されど此線路にては一日茲に休止せざればゆくこと能はず、此所の一日は桑港の便船約十日の差となる故、殘念ながら件の瀑布は彼處の山の下なりと遙に眺めて過ぎゆく

此日乗客少し、車中起臥自在なり

道は湖岸に沿ひて通ず、右は水波天に連なり、左は廣原亦天に連なる、所々小都市あり、農村あり、葡萄、玉蜀黍、黍の畑あり、蓋し此邊米陸の胸膛にして、沃野千里、耕牧未だ餘地あるを示せり

(百十五) 米陸横斷 (續)

米陸を横斷するに四個の異なる標準時間を経、東方時間、中央時間、山岳時間、太平洋

時間是にして、各一時間づゝ遅速の差あり、新約克よりパツフロロまでは東方時間にして、パツフロロ以西は中央時間なり、依つて時計の一時時間を逆退せしむ車中玉蜀黍のいはれこし、菓物など賣つて來る、食ふべきものなし、土地の乗客悉く大なる辨當を拂ふ

此日午後食堂車なし、七時頃晚餐の爲に二十分間停車す、是は前驛よりの注文に依りて準備し居たるなり、さて下りて食堂に入るに、既に一切の食品を排列しあり、頗る粗末、七十五米錢、男一人乗りおくれたるものあり、何とせしか

夜十時半市俄古に着く、市はミンガンの湖畔に在り、米國第二の都會にして、人口百九萬九千餘、百年前迄は無人の沼澤、九十年前一小兵舎の建設あり、爾來年々に倍加して此繁盛をなす、新開國として何もかも速かなものなり

一時間以内の待合あり、停車場附近を散歩して歸る、此地鐵道三十六線の集合所なり、各線茲に乘替を要す

十一時半市俄古ロックアイランド及び太平洋鐵道の線路に依りて發す、車中暖爐に火を焚いて居る

九月十三日 水晴

午前野中に汽車止まる、鏡き見れば、前路鐵道破壊の跡あり、地掘られ、車輛の破片堆

積倫敦の新聞紙にて見しストライキの爆裂薬を仕掛けしは此邊なりしか、線路は假修繕をさしあり

汽車徐行して僅に過ぐ、ゆくこと二時間、停車場の出火して、餘燼尙燃えつゝあるを見る、更にゆくこと一時間、新着新聞紙を賣つて來る、コルネリアスバンドーピルト昨夜心臓麻痺の爲めに五時間病んで死したりとの事を報じ、其肖像傳記を載す、氏壽五十餘、一兩日前予が其家を見物せしときまでは醜醜黃白を數へ居し人なり、實に世の中の有爲轉變は、汽車の走るよりも速かなりけり、午後八時オマハ市に着く、河に沿ひたる一都會にして、彩燈波に映じて燦爛、夜景頗る美麗なり、直に乗り替へて發す

九月十四日

木晴

是れまでは耕地盡きて牧場あり、農村絶えて牧舎あり、未だ甚だしく兩眼の無聊を感ずるなかりしが、此日に至りて蓋し昨夜よりなるべし、四顧全く茫茫、無碍無邊、無木、無水、無家、無人、稀れに鐵道守護の小兵舎あるを見るのみ、若し亞弗利加の沙漠を沙漠と呼ばば、此所は應に野漠と名づくべきもの、其徒然にして氣味惡き、決して沙漠に譲らざるなり、やゝありて前方遙に白頭の山嶺を望む、落機是れなり、新約克以來山を見るの始めとす

斯くて正午過デンバーに着するまでは全く停車せず、停車する如き場所なきなり、此日歐羅巴ブラン(一品づゝの價を算す)の食堂車あり、デンバーに着く、此所に半日の待合時間あり、迷惑ながら詮方なければ、停車場を入つたり出でたりし、乃至市内を散歩して日を暮らす

### (百十六) 米陸横斷 (續)

デンバーは山中の一都會、山越え諸線の集合せる所なり、地海面を抜くこと五千百九十八呎、但し別段寒を感せず

此日歩兵第何聯隊の凱旋、馬尼拉よりの歡迎會あり、停車場、汽車及び千門萬戸國旗をかざりて市中頗る賑はへり

午後七時十五分太平洋急行車に依りて發す、是れよりは山岳時間にしてデンバー及びライオ格蘭ド鐵道の線路なり、此夜より落機山に入る、明日一日が山中の見物なり

各車始めて喫煙室あり、地獄で極樂と喜びていたり見るに倫敦人の所謂タバコスモーキング、ビアドリンクキングのドレッドフルビープル室に満ちて、高談喧語近づくべからず

九月十五日

金、天氣多變

三五六

朝六時、車は一萬二百四十呎の最高點を既に經過して、正に八千六百呎の所に在り、雲霧を排して現はれ出づるは何ぞと見るに、滿目一望の銀世界、單に雪の積れるのみにあらず、今現にふりつゝあるなり

山中所々に小村落、牧舎、兵舎あり、午前十時半グランドジャンクションに着す、是れよりライオングランド西方鐵道の線路なれども乗替を要せず、既に落機山は越えたり、其景色は如何といふに、未だ一もこれといふべきものに出逢はず、只人工が天險を破れるの跡は稍々見るべきものあれども、其れすら日見長崎の堀割の幾分長しといふに過ぎず、況いて懸流の黃濁し、山の無風流に枯げたるなんと、ますます予を失望せしむ

斯くて午後二時グリーンリバーといふ所に着せしに、水始めて碧なり、忽然雲起りて、解然一聲、指頭大の雹降り来る、さては落機山神の馳走は斯んなものに止まるかと胸中に嘲けり、猶ゆく程に、山神最後ので馳走は來れり、狭少の平地岩山を繞らす、岩山赤裸千狀萬態、人の立つ、走る、居る、虎の哮る、熊の躍る、さては兜岩、重箱岩、鱗腐岩なんぞ申すべきもの、連續せるもの、約二哩、汽車徐行して賞覽に便すれば、我は居るが如く、山は往くが如し、實に落機山神の行列、此山の絶勝之れに過ぎずと、人々喝

采歌呼する程に、予も十分に思入れをしては見たが、さて中々に心ゆかず、如何にも七日無山の洋、大西洋四日無山の陸、米陸を經來り、始めて這個岩山を見ては、眼に珍らしからざるにあらねど、到底予には満足出來ず、落機山の山奇は奇なり、美や未だしうましくはうましやまどに

なれしみには

るのさいやまもあのみなりけり

斯くて落機探勝は全く失望に歸し了んぬ

### (百十七) 米陸横斷 (續)

夜九時鹽湖市を經て十時半オグデンに着す

オグデン高さ四千二百九十二呎、桑港への距離約一千哩、三十二時間にして達するを得

是れより太平洋時間なり、さて此夜午前一時四十五分發車の豫定なりしに、今晚のは都合あり、四時間遅延、明朝五時四十五分になりたりといふ、時間表にも廣告にも一時何分とあるものを、自分の鐵道とは申しながら、得手勝手に變更せしなり、無責任と申すの外なし

三五七

兎まれ停車場にて夜食などする程に十二時過とはなりにけり、今よりホテルにゆきても眠る間はあければとて、待合所の椅子に居睡して待つ、待てば半夜も長さものなり

九月十六日 土晴

朝五時四十五分、南太平洋會社の急行車にてオグデンを發す、途は大鹽湖に沿ひて砂濱沼澤原野丘陵、全く無人家の境をゆく  
汽車古く且粗末不潔、食堂車なし、乗客亦頗る下賤なり、午前十時ターレースにて十分間停車朝食をなす、珈琲サンドウィッチを争ひ食ふ、餓鬼然たり、貧民の兒女車中に珈琲を賣る、不潔極まる  
やがてマウンテラップといふ所にいたれば山嶺雪あり、景色始めて稍々美なり、パツトルウンテンにて日暮る

九月十七日 日晴

朝來丘陵森林を過ぐる多時、稍心地よし  
此日非常に暑く且つ沙塵車窓に滿ちて屢々鼻孔を塞ぐ  
午前九時半サクラメントに着く、カリフォルニア州の首府にして、河上林中の一都會頗る心地よし、太平洋岸南北に至るの鐵道此地より分岐す

昨日來屢々支那人を見しが、此日此地の停車場にて始めて日本人を見る、但し落機、以西支那人日本人は概して労働者たるべき筈のものと看做さるゝことなり

ふるさにちなめば名だにしたはれぬ

さくらめんどに咲く花やあると

されど花とてなかりけり、直に發し愈々桑港に向ふ

又沼澤原野を経て午後一時過オークランドに着く、此地金門灣の奥にして、桑港は其前面なる半島の端に位置す、されば廻はれば銅のつるの如くなる故、是れより船にて渡すことなり、汽車を下りて乗り込むは渡し舟、廣大美麗なる家屋なるにぞ兼ねてはなしには聞き居たれども、尙何となく不安心にて其家屋の端まで見にゆき、愈々其れが船なることを確かめて而して後に坐るに、やがて近邊が動き出して十數分間の後桑港に着しぬ、此間船中金貫ひの樂隊あり、斷えず奏樂す、一寸の渡し船としては蓋し世界第一なりかし

午待二時桑港プシユストリート、ブルークリントンホテルに投ず

### (百十八) 米陸横斷 (續)

▲車中所見 倫敦にて、米陸を經來りし官吏輩の談に、日本にて威張るものは洋



行さずることとなり、うして米陸を通れば學者も大臣も小供扱ひにて、銘々鞆を提げて汽車を尋ねて廻らねばならぬ故、随分上げせが下がるべきあり、もうく米陸の通過にはこりくした云々といふを聞きしが、果して其通り不便困難には相違なかりき、新約克より三千數百哩、五晝夜餘の間六回の乗替を要せしに、乗替少きは一二回にて済むことあり、新約克の外、停車場にホルターなく、自分で手荷物を持たねばならず、力に餘るものを両手に提げて何處ゆきは孰れじやと尋ねて廻る有様はどうせ鳥羽繪にかゝねば其状を盡されず、何さまふさまの事どもなりけり、一二の大驛にては列車に表札を掲ぐれども其他にては聞かねば分らず、それは旅中の一興としておとは笑ひの種なるが、さて大體を観ずるに汽車の構造設備は流石に世界第一にして、各停車場の飲用水が悉く氷水なるを見ても、亦其贅澤の状を察すべきあり、

但し食品は頗る不自由の時あれば何か豫備乃至補足として携ふるを便とす、汽車及び乗客とも新約克を距ること遠きに随つて漸々悪く、落機山西オグデンに至りて全く一變せり、

沿道の廐家は悉く木造板屋根にして、意外あるは其大家なく、孰れも小舎あることなり、我邦の田舎には巍峨たる豪農の家所々にあれども、此國にては一もあるなし、

蓋し此國の農民は悉く小作人にて、且つ其作物收穫は之を畠中にて終了する故別に大なる廐舎を要せず、旁々此の如きなるべし、

意外なるは落機山西オグデンまで四日の間、昇降の乗客乃至停車場等にて見る所の男女、其服装體裁の奇麗にして、倫敦巴里新約克等に多き貧民の状をなせるものこれなきことなり、

意外なるは落機山中所々人家村落市街あり、其頗る開化せることあり、蓋し此邊までの所家三戸あれば停車場あり、停車場あれば郵便電信局あり、ホテルあり、十戸もあれば二頭立の馬車あり、百戸もあれば動もすれば電氣鐵道あらんとす、米國の文明は其政治上の自由と共に山嶺の樵戸牧舎に至り、また平等に普及せるを見る、而して是れ一に鐵道の方なり、

山西に至れば一變せり、風俗言語家屋萬端悉く山東の比に非ず、是れ米陸の背なればなり、新開國中の新開地、尙新らしき各邦流氓の集合地なればなり、

### (百十九) 米陸横斷 (續)

▲手荷物之事 無くて不自由、有つて邪魔、旅行に手荷物程厄介なるものはあらざる程に、今初旅行者の参考までに、予が經歷せし道中に於ける、手荷物の狀況一

般を記す、幾分にも其厄介を減少せんことを欲してなり

先づ日本より海路西に向ふとすれば、日本船は姑く措き、手荷物無賃の制限は加奈陀船が一等三百五十磅、エム／＼船が同三百三十磅なり、さて英國に上陸すれば同國鐵道の制限は一等百十二磅なれども、是は只名のみにして實際は殆んど制限なく、三等に乗り大の荷車一杯の手荷物を持つても何の故障面倒なく通して居て、而して尙同國の特色とも申すべきは他國の如く、合鑑を渡さず、彼我全くの放任にて到着すれば一の紛失なく、間違なく、元の通りに揃へて引渡され、乃至混同したる場合に於ては、各人各其手荷物を撰び取つて一も間違を生ぜざることなり、國に依りては、他人の合鑑を盗んでさへも猶ほ盜賊をなさんと欲するものあり、然るに此國にては右の通り數さへしらすに授受して間違ひなしとは、何さま感すべきことなり

さて、佛國に渡れば一等五十六磅、英國にては成るべく車中に携へず之を預くるの習慣なれども、佛國にては成るべく携ふるの例なり、伊國にては全く無賃の物なしといふ

太西洋各汽船は一等二十立方呎、二等十五立方呎、三等十立方呎にして、次に米陸鐵道となりては、支那日本行の通切符が一等三百五十磅、二等百七十五磅、太平洋岸に

至る鐵道のみ切符なれば各等百五十磅なり、而して當國鐵道にては前にも記せし如く車中には携へ難く預けて若しも制限に超過すれば其超過額百磅以内に付き、一等最高乗客賃錢の一割二分即ち約二三十圓を課せらるゝとなれば、旅行者特に注意するを要す、若し右様超過の手荷物ある場合に於ては、前以て普通貨物として輸送するを便とするなり

米陸を離れて日本に至る太平洋汽船が一等三百五十磅

凡る船中日用品のツランクは長さ三呎一時以内、廣さ一呎九吋以内、高さ一呎三吋以内のものに非ざれば、之を其居室に置くこと能はず、各地商店に平たき木函あり、是れ彼阿形と稱するものにて正に船室の床下に容れ得べく造られたるものなり、予の知る或人之を購ひ餘りに淺しとて足繼ぎをさせたるに、右の限度に超過して迷惑せりといへり

凡る手荷物の箱は、少くとも其容納品を十分に保護し得べきもの、切言すれば投げてもたゞいても破壊すべからざるもの、更に換言すれば投げる筈のもの、顛ばす筈のもの、豫想せらる、斯くて重きは器械にかけ、輕きは手を以て投げ、且つ顛ばざる、故にツランクは何種を問はず、十分堅固なるものを選びざるべからざるなり、此點に於て和製の鞆類は一文の價値なし

(百二十) 桑港

予の宿りたるブルトクリンホテルは六層にして通例のものなり但し人氣宿屋と見えて、宿客頗る多し、予は歐米ホテルのどまり納めなればと、二階で五番といふを張り込む

さて新約克より三千數百哩靴も脱がずに走つたることなれば、流石の旅行好きも旅のやつれのくすばれる顔に見えける程に、何はさておき温浴を命じて浴一浴し、服など改むる程に日は暮れたり、餐後近街を散歩して早く寝る

九月十八日 月晴

當地に住する星野某氏予の同郷人とあつて、倫敦金澤氏よりの紹介ありたれば、此日早朝訪ひゆきしに、氏は商品仕入れの爲め歸國中の由にて逢はず

朝餐後取敢えず汽船會社にゆきしに、明十九日の出帆は取消したりといふ、予は六千餘哩の倫敦より其船に乗る豫算にて斯くは晝夜を兼ねて來しに、取消したりとは曲がなし、さて何故の變改ぞと詰り問ふに、馬尼拉へ兵員輸送の爲め該船(リホドジャチロ)政府に借り上げられたりといふ、成程其れは餘儀ない譯、而して次便は本月二十九日といふにぞ、仕方がなければ更に十日間、此所に遊んで待つことに決す、斯ういふことゝ知つたらば、落機山東に猶ゆるく遊びたき所もありしにと思へ、今更追付かず、さて此田舎に十日といふもの、どうして明かし暮らすべきか、唯一の研究問題は太平洋岸日本労働者の狀況是れにして其他幸ひ巴里以來未了の原稿澤山なれば、先づ其等を片付けて其餘は散歩でもして消閑すべきなり

さて、領事館にゆきしに、領事は地方巡廻中にて不在、三井に立寄り、有名なる金門公園にゆく

▲金門公園 市の西方の丘上に在り面積一千二エーカー、其規模の廣大にして設備の具足せる、毫も歐羅巴の大公園に譲らず、而して猶ほ之を擴張して市の中央なるマーケット街まで、引張り出さんとの事、目下計畫中に在り、壯といふべし

(百二十一) 桑港 (續)

九月十九日 火晴

稍々寒し、冬下着に改む、六月初旬倫敦に於て、夏下着に改めしより、彼地の盛暑巴里の秋、落機山の雪中を通じて、始終冬服夏下着にて濟みしなり  
因みに、當地の氣候は頗る佳良の方にて夏暑からず冬寒からず、夏或は寒きときあり、冬往々暑きときあり、之を概するに、年中を通じて殆んぞ同様なりといふ、但し晝

と夜との差は頗る甚だしきが如く、特に風あり夜は外套なしには出られざることあり

空氣は甚だ清澄ならず、朦霧常に四邊を鎖せり

九月二十日 水晴

午後新世界社にゆく、新世界は當地に於ける日本字新聞紙なり、創立以來五六歳基礎既に定まれりといふ、社主は佐賀の人にして副島八郎氏といふ、新聞は六頁の日刊にして、記者三人、職工五人にて之を完成すとは驚き入つたる手際なり、印刷には石油發動器を用う

日本字新聞紙は當地別に日米といふあり、元と日本と北米との二新聞なりしを昨年頃合併せしなりといふ

九月二十一日 木晴

九月二十二日 金晴 閉居執筆

九月二十三日 土晴

▲大袈裟の國 米國は善惡萬事最も大袈裟の國にて、其國人の計畫企圖、杜大快活感服すべきもの枚擧に遑あらず、但し感服とは少しいひがたきは山賊事業の大仕掛あるにて、現に一兩日前太北鐵道の軌條の下を掘りかへし居たるを、幸ひ技手

が発見して難を免かれたることありしが、昨日は亦南太平洋鐵道予の經來りしもの線路を掘りかへし居りて、汽車顛覆車掌即死の變事を見たり、而して是れ皆な山賊の所爲なりといふ、此他ストライキが鐵道に爆裂藥を仕かけ、乃至家を毀ち人を殺す等の事は新聞紙上屢々見る所にして、或る一方より見れば米國は寧ろ物騒な國柄なり、其國民は愉快な事もするが亦頗る亂暴なこともする國民なり  
此夜市中を散歩し居たるに、マーケット街の一端より爆聲轟然、車聲轆々及び樂聲囂々として練り來るものあり、何なるぞと見てあれば先陣に打つたるが變色光の大籌を焚き、大の唐人鐵砲を屋上窓邊無鐵砲に打揚げて來る馬車數輛、次に樂隊、次に騎馬の男女、次に煙火車、次に樂隊、次に象五頭、駱駝六頭、熊、熊、獅子、虎、豺、狼、次が何、次が何、其特製馬車の金光爛燦たる、其男女裝束の華麗なる、孰れも目を驚かすばかりなるが、半哩以上も續きたり、馬車何十輛、人幾百人、其數を知らざる大行列、大操練、さまざまとさきこといふばかりなし、而して是れ何ぞと見れば、凱旋軍隊に非ず、天竺國王の入朝に非ず、木戸錢タツタ二十五錢の水蒸及び見世物の外題觸れとは、亦以て一切萬事仰山なるの狀況を察すべし

(百二十二) 桑港 (續)

▲市の大観 創立以來五十年、人口三十餘萬に至り、凡そ西洋文明の事物一として備はらざるはなし、實に是れ米國太平洋岸隨一、寧ろ唯一の大都會、田舎じやからとて侮るべからず

市は丘陵起伏の間、其丘陵を其まゝに天窓となしにして建てられたるにて、市の中央を斜めに貫き、市内各町の一端を必ずこれに結び着かしめたるマーケットストリートの一街のみが、平地にして其餘各町殆んど悉く坂路あり、而して其坂路の急なる、歩めば滑り落つる位、立てば目のまぶ位なるに拘はらず、些の遠慮用捨もなく、縱横無盡に電氣鐵道、針金鐵道を通じて山より海、海より山各町殆んど其一線を有せざるはなき有様、其人工の壯なる感服の外なし

但し道路は右の如く峻坂にして、且つ車道は小さき敷石なるを以て、二頭立一頭立の馬車はあれども之に乗ること不快不便、且つ之に乗るの必要もなし  
家屋は概ね木造ながら結構必ずしも野鄙ならず、通常三四層以上高きは十五六層に至るあり、悉く地下層あり、地下に大商店大料理店を開けるもの亦頗る多し  
家屋の形狀は巴里風あり、倫敦風あり、新約克風あり、其錯雜せること猶ほ住民の錯雜せるが如しと雖も、非商店街は倫敦風頗る多く、體裁可なり  
商店亦頗る大仕掛にして、少き品物を廣くあらべたるの狀は、猶ほ田舎風を免かれ

ずと雖も、而も其一部分の如きは却て新約克より奇麗なるやの感あり

▲物價勞銀 頗る高く、白人勞働者一日二弗、風呂二十五錢、髪摘一切七十五錢乃至一弗に至るあり、特に其細小の雜品に至りては倫敦一片のもの十五米錢二十米錢を價す、聞く當地にて小賣品は原價の倍が通例なりと、況いゝ外國生産品に至りて別に一倍内外以上の關稅を課せらるゝことなれば、其高價なる亦無理ならざるなり

是等一切の物價に反して減法にやすきは食品にして、ホテル、料理屋の料理二十五錢を通例とし、以下飲食店にては十五錢を普通とすといふ  
店頭麥碎、玉蜀黍碎等を賣るを見る、亦減法に廉價なり

勞するものは勞銀高く、商ふものは商利多く、而して生活上最も必要の食品はやすし、以て金を儲け得べく、善へ得べきの地にあらざるか、否か

### (百二十三) 桑港 (續)

▲支那人街 チャイナタウンと稱して有名なり、マーケット街に遠からざる市中に在り、最初は商業の中心たりし場所なりといふ、別に一廓をなせるにはあらず、れども、縱横數街の一部分づゝを併せて約方形をなし、其間悉く支那人の住なり、自

ら別世界をなす

人口約三萬を有し、例の支那人のことゝて單に家屋が洋風なるのみ、其内部の萬端は論なく外部の裝飾悉く支那風なり、酒房、私窩窟、劇場賭場、凡う支那人生活上の事物悉く備はる

さる程に歐米好奇の客の此地に來るもの、必ず案内を取りてこれに遊び、其奇態なる生活の狀況を視、乃至一食を其不潔なる割烹店に試みるを常とす

近年支那人上陸を禁せられて、其死するもの歸國するものより生るゝものを差引きたる數は正に其人口の減少を示す、然れども一方に於ては當國吏胥の賄賂に盲なる、一二支那人の資本家之に乗じて盛んに人間の密輸入をなすものあり、隨つて其人口の減少割合に迅速ならずといふ

何にせよチャイナタウンは當地有數の呼ものにして、而して米國人が之に對して生ずる侮蔑嫌惡の感情が、延いて日本人の頭上に波及するもの少らず、日本は支那の屬國に非ずとの事は、概ね承知せられたるべしと雖も、日本人は支那人と同種族同性質のものに非ずとのことは未だ一般には認められざるなり

▲風俗一斑 當地は五色人類の集合所として、歐米に有名なるだけ、如何にも其住民は各色混同にして、更に之を其生産の國籍に分たば、蓋し地上の萬國を含むな

るべし

隨つて其風俗も各種各様にして、殆んど一定する所なきが如しと雖も、表面の大体は無論米國風特に桑港風にして、其言語舉動の粗暴亂雜なる、抑々此地金山の爲めに開かれ金山の爲めに發達したるものなりといはゞ、世人以て其大概を察するに難からざるべきなり

所々秘密療治云々の醫師の廣告あるを見る、日本の如く梅毒痲病せうからかんと明記せざるだけがまだしもならんか、何にせよ男女間の徳操亦必ずしも純潔をらざるを察せらる

風俗右の如しと雖も、其服裝の如きは殆んど一定せるものあり、曰く男子は背廣と殆んど同長なる短き外套を着て居ること、山高に非ざれば米利堅帽の割合に上等なるを被つて居ること、女子は支那人の外、黒女と雖も必ず洋服し必ず帽を被つて居ること等是れなり、日本の女子地下に潜み居るもの少らずといふ未だ路上に見當らず、男子はまた往々絹帽せるを見る、實る意外なり

(百二十四) 桑港 (續)

九月廿四日 日晴

散策中某寺院に詣つ、寺院構造頗る大、參詣人頗る少し、祈禱禮拜の式英國のと異なり、女子の服装亦美なるもの少し、最後賽錢を集むるに盆を廻はす英國にては盆盆上銀貨の堆きを見る、蓋し米人信心は薄しとするも賽錢には張り込むものか、否な一鉢に金が荒きなり

九月二十五日 月晴

此頃在留日本人中の有志者某々氏等サクラメントより訪ひ來る、面談數回頻りに在留同胞の狀況を慨し、其救濟策といふものを説かる

九月二十六日 火晴

此夜三井の支配人小田柿捨次郎氏に誘はれて散歩し、日本料理小川亭といふに飲む亭は某街の裏に在り、大体は洋館の中に室内更に日本室を造る、其法固有の洋天井の下に杉板の日本天井を張り、壁を穿つて圓窗を造り、戸の代りに障子をたて絨氈の代りに花莖を布きたるにて、且つ床を造り袋棚を造り床に怪しげの幅を懸け其他柱かくしなどを滅多にかけたり、席は此夜は椅子卓子なるが客に依りては坐ることも出來、座蒲團さへもありと申す、蓋し當港日本料理店數多ありと雖も、日本室あるは此家のみにして、此家にも只此一室あるのみ、料理は鋤焼に鮪の刺身などあり、其味ひに覺えのある程、いづれ想郷のたねならぬはなし、瓶詰正宗生々として

酔なり

九月二十七日 水晴

領事館にゆき共に午餐す、領事陸奥廣吉氏は名流の故か、快活伶俐且つ精勤、ゴミも芥も引受けてお庄屋様が村民に對せし如く、在留邦人の尻拭ひに勉強し居らる、蓋し此地の在留民は國旗の光りをかややかすもの殆んどあるなく、公法も職權も義理も耻も辨へず、出來るとでも出來ぬことでも、何でもかでも難題の尻を領事館に持ち込むものぢなり

當領事館在勤の首席書記生を天野恭太郎氏といふ、我郷の父老天野信敏翁の令息なり、氏令閨及び二女子を携へて館に寓す、仍て招かれて此夜またゆき日本食の饗を受く、餐後氏の座室に入つて語る、壁上二個の寫眞額を掲ぐ、双堂の小照を此地にて引延べに附したるものなりといふ、予未だ令媪を知らず、令翁寬爾笑つて語らんとするを見る、歸り謁せん日の思ひ出でられてなづかし

九月二十八日 木晴

明日出發布哇を経て歸國せんとす、此日準備を整へ終る、當國滯在中見聞調査せしもの、中、今日までに記せざりし所、左に概要を記述すべし、但し事の評論にわたりて、本記に編入するに便ならざるものは例に依りて他日

に譲る

▲大様の國　米人の大袈裟なることは前に記せり、是と同時に米國は大様の國、米人は大様の民なり、蓋し此國地大人少、歐羅巴の如く楊枝で重箱搜す的には萬事行きわたらず行届かざるなり、其結果として例の私罰など尙往々にして行はれ、乃至一村郷邑の氣に入らぬものを其決議を以て境外に放逐する様の事少らず、是等は大様よりは寧ろ亂暴と謂ふべく、自由の國が不自由の國なり、或は租税を請負に附することあり、例へば此區内村内の何々税を幾何金にて引受くるか、引受くるといふ約束を當局者と取立人との間に締結し、取立人は其請負額以上の収入を得れば以て利益となすの仕組なり、斯くて途上荷馬車に逢はんか、オ、お前は税は出したか、未だしならば僕にお拂ひなさい、僕は何々税の取立人だといふ様な始末、何ささ申談見た様な場合さへ少からず、其一方には故意ならぬ脱税者も亦少からずといふ、是等は大様の一例ともいはんか

(百二十五) 桑港 (續)

▲拙速の國　米國は亦拙速の國なり、蓋し米人が此國土を經營するは、螻蟻が巨鯨を料理するが如し、到底腕力に依頼すべからず、因つて器械の利用は盛んに、巧運

は斷じて間に合はず、因つて拙速は貴ばれ、隅々にはゆきわたらず、因つて大様の風は存じ、鄭重謹慎は面倒なり、因つて亂暴の弊は生ず、事情の止むを得ざる所なり、今拙速の數例を記せんに、米人が土地を開墾するや、鋸車にて立木を伐倒し、幹枝は之を焼き、株は之を掘つて亦焼棄し、器械以て耕鋤し、播種し、收穫す、乃至材を要するときは數丈の大木を數馬に挽かせ、樹林藪澤無暗に逐ひもてゆけば程なく一條の大路自然に通ず、其港を築くを見る、密に大材を打込んで中に土を盛り、以て岸とし、更に大材を植て、上に板を敷き以て棧橋とす、而して材の未だ腐朽せざるに於て、其地の繁盛態くべきに達し、忽然海岸は石となり、棧橋は鐵となる、其鐵道を敷くを見る、亦先づ架するに木橋を以てす、甚しきは原野其まゝにして直に枕木をならべ、て軌道を通じ、其れに汽車を走らせて利を得る、巨萬其利を以て正式に改造せし例さへありといふ、家を造る亦斯の如く、假屋がやがて本屋となり、木造が石となり、鐵となる

米人の事業は斯く拙速なり、拙速或は不秩序に似たれど、實は最も適切なる秩序なり、我邦文明に對しては、亦最も新開の國、國狀米國と相似たるもの多し、米人の拙速豈に顧みるに足らざらんや

▲腐敗の國　商工農實業の進歩の活潑ある、天下米に及ぶもの鮮し、而して他の



一方には政治上の腐敗あり、蓋し實業界の潮流の急あるだけそれだけ政治界に沈滞を生ずるものか、其等の事情原因は姑らく之を別問題とし、兎に角實際の腐敗は顯著ある事實にして、官吏收賄議員買収など行はれ、甚しきは百弗の金貨は法官の意志を左右して、死罪囚を無罪となすことさへありといふ、中央地方の公吏が公費を以て其黨人を養ふ如き、固より珍らしき事にあらざるなり、陸奥氏歎じて曰く、予は日本の政界が遂に米國の如くあるに至らんを憂ふと、予笑つて曰く、予は日本の政界が既に米國の程度を通り越したるを憂ふと

### (百二十六) 桑港 (續)

▲貿易 當港日本間の輸出入總額は昨千八百九十八年中一千二百六十九萬八千三百七十七弗、内輸出四百五十一萬二千四百四十五弗、輸入八百十八萬八千七十二弗にして之を前年に比すれば輸出に於て百四十七萬千八百四十九弗、輸入に於て百八十一萬九千五百二十弗を増加せり、即ち當港日本間の貿易は輸出入ともに、年々著しく好況に向ひつゝあるなり

又當港と各外國間の總額は、昨年の分合計六千八百七十四萬二千三百四十二弗、内輸出三千二百六十七萬九千二百八十八弗、輸入三千六百六萬三千二百二十七弗にして

即ち日桑貿易の金額は、桑港全貿易額の約二割に當る、桑日通商の關係は頗る重要なるを見ると共に、米に對する我國の貿易は尙若干の餘地あるを示せり、

▲在留日本人 我邦人海外に在留するもの舊布哇國及び韓國を除きては、當北米合衆國を最多とす、而して當國在留本邦人布哇を除き七千餘とは我邦公簿に註せらるれど實數に非ず、其中に就き桑港及び其附近加里福尼亞州在留者五千餘とは是亦當局者の公報なれども、同じく實數には非ず、蓋し當國在留者に就ては當國政府に其簿籍なく、我領事館亦之を編する能はず、隨つて在留者は其本國に於てこそ籍を有すれ、當國に在りては無籍あるを以て、其數を知るの憑據なく、當局者にては止むを得ず、當國移民局の移民出入數、本國に於ける旅券下附及び返納數等を斟酌參照し、これによき程の推測と掛引を加へて、其現在數を假定するものなれば、其報告はあてにならず、只概略の標準となるのみなり

兎まれ、當加州の在留者數は、前掲公報よりは頗る多からんとは、衆說の一致する所なるが、さて其等の在留者は、如何なる状態にて過活するかといふに、十の九以上は労働者にして、遊學の旅券を所持するもの、大部亦此中に在り、但し彼等は學生と労働者を兼ね、或は學生と労働者の早がはりをあすなり、官吏家族を合はせて數人、商人十の一以内に過ぎず、其商人も對外人の商賣をなすもの、單に一二の雜貨商の

るのみ、其他は悉く在留日本人あての商賣のみなり

(百二十七) 桑港 (續)

▲在留日本人(ついき)

以下其等の状況に付き稍々詳説せん

一、労働者

米國特に太平洋沿岸の北米合衆國及び英領加奈陀に向つて、我大日本帝國々民を代表するは即ち労働者は是れなるが、此労働者に大別二種あり、一は戸内の労働者にして、家僕料理人等を含み、家僕は日本に於ける書生の出来損ひにして、遊學の名の下に赤手單身漂泊し來り、其善なるものは毎日若干の習學時間を與へらるべしとの條件を以て奉公し、其閑暇もて夜學等に入り、且つ働き且つ學ぶ、所謂スクールボーイとなるあり、或は一年若干月働きて學資を得、以て學校に入るあり、或は若干の金を得歸りて東京にて修學するあり、全く自活自學を以て一通りの業を卒ふるに至るものなり、惡なるものは且つ働き、且つ消費し、終に入、出を償はず、もぐり博徒破落戸となるもの少からず、料理人は多くは汽船の料理人が上陸せしものにて、其人物は下賤ながら却つて蓄財をなすものあり、一ヶ月給料は家僕賄附十五弗乃至二十

十弗、料理人二十弗乃至三四十弗

戸外労働者亦數種あり、鐵道工夫掃除人、菓實摘採、葡萄乾し、草莓、小麥、砂糖、大根等の耕作夫等にして、勞銀一日七十五米錢乃至一弗半、或は労働者直接の請負にて仕事をなすことあり、斯るときは一日一人五弗以上にも當ることありといふ、

又耕作夫は冬季(凡そ十一月頃より二三月まで)閑暇なるを以て、勤勉なるものは此際山に入つて木を伐り、以て糊口の資以上を得れども、惰なるものは都會に集まりて遊食し、夏の所得を消費し盡して尙債を負ひ、乞丐同様の境遇に陥いるものあり、戸内労働者は寧ろ分相應より以上の身装體裁をなす方なれども、野外労働者は概ね淺黄木綿の洋服を着し、從業中はキャムブと稱する小さき板造りの假屋に、床をもかゝす、地面直ちに枯草を敷き、夜は本國より携へけん、ところ々穴のあきて色の褪めたる赤毛布一枚を纏ひて、コロコロところがり豚の如くもぐり込んで眠り、晝は自ら米を炊ぎて以て僅に飢餓を支ふ、衣食住の事斯くの如くなれば、否でも應でも金がたまらざるを得ず、數月ならざるに、腹巻の袋は黄金を以て充滿すれば、今度は遣はざるを得ず、市に走りて酒ムれ女ムれ賭博ムれ、湯水の如くに消費し去れば、元の空阿彌とならざるを得ず、斯くの如くにして、滯米十年、歸資無きもの十に七八、斯くの如くにして、若しか萬一同胞の品位信用を進むるを得ば、實に天下の不思

議なり、自ら小作をなせば利益更に多く、好結果の場合には二三百弗の原資を以て千弗以上の利を得ること容易なりといふ、而して小作をなすこと難事に非ず、假へば茲に十エーカーの地を借り、借料年額百弗の内五十弗は收穫拂とし、先づ五十弗の金を納めて其定約を締結すれば、之を證として農産の會社にゆき種穀も借り、播種器械も借り、尙ほ耕作夫の給料も借るを得べく、斯くて天の時到り收穫すれば、其産物を右の會社に交付し、諸費立替金の差引殘額、即ち純益を請取ることを得るなり、但し當地方の天災は旱魃にして、其爲めと及び鹽吹きと稱して鹽氣が地中より蒸出する變事の爲めに往々全損に歸することありといふ、何にしても小作就業の容易なるは、前述の通りにして、其利多く損少きに拘はらず、亦人外視せらるゝ支那人は、往々之をなすに拘はらず、我邦人之之をなすもの頗る稀少なるが、是れ畢竟するに何等の守操恒心なき、着實眞面目に經營するもの無きに因るとぞ

### (百二十八) 桑港 (續)

▲在留日本人のつゞき

凡る勞働者の需用は常に供給に超過するの狀あり、支那人日本人勞働者周旋日本

雇人口入、丁寧親切に取扱ふとの廣告は、當地和洋の新聞紙に多し、若し腰を据てかゝるならば、前述小作業の外猶ほ進んで土地を買ひ、土着の農業者となるを得べし、但し自ら地主となるには、初めより多くの資本を要すること勿論なり

#### 一、商人及び雜業者

商人といふべきもの殆んどあるなし、三井物産は開店したれど、尙ほ草創取調中に屬して手をひろげず、小田柿支配人次便に歸朝し、本社に稟議決定の上、漸次擴張の筈なりといふ

洋人向日本雜貨店二三あり、古く且信用あるを甲斐商會とす、マーケット街の附近に在りて、三四間間口の小店ながら、店員三人月額二百五十米弗の借家料を拂ふといへば、亦以て相應の利益あるを察すべし

其他は米酒日本人日用品賣捌、小料理、一杯屋、菓子屋、鮓、饅頭、蕎麥屋、風呂屋、髮摘、下宿屋等にして是等は悉く在留の日本人あてに營業するもの、更に人間外に下りて例の醜業婦二百に下らすといふ、亦以て在留日本人数數の狀態を推知すべし

#### 一、渡米の狀況

彼等が當國に渡來するや、書生は學資を携へず、商人資本を齎らさず、すべて空拳を

以て事を成し、金を儲けんとして来るなり、其志や壯とすべく、特に予に取つては同病相憐、最も賛成する所なり、然れども斯く冒險的に渡來するものゝ中には着後意外の困難に逢ひて、忽ち他人の厄介となる如きものあるのみならず、甚しきは上陸を拒絶せられ、乃至誤つて奇禍に罹ることあれば、新來者の参考の爲めに其狀況一斑を記せんに、凡そ當國に來るもの身体強健にして労働に耐へ、且つ多少英語を解せば、上陸の後は家僕となり、乃至は労働者となるを得べく、差向飢餓を免かるゝを得べし、然れども左の件々に注意せざれば上陸拒絶の厄難に逢ふべし、

一、契約労働者に非ざる事

二、嫌惡すべき病症、癩病、梅毒、其他なき事

三、公共の救助に依るの虞なき事

右第三項の爲めには本人相當の財貨を所持するの必要あり、所謂見せ金の検査行はれ、通例一人三十弗以上の提供を要す

然るに此事を知らざるが爲めに、拒絶せらるゝもの往々にあり、或者は斯ういふたらばよからうと思ひて、故意に事實を虚構し、何々の約束ありて其處にゆくと申立てたるに、第一項に當りて拒絶されたり、或者は斯う云ふたらばよからうと思ひて、故意に言葉を飾り、自分は學生にて學問の爲めに來れり、とんなことがあつても勞

働者とならずと申立てたるに、然らば結局公共の救助に依るの外なき痴者なりとて拒絶されたり、又或者は神戸か横濱かにて人に聞きたる秘訣といふものを實行せんとし、ソツと検査官に銀貨を握らせたるに、賄賂申出の犯罪者、英米の法賄賂は申出でたるのみにて罪あり、として忽ち獄に下されたりとぞ

因みに、本年六月卅日に終る一周年間、常港渡來の外國移民は總數四千七百六十六人にして、内日本人千六百六十七人、無筆者七十六人、此内上陸を拒絶せられたるもの七十七人、更に此内上訴したる者四十三人、其結果上陸を許されたるもの卅六人

(百二十九) 桑港 (續)

▲在留日本人のついき

一、生活状態及び地位

其職業の種類前述の如くなれば、生活状態も亦推知さるべく、且つは前來既に其事に言及したる所もあるが、尙之を補述せんに、當港に於ては日本人の日用品、飲食品及び娛樂の器具、落語祭文等時々興行せらる、殆んど悉く備はり、只欠けたるは藝妓と汗子の二種のみ、されば在留民の生活亦日本の生活をなし、只洋館に住し、洋服を着ることの外、日本語をばなし、日本の米を食ひ、日本の酒を飲み、日本流の酔酩をな